落第騎士の英雄譚（キャバルリー）

10

海空りく
RIKU MISORA
Illust をん

GA文庫

落第騎士の
英雄譚
キャバルリィ
10

わずかな攻防を通じて二人は理解する。
一人では手に余る相手だと。

少女たちはひとときの
休息を楽しむ――。

「――ッ、」
侵入しようとした瞬間、眼が合った。
部屋の中。
絶句する、――下着姿の女性と。

落第騎士の英雄譚（キャバルリィ）１０

海空りく

本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、SBクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。
本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

カバー・口絵・本文イラスト
をん

CONTENTS

プロローグ　奈落の蜘蛛
第一章　祭りが終わって
第二章　《深海の魔女》と《白衣の騎士》
第三章　ヴァーミリオン皇国
第四章　惨劇の開幕

プロローグ

奈落の蜘蛛

東南アジアの一角。
背の高い樹木生い茂る熱帯雨林の奥。
蔦に覆われたクメール建築の遺跡がある。
今はもう地元の住民にもその存在を忘れられ、朽ち逝くままの廃墟。
だが、その一角、窓の一つから明かりが漏れている。
大陽をすっぽりと隠す鉛色の雲から降りしきる豪雨の中、その輝きは目立つ。
炎ではない。
電気による文明の輝き。
それを発するのは……遺跡内部に堆く積み上げられたブラウン管モニターだ。
数えきれない程のモニターが映しているのは、すべて同じ少女。
燃えるような赤い髪を靡かせる、《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンの姿だ。
やがて映し出されている映像は、ゴミを見るような目でカメラを見下ろし、躊躇なく踏みつぶすステラの姿を最後に途切れる。
「いいなぁ……素敵だなぁ……」
同時に、熱い吐息が遺跡の一室に響く。
その吐息は、モニターの山に囲まれたソファーに横たわる小柄な影が発したものだ。
あの日からずっと、その者は寝ても覚めても彼女のことばかり考えている。
自分がこの場所から世界中で同時に演じていた、1762体の絡繰人形の一つ。
《道化師》平賀琉衆が破壊された、あのときから。

――美しいと感じた。

その整った顔立ちが。

鳥の囀りのように典雅な声が。

女性としての魅力に溢れた肉体が。

なによりも他人のためにあそこまで怒れる、魂の在り方が。

そして、だからこそ、その者は愚う。

この少女が、――欲しいと。

この少女を自分だけの人形にしたいと。

そして、遊ぶのだ。

この愛らしい顔を歪めさせ、

声が枯れるまで、その喉から悲鳴を絞り出して、

思いつく限りの方法で、彼女の美しい魂に汚泥を塗りたくる。

ああそれはきっと、そうきっと――

（とっても愉しいに違いないよ）

そう確信すると、もう居ても立ってもいられなかった。

だから、――行こう。

この広い世界で、彼女という存在に出会えた奇跡を噛みしめて。

彼女のすべてを手に入れるために。

彼女のすべてを、――壊しに行こう。

第一章　祭りが終わって

激闘に次ぐ激闘で、近年稀に見るほどの盛り上がりを見せた第六十二回七星剣武祭は、《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンを下した《落第騎士》黒鉄一輝の優勝で幕を閉じた。

彼らの戦いを見守っていた観客は、決勝戦から一夜明けた表彰式の後も、興奮冷めやらぬ様子で互いに二人の騎士の素晴らしさを語り合いながら、各々の家路につく。

同時に日本全国から集まっていたこの祭典の主役、各校の代表選手たちも帰郷。

七星剣武祭に便乗して店を出していた露天商たちも撤収し、表彰式の翌日には、湾岸の埋め立て地は元のゴーストタウンの体を取りもどしていた。

祭りは……終わったのだ。

だが、黒鉄一輝をはじめとする破軍学園代表たちは、いまだ大阪に留まっていた。

なぜなら、七星剣武祭一回戦で刃を交えた好敵手、《浪速の星》諸星雄大が音頭を取り、彼の実家でもあるお好み焼き屋『一番星』にて、一輝の友人たちを交えた祝勝会が開かれていたからである。

◆◇◆◇◆

「えー、それでは！　我らが友人、黒鉄一輝の《七星剣武祭》優勝を祝して、不肖この私、表彰式でやらかして明日から三日間の懲罰補習が言い渡された日下部加々美が、乾杯の音頭を取らせていただきますっ！」

加々美は自虐ネタを挟みつつひと言断りを入れてから、手にしたジョッキを掲げ、

「先輩、おめでとーーーっ！」

大きな声で、複数のテーブルを繋げて作った長テーブルの上座に座る一輝を祝福した。

それに続いて、

「「オメデトーーーーーッ!!!」」

祝勝会に集まった一輝の友人知人も乾杯をしながら祝福を送る。

集まっている面々は、同じ破軍学園代表メンバーのステラと珠雫。

友人の有栖院凪と綾辻絢瀬。そして東堂刀華をはじめとする生徒会役員たち。

他にもこの場所を提供した諸星や、彼の友人である城ケ崎白夜に浅木椛。

決勝戦のもう一人の立役者でもある薬師キリコに、七星剣武祭で一輝と激戦を繰り広げたサラ・ブラッドリーや、なんとなくでサラに付いてきた風祭凛奈とその侍女であるシャルロット・コルデーの姿もあった。

その全員からの祝いの言葉に、一輝はすこし照れくさそうにはにかみながらも、

「みんな、ありがとう」

自分もジョッキを持ち上げて、乾杯に参加。

こうして宴は始まった。

「さあ焼くでー！　超焼くでー！　どんどん注文してこいやお前らーっ！」

厨房に立つ諸星が、カンカンと金属のヘラを打ち鳴らして一同に呼びかける。

これに待っていましたとばかりにステラが椅子から立ち上がりながら手を上げる。

「アタシ豚玉！　十枚！」

「ほい来た！」

「ステラちゃん、……なんだか大食らいに磨きが掛かってない？」

「し、仕方ないでしょアリス。《竜精憑依》の燃費ってものすごく悪いんだから。ちゃんと食べないと目眩がするのよ」

「まあちゃんと消費できるならいいけどね」

「シロ。お前はなんにする？」

「私は牛すじネギ玉をもらいましょう。椛はどうします？」

「ん～。ウチらはもう大抵食い尽くしてるからね～。どーれーにしよーかなー……あ、そうだ！　こないだ作ってくれたナポリタンできる？」
「おう。焼きそばナポリタンな。ええでええで。そっちの身体のでっかい兄ちゃんは？」
「ふむ……、では某はミックス玉をもらおうか」
「すいません。それ来週からなんですよ～」
「ぬ、そうなのか」
「お兄ちゃん、あほな嘘つかんといて……！」
抗議の声を上げるのは、おかっぱ頭の小さな少女。
諸星雄大の妹。諸星小梅だ。
以前は言葉を失っていたが、一輝と兄の戦いの折、奇跡的に声を取りもどし、いまだ声のトーンは安定しないものの、筆談に頼らず会話をしながら皆から注文を取って回っている。
そして注文した料理が焼き上がるまでの間。
皆は上座に座る一輝とステラの周りに集まり、それぞれにジョッキを合わせ賛辞を送った。
「優勝おめでとう、黒鉄くん！　すごくかっこよかったよ！　僕はこんなすごい人に剣を教えてもらっていたんだって思うと、すごくうれしいよ！」
「いやーほんと大したモンだ。あの状況から勝敗をひっくり返すなんてさ！　ボクの二つ名《観測不能（アンノウン）》も顔負けさ」
「アタシはずっと信じてたよ！　クロガネ君が勝つって！　なんたってこのアタシの《ブラックバード》を破った騎士なんだからさ！」
これに一輝も心からの感謝で応じる。
「ありがとうございます。皆と出会わなければ……、僕一人ではここまでの強さを手にすることは出来なかった。感謝しています」
「皇女殿も惜しかったな。まさしく紙一重の差であった」
その砕城雷の慰めに、ステラは小さく肩を竦めて見せる。
「紙一重でも負けは負け。やるだけやって出た結果だもの。受け入れるわ。でも――」

そして、一度言葉を区切ると手にしたジョッキをぐいっと豪快に飲み干し、
「次はぜーーーーったいっ負けないんだから……！」
ドンと木製のテーブルをジョッキの底で打ちながら豪語した。
朱色の髪の毛から、炎の燐光を散らしながら。
その勇ましい様に周りに集まった面々は「いいぞ」「それでこそステラちゃんだ！」と拍手を送る。
そんな様子を、上座から少し離れた席に座る東堂刀華が朗らかな笑みを浮かべて見つめる。
「ふふ。来年の《七星剣武祭》も盛り上がりそうですね。参加出来ないのが悔しいです」
「ククク……。その再戦もまた《黒い歴史書》に記された運命よ……。汝もいずれ識る刻が来る……」
「お嬢様は『来年も楽しみにしてるね！』と仰っておられます」
「――だからって、今回のはやり過ぎです！」
だが、そんな盛り上がりに一人の少女が苦言を呈した。
優勝者、黒鉄一輝の妹。
《深海の魔女》黒鉄珠雫だ。
珠雫は眉を吊り上げながら上座に座る二人を睨み、
「お兄様もステラさんも、恋人同士なんだったらもっとお互いの身体を案じたらいかがですか？　あんな減茶苦茶な試合して、どちらかが死んでもおかしくなかったのですよ。非常識だとは思わないのですか？」
「う、ぐ、ごめん……」
珠雫の言葉に二人は叱られる子供のように身を縮める。
反論する余地のない正論だからだ。
事実、あの決勝戦。どちらかの命が潰えてもなにもおかしくはなかった。
繰り出す斬撃、そのすべてに全霊が込められており、互いに敵塵の手加減もしていなかったからだ。
しかしそれについては彼らにも言い分がある。
「で、でもしょうがないじゃない……。アタシたちは騎士なんだから……、自分が認めている相手に手なんて抜けないわよ……」
そんな障を晒そうものなら、たちまち斬って落とされる。

二人の戦いとはそういう次元だ。
一瞬たりとも気を緩めることなど出来はしなかったし、なによりそれを相手が望まないことを理解していたから。
そして……それは珠雫もまた同じ。
「ホントにしょうがない人たちですね」
珠雫とてわかっているのだ。
それが出来る間柄だからこそ、この二人の絆はなによりも強いのだと。
そんな二人の絆が羨ましく、妬ましく、……同時に喜ばしくもあり、
「……ほんと、お似合いなんですから……」
珠雫は呆れたように溜息を一つつくと、誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。
「え？　シズク、今なんて――」
「どうして膝の上にボンレスハムなんか載せてるんですか？　差し入れですか？」
「これはアタシの脚よっ！」

◆◆◆

そして厨房から焼き上がったお好み焼きや鉄板料理が行き渡り、皆の腹が満たされた頃。
そのタイミングを見計らって、加々美がテーブルの一部を綺麗にしたあと、そこに七星剣武祭で撮りだめた写真を広げた。
そこには一回戦から決勝戦まで、この場にいる全員の活躍が過ぎ去る時間の中から切り取られており、彼らは思い出話に花を咲かせる。
「ほらほら見てください先輩。先輩が二度目の《一刀羅刹》を使ったときの写真です！　格好良く撮れてるでしょう。これ、次の壁新聞の一面に使いますから！」
「うわぁ……、こうやってみると大概ボロボロだな……僕」
「でもとても男らしくて素敵でしたよ。殿方はこのくらいやんちゃなほうが魅力的ですわ」
「あっ。シロ君が記録的瞬殺喰らったときの写真もあるでー」

「奇遇だね椛。私も今、君が白目を剝いて倒れている写真を見つけたところだ」
「ほほう。これが《血塗れのダ・ヴィンチ》の父上か。顔を思い出すことが出来たのだな」
「……うん。よかった」
「欲しい写真があったら焼き増ししてあげるから遠慮なく言ってね。ちなみに私のベストショットは、――これだ！　ヴァーミリオン皇国第二皇女、ステラ殿下の生パン――っ!?」
と、加々美が写真を一枚懐から取り出し、皆に見せようとした刹那。
鋭い風切り音を伴い放たれたステラの光熱を宿した左ジャブが、加々美が摘まんでいた写真を貰き灰に変えた。
そして、右手で加々美の襟首を摑むと、
「データを渡しなさい」
力任せに引き寄せ、血走った瞳に加々美を収め、命じる。
瞬間、加々美には自分の目の前に迫る竜の顎門がハッキリと視認出来――
「は、はひっ！　わかりました！」
ペンは剣の前に屈した。
「や、やだなぁ……ステラさんってば冗談が通じないんだからぁ……あはは」
そのように雑談する一同の様子を見て、厨房の諸星は小梅に声をかける。
「小梅。注文ももう落ち着いてきたし、ワイも交じるわ。一人でいけるか？」
「大丈夫。まかせといて。……お兄ちゃんも、お疲れ様」
「おう」
労いの言葉の礼に諸星は小梅の低い位置にある頭をくしゃくしゃと撫でまわし、小梅は「えへへ」と頬を緩ばせる。
そして諸星はエプロンを脱ぎ、自分用に焼いた豚玉ダブルの皿を持つと、――写真鑑賞会には交じらずにいる刀華の隣の席に腰を下ろした。
「よっと。隣ええか？」
この問いかけに刀華はクスリと可笑しそうに笑みを零す。
「もう座ってるじゃないですか。……ええ。どうぞ」

「おおきに。……んー。やっぱウチのお好み焼きは最高やな。大阪一やで」
「はい。とっても美味しかったです。家族にも食べさせてあげたいと思いました」
「じゃんじゃん営業したってや。お好み焼きの一番星此処にありってな」
そう返しながら諸星は皆より少し遅めの夕食を取る。
そしてぺろりと豚玉ダブルを完食。
ビールで口内のソース味を纏めて胃に流し込むと、
「なあ東堂……。黒鉄との調整試合で見せた電磁力を使った変則剣術、《稲妻》ゆうたか。あれはやっぱ、ワイの《ほうき星》対策やったんか？」
決勝戦直前の話をふった。
これを受け刀華は頷きを返す。
「対《ほうき星》のみを想定した伐刀絶技ではありませんが、もちろんその用途を満たせるよう鍛えてきました。去年は初見の《ほうき星》を躱せず、そこからペースを持っていかれましたからね。……残念ながら、使う機会には恵まれませんでしたけど」
「やっぱな。そうやないかと一目見て思ったんや。確かに、あんな技があったら去年のようにはいかんかったかもなぁ」
《稲妻》はクロスレンジに特殊な磁場を作り出し、その引力と斥力を以て斬撃を急加速急旋回させる伐刀絶技だ。
突然変化する角度と速度のギャップは、中間距離でのベース争いにおいて無類の強さを誇る。
《比翼》の剣を身につけた一輝を、彼が最も得意とする剣の間合いで押し返したという事実からも、その強力さが窺える。
そしてだからこそ、――諸星は惜しいと言う。
「ワイもやりおうてみたかったなぁ」
七星剣武祭はトーナメントという形式上、順位が強さの序列には成りにくい。
諸星の感覚からすれば、去年自分の前に立ちはだかった最大の難敵が刀華だった。
そんな強敵が自分を倒すべく磨き上げてきた技。
七星剣武祭という舞台で受けてみたかったものだ。

しかしそれでも――
「ま、勝ったのはワイやけどな」
ニッ、と挑発するような笑みを浮かべ、諸星は刀華に流し目を向ける。
これに対し刀華も、――満面の笑みを諸星に返す。
「そんなことはありませんよ。《ほうき星》を封殺し、今年こそ私が勝っていたはずです」
「それはないなぁ」
「あると思いますよ」
「いやいや冗談きついで自分」
「いえいえ。純然たる事実ですから～」
「「っっっ～～～

「意外か？」
刀華はコクりと頷く。
「ええ。てっきり家業を継いで、予備役になるものとばかり思っていました」
「まあそれももちろん考えたけどな……」
予備役とは《魔導騎士》の免許を持ちながらも、平時は一般人と同じように各々の職場で働き、有事にのみ《連盟支部》からの要請で《魔導騎士》として国防や犯罪捜査の任に就く者のことだ。
請星のように実家が商売をやっている人間は、大抵がこの予備役に納まっている。
そして請星も、そうするつもりだった。
しかし――
「せやけど、ようやっと開きたかった応援が聞こえるようになったんや。ワイはまだまだ強うなれる。もったいのうてやめられへんよ」
その請星の言葉に、刀華もゆっくり深く頷く。
「……そうですね。自分の背を押してくれる人がいる。それはとても幸せなことですから」
「ワイ等は二年。もう《七星剣武祭》に出ることはでけへんわけやが、……東堂。お前はこれからどうする？」
「一先ず私は、この夏休み中に師匠の元で、徹底的に鍛え直してもらおうと思います。黒鉄くんたちの戦いを見て、自分にはまだまだ甘えがあったのだと思い知らされましたから。……そして卒業と同時に国内リーグに登録し、ゆくゆくはA級リーグを目指そうかと」
A級リーグとは《国際魔導騎士連盟》が開催している伐刀者による格闘興行KOKのトップリーグの通称だ。
A級リーグの選手たちは、連盟に加盟している各国に割り振られた数少ない推薦枠を勝ち取ったその国を代表する選手たちであり、そんな選び抜かれた騎士たちによる世界最高峰の戦いは、至上の娯楽として世界中の人々に愛されている。
刀華は自分の次なる目標をそこと定めていた。
これに請星はなるほどと頷く。
「王道コースやな」
どこか距離を感じるその返しに、刀華は首を捻る。

「諸星さんは違うのですか？」

「――ああ。ワイは国内リーグには登録せえへん。日本の……いや、《魔導騎士連盟》参加国の国内リーグは連盟の方針から魔術重視の騎士が多い。せやけど、ワイの《暴喰》は魔術そのものに破壊力があるタイプの能力やない。それを当てる体術の方が重要。それこそがワイにとっての生命線や。……せやけどワイはその体術で黒鉄に及ばんかった」

今の自分の体術、槍術では、一流の世界には通用しない。

諸星はそれを一輝との戦いで痛感した。

故に、

「せやから……体術重視の試合に出ようと思っとる」

「それってまさか……っ」

伐刀者でありながら体術を重視する戦い。

そんな方針で行われている大会は、この世界にたった一つしかない。

日本海を隔て、広がる大陸。

そこで行われている、世界で最も過酷なリーグ戦。その名は――、

「ワイは闘神リーグに挑む……！」

「……っ」

諸星のある種の覚悟すら感じさせる声音に、刀華は息を呑む。

それもそのはずだ。

闘神リーグとは、連盟加盟国ではない中国で開催されている、A級リーグと並びこの世界に名を轟かせている伐刀者による格闘大会だ。

A級リーグよりもレベルが高いという声も大きい。

その理由は、戦いの過酷さにある。

A級リーグは最新鋭の医療設備に、厳格なルール、充分なインターバルと報酬が約束されている。

だが闘神リーグは違う。

闘神リーグは《神龍寺》という武術寺が修行僧たちのために開催している大会であり、そもそも興行ではない。

国籍問わず誰でも参加出来るが、報酬もなく、医療設備もなく、恐ろしいことにルールすらないに等しい。

『常在戦場』……闘士たるものいついかなるときも戦場に在る心構えを持つべし。

その《神龍寺》の理念を体現する闘神リーグは、複数で手を組み一人を襲うことや、寝込みを襲うことすら許されている、ともすれば違法地下格闘興行よりも過酷な戦いと先生から聞いています。

……安全面の考慮はないに等しく、それ故にA級リーグなど比較にならないほど死者も多いと」

日本人で唯一その大会を征した男。

《闘神》南郷寅次郎から闘神リーグの過酷さを聞いていた刀華は、忠告するような口調で諸星に言う。

しかし、それに諸星は「わかっとる」と返し、

「せやけど、そういう死線でしか得られんもんもある。……黒鉄が《比翼》を相手に戦って、その技を盗んできたように、な」

「……そう、ですね」

それを言われれば刀華も納得せざるを得ない。

一輝は世界最強の剣士《比翼》のエーデルワイスとの戦いで爆発的な成長を遂げた。

またステラとの決勝戦でも、彼らは極限の中で互いを高め合っていた。

生と死が交錯する火花のような刹那。

その一瞬は、――ときとして普通に日々の修行をこなす数年数十年に匹敵する。

諸星はその一瞬を手にするつもりなのだろう。

より過酷な環境に身を置き、自身を限界まで追い込むことによって。

それを理解し、刀華は引き留めることを止め、修羅の道を往く友にエールを送る。

「闘神リーグは賞金も何もない栄誉だけの戦いですが、それ故にそこで活躍すれば世界的に注目されます。A級リーグの推薦もあるでしょう」

「せやな。ワイも国内リーグには興味ないけど、A級リーグは別や。あそこの人間は殆どが心技体を極めた化物やからな。いずれは挑むつもりや」

「なら……私たちの再戦はその時に」
「オウ。絶対な」
約束を交わし、二人は静かにジョッキを合わせた。

◆◇◆◇◆

これからのことを語り合う詩聖と刀華。
二人を遠目に見つめ、――貴徳原カナタは自分も今日、話をしようと決めていた者の下へ向かう。
その人物とは、暁学園の《魔獣使い》風祭凛奈だ。
「うむ。しょみんによたべもにょもたまにはよいもによら」
「お嬢様。ちゅっ」
「ふぁっ!? い、いいいきなり何をするのシャル!?」
「ほっぺたにソースが引っ付いていましたので」
「あ、ありが、――ごほん。大義であった。し、しかしこの《祭壇》には《不浄を払う潔白》があるのだから次からはそれを用いるように」
一輌の周りの賑やかな輪には交じらず、大判のお好み焼きを小さな口で少しずつ食べている凛奈にカナタは近づき、声をかける。
「……お久しぶりですね。凛奈さん」
声に凛奈は振り返り、
「ああ、貴徳原の……」
とくに興味もなさそうな態度を示した。
それも当然で、二人はともに日本有数の資産家として一、二度社交界で挨拶を交わした程度で、個人として話をするような間柄ではないからだ。
《破軍》にお越しになった折は、挨拶も出来ずに申し訳ございません」
「構わぬ。夜の王たる我はそのような些末なことを気にはかけぬ。もぐもぐ」

「……皮肉のつもりだったのですけれどね。隣、座ってもよろしいですか？」
「くるひゅうない」
「どうぞ、とお嬢様は仰っています」
では失礼して、とカナタは凛奈の隣に腰を下ろす。
「ですが驚きましたわ。風祭が裏社会に強いコネクションを持っていることは貴徳原も存じておりましたけど、まさか当主・風祭暁三様の実子であられる凛奈さんが、《解放軍》の活動に従事しているとは……」
「ふぉれはひがうじょ」
「え？」
「ご当主様はともかく、お嬢様は《解放軍》に所属しているわけではありません」
頬にお好み焼きを詰め込んだ凛奈の代わりにシャルロットが説明する。
凛奈の父である風祭暁三と月影総理は旧知の仲であり、その繋がりで凛奈も子供の頃から月影にはよく遊んでもらい、仲が良かった。
だから凛奈は、月影が《解放軍》の重鎮でもある暁三に今回の《国立暁学園》設立を持ちかけた折、月影の力になるべくこの作戦に参加を志願したのだ。
そういう意味では、一応は《解放軍》として参加しているサラよりも繋がりが薄い。
王馬と同じゲストといっていい存在だ。
その説明を受け、カナタはなるほどと頷き、
「……そうですか。なら、このような活動からは今回限りで足を洗ってください」
やや強い、頼むというよりは命じるような口調で、凛奈に告げた。
これに凛奈は口内の食べ物をゴクリと飲み込み、問う。
「ほぅ？　何故、汝にそのようなことを指図されねばならぬ？」
「戦場で顔見知りと鉢合わせはしたくありませんもの」
そう。これがカナタが今日、凛奈に話したかったことだった。
《紅の淑女》貴徳原カナタは、日本でも有数の実力者だ。
それ故に、学生ながらに《特別招集》という形で実戦の場に出ている。

《解放軍》の拠点制圧に参加し、敵と交戦。――手強い戦闘員を殺傷した経験もある。
覚悟はしていたとはいえ、あまり後味のいい経験ではない。
だからこそ、その地獄で知っている顔と出会うのは避けたかったのだ。
だがこの忠告を凛奈は鼻で嗤ってみせる。
「クク……。なるほど。しかしそれは聞けぬ相談だ。なぜならばこの《黄昏の魔眼》こそが常世の闇の根源であり、我はそれを身に宿す者。闇の世界に生きるが宿業といえよう……。ぐっ！　魔眼に封じた混沌が血を求めて疼きよるわ……！　ククク……、今宵は誰を贄にしてくれようか……！」
そんなことを言いながら眼帯を押さえる凛奈。
傍目からはわけがわからぬ痛い行動だ。
しかし、カナタは彼女の言葉、そして行動の意味するところを知っていた。
だから――、カナタは事前に用意していた切り札を切る。
「……はぁ。では仕方がありませんわね」
白いトートバッグから生徒手帳を取り出し、ある場所に電話をする。
その場所とは――
「もしもし。週刊少年ジャック編集部の太田原編集長をお願いします。貴徳原とお伝えください」
この行動に隣の凛奈が突然椅子を蹴飛ばすほどの勢いで立ち上がり、
「しゅ、週刊少年ジャック!?　そ、それってもしかして、『黄昏の魔眼使い』が連載している、あのジャック!?」
大仰な演技も忘れ、興奮した面持ちでカナタに迫る。
この凛奈の予想通りの反応に、カナタはほくそ笑む。
「ええ。小英社は貴徳原財閥の関連企業ですから」
「で、でででは、『黄昏の魔眼使い』の作者の鷹柳先生と、お、おはなし、出来たり、しちゃうの!?」
「ええもちろん。丁度大阪に来る前にもお会いして――、あ。失礼。もしもし。お忙しいところ申し訳ございません。……はい。それで、前ご相談したお話なのですが、ええ。やはりわたくしの説得ではどうにも聞いてもらえず、はい、そういうわけですので、鷹柳先生と話し合ったように、『黄昏の魔眼使い』は打ち切りということに――」「ちょっとまってえええええええ!?!?」

身の毛もよだつような会話の内容に、凛奈は思わず大声を上げてカナタの肩を掴む。
「え!?　なになにどういうこと!?　打ち切りってなに!?　何で!?　先週号も巻頭カラーだったのに!?」
「……大人の事情、ですわねぇ。子供を犯罪の道へ導いてしまう作品を掲載するのは、企業のコンプライアンス的に問題がありますので。『黄昏の魔眼使い』の影響で裏社会に足を踏み入れてしまった凛奈さんを改心させられないのなら、作品を打ち切ろうと、編集部と相談して決めていたのです」
カナタの言葉に凛奈の興奮し上気した顔から血の気が失せる。
自分の家の系列会社。
そこの雑誌で連載されている作品故に、カナタには一目でわかっていたのだ
凛奈がその作品のキャラクターのロールプレイをしていることが。
それほどまでに愛している作品。
人質としては申し分ない。そして――
「そ、そんなの横暴だよ！　理不尽だよ！　鷹柳先生が可哀想だよ!?」
「もちろん鷹柳先生にも直接ご相談させて頂きました。……先生は仰りましたよ。『万が一にも自分の作品で犯罪を犯してしまう子供が出たら筆を折る。そう決めていたと』……本当に、立派なお方でした」
「はい！　りんな更生する！　更生します！　更生しました！　もう《解放軍》のお仕事とかしないから！　だからそれだけはやめてえええええ!!!」
凛奈はあっさりと転び、カナタに泣きついたのだった。

◆◇◆◇◆

わんわんと駄々っ子のようにカナタに泣きつく凛奈。
その姿を遠目に見つめながら、珠雫は溜息をつく。
「……まったく、賑やかですね……」
と、その時だ。
一人で席に座っていた珠雫に、長身の美男子、有栖院凪が声をかけた。

「はぁい。珠宇」
「アリス……」
「疲れちゃった？　珠宇、こういう賑やかな集まりは苦手だものね」
有栖院は人一倍目端が利く男だ。
場の空気になじめていない自分に気を遣ってくれたのだろう。
珠宇はそんな友人の気遣いに感謝しつつ、応える。
「……別に、疲れたわけじゃないわ。ただ……あてが外れたからがっかりしてただけ」
「どういうこと？」
「……私が今日ここに来たのは、お兄様のお祝いもだけど、キリコさんに……弟子入りを志願したかったからなの」
この言葉に、有栖院は驚くことはなく、むしろ「そう」と納得を見せた。
「それは……、やっぱり、あのときのことが理由？」
対し珠宇はコクリと頷く。
有栖院が言うあのとき。
それはもちろん、準決勝の夜のことだ。
《凶運》紫乃宮天音との戦いの後、彼の能力により、珠宇の兄・一輝は一度命を奪われた。
どれだけ助けようとしても、身体に刻みつけられた死という結果が、一輝の魂を煉獄へと連れ去ろうとするのだ。
幸いにも、父・峻の要請で飛んできてくれた《白衣の騎士》薬師キリコの活躍で、一輝は無事息を吹き返し、ステラとの決勝に挑むことが出来たのだが――
「私は何も出来なかった。同じ水使いでありながら、お兄様の窮地にただ泣きわめくだけだった」
珠宇は思い出す。
一輝が入っていった手術室の前で、ただただ癇癪を起こしていた自分の姿を。
そして、自分自身に激しい怒りを覚えるのだ。
――なんて情けない。と。
同じ水使いのキリコは、その力で兄を救ってみせたというのに。
あの瞬間ほど、自分の至らなさを痛感したことはなかった。

「あんなのはもう二度とイヤ。お兄様の窮地にただ泣きわめくことしか出来ないなんて……、もう絶対にイヤなの。だから……」
「女医さんに弟子入りしようと思ったのね」
珠宇はコクリと頷き、肯定を示し、
「……だけれど」
ややうんざりとした視線を、テーブルの一角に向けた。
有栖院も彼女の視線の先を追いかける。
そこには、――《血塗れのダ・ヴィンチ》サラ・ブラッドリリーに、さながら蛸のように脚と腕を巻き付け自由を奪い、サラの全身を弄る酔っ払ったキリコの姿があった。
「あらぁあらぁ。貴女。体格のわりに筋量が足りていないわねぇ～」
「う、も、もともと、身体が弱くって。それに、座って絵ばっかり、描いてるし……仕方ない」
「いけないわいけないわぁ～。そんな生活していたらヒック。二十歳を過ぎたら一気に爆弾が爆発しちゃうんだからぁ。全身至る所でチクタクしてる爆弾がねぇ。で～も～ごあんし～ん。キリコちゃん。実は今脂肪を筋肉に変える画期的な治癒術の研究をしているのでありました～！　だから貴女を人体実験被験者第一号に任命してあげちゃうわぁ～。ん～キリコちゃんやさし～」
「誰か、たすけて……」
「ベロ」
「あ……っ」
もともと露出の多いサラと、女医というある種のフェチズムを感じさせるキリコ。
そんな二人が着衣を乱しながら絡み合うなんとも扇情的な光景に、有栖院はやや引き気味の笑みを浮かべた。
「絡み酒だったのね。あの女医さん」
「あれではとても話など出来そうにないわ。……というか近づいたら私まで巻き込まれそうで、近づきたくない。絶対」
「そうねぇ。あたしもそれがいいと思うわぁ」
「まあ夏休みの間に広島を直接訪ねることにするわ」

諦めたように言う珠雫に、有栖院は少し驚いた様子で問う。
「ヴァーミリオンには付いていかないの？」
対し珠雫はすこし拗ねたように唇を尖らせながら、
「流石にそこまで非常識なことはしないわ」
（割としていた気がするけど……）
と思いはしたが、有栖院はそんな野暮なことを口にする男ではない。

彼らは知っている。
あの決勝戦を機に、一輝とステラの関係が大きく進んだことを。
そんな二人が、ステラの両親に挨拶をするべくヴァーミリオン皇国を訪問する。
そこでの話し合いが上手くまとまれば、ついに婚約という流れになるだろう。
そのきたる日を見据え、珠雫も自分の中で折り合いを付けはじめているのだ。
（珠雫は……ステラちゃんのことも大好きだもんね）
本人は絶対に認めはしないだろうが。
そうでなければ、最愛の兄に近づくことを許すはずがない。
そんないじらしい珠雫が可愛らしく、有栖院はからかうように少し膨れた彼女の頬を指でつつく。
これに珠雫はむっと眉を立て、自分も人差し指を立て有栖院の頬をつついた。
いや、つついたと言うよりは、刺した。
実に負けん気が強い珠雫らしい応手に、有栖院は頬を摩りながら苦笑する。
そんな彼に、珠雫は尋ねた。
「それよりアリスは夏休み何か予定ある？　ないなら、一緒に広島に付いてきてほしいのだけど」
しかしその誘いに有栖院は申し訳なさげな表情で「ごめんなさい」と返す。
彼にも彼のやりたいことがあったからだ。
「……この夏休みに、一度故郷の町に戻ろうと思っているの。ずっと行けていなかった、友人のお墓参りにね」
「そう。なら夏は別々なのね。ちょっと残念」
「遠くから、貴女の修行が上手くいくことを願ってるわ」

◆◇◆◇◆

祝勝会開始から二時間程が経った頃。
写真を囲み、祭りの思い出話をしていた面々も、充分満足したのか、気の合う普段仲のいい者同士の小さなグループに分かれ歓談をはじめる。

その段になって、主賓の一輝はようやく人集りから解放された。
「ふう」
一輝は椅子に深く座り、背もたれに背中を預けて天井を見上げる。
大勢の人から祝福を受ける。
あまり馴染みのない空気に、すこし体力を消耗した。
それだけでなく加々美のインタビューにも答えていたので、喉がカラカラだ。
何か小梅に持ってきてもらおうか。そう、考えていると――
「勝利者インタビューお疲れ様。《七星剣王》さん」
びとっ、と、冷たく硬い感触が頬に触れる。
ステラが気を利かせて冷えた麦茶を持ってきてくれたのだ。
「……ありがとう。助かるよ」
礼を言って、一輝はジョッキを呷り、半分ほどを飲み干す。
そんな一輝の様子をステラは隣から優しい瞳で見つめ、
ふと、何かに気づいたように目を見開く。
「あ。ちょっとイッキ。髪が乱れてるわ。直したげる」
諸星や恋々からの手荒い祝福で、一輝の頭髪に乱れが生じていたのだ。
一輝はあまり身だしなみに頓着する男ではないので気にもしていなかったが、彼女の手前、あまり不格好もよろしくない。
だから素直に「うん」と頷き、ステラが髪を触りやすいように背筋を伸ばす。
そんな一輝の髪を、背中に回ったステラは優しい手つきで梳きながら、
「終わっちゃったわね。大会」
ぽつりと、少し寂しそうに呟いた。
これに一輝も同意を返す。
「そうだね……。あっという間だった」
「なんだか少し寂しいわ。……ずっと此処を目指してきていたから」

その気持ちは一輝にもよくわかる。
彼もひたすらにこの場所を目指してきた。
卒業のため。そして、ステラと交わした約束のため。
だからこそ、……一輝は少し不安になった。
「もしかして燃え尽きちゃった？」
だがそんな一輝の不安をステラは「まさか」と一笑に付す。
「来年リベンジするためにトレーニングあるのみよ！　昨日の晩、あんなこともあったしね」
昨日の晩。
その言葉に「――ああ。そうだね」と頷く。
そう。……本来この祝勝会は表彰式直後の昨日開かれるはずだったのだ。
それが一日ずれ込んだ理由は、主賓に急用が出来たからに他ならない。
一輝、そしてステラの二人は昨日、総理大臣・月影漢牙から夜の湾岸ドームに呼び出しを受けたのだ。

◆◆◆

午後九時。湾岸ドームのリングに集まってもらいたい。
その呼び出しは表彰式の後。破軍学園理事長・新宮寺黒乃を通して二人にもたらされた。
聞くところによると、黒乃とステラの師を務めた日本屈指の実力者、《夜叉姫》西京寧音を交えた四人に、月影から秘密の話があるとのことだ。
「いったいなんの話なのかしら。こんな時間に呼び出すなんて」
「さあ……。僕にもさっぱりだよ」
二人は約束の時間にドームに入り、人気の無い通路を歩き、リングへ向かいながら首を捻る。
「テロリストへの勧誘とかだったらぶん殴ってやるわ」
「理事長や西京先生も一緒らしいから、そんなことはないと思うけど……」
やがて二人は開けっ放しの入場ゲートを抜け、待ち合わせのリングに着く。

しかし、不思議なことにそこには誰もいなかった。
ただただ、広々とした空間に耳が痛くなるような静寂だけが横たわっている。
「なによ。呼び出しておいて誰もいないじゃない。イッキ。時間は今で間違い無いのよね？」
「うん。おかしいな……」
ぐるりと周囲を一望するも、結果は同じ。
リング上はもちろん、すり鉢状の観客席にも人影は見当たらない。
無人だ。
ゴミも綺麗に掃除され、今朝までの熱狂は見る影もない。
その寂寞とした様を見て、一輝は一抹の寂しさを感じた。
この場所で、彼らはあまりに濃密な時間を過ごした。
それはわずか一週間足らずの短い日数ではあったが、その充実は比類無い。
だからこそ、一輝はこの場所に強い愛着を感じていた。
だが――
（あれ……？）
そんな愛着すら覚えるようになった舞台だからだろうか。
（なんだろう。この変な感じは）
僅かに入り込んでくる海風が、ドームの中の静寂を揺らす。
そのたびに大気が僅かに震え、肌を撫でる。
その感触に、一輝は妙な違和感を覚えた。
この場所の大気は、このように流れていただろうか。
今のように、肌を撫でていただろうか。
――違う。
（空気の流れが、変だ）
先ほど周囲を一望して得た視覚情報と、肌で感じる大気の揺らぎ。
この二つの情報が一致しない。

乱れている。
視覚情報から想定される大気の揺らぎと、現実のそれが乖離している。
そう、まるで、
リングの上に、自分とステラ以外の障害物が存在しているような――
「ッ――――！」
それを認識した直後、一輝は視界に捉えた。
ステラの背後。巨大な戦斧を振り上げる闇色の甲冑の存在を……！
「ステラァアアッ！　避けろォオオオッッ!!!」
「ッ！」
この瞬間のステラの反応は、彼女の一輝に対する信頼の賜だろう。
ステラはこのときまだ、背後の存在に気付いてはいなかった。
にもかかわらず、反射的に身を前に投げ出す。
突然の叫びに当惑することも、背後を振り返ろうとすることもなく。
一輝という男に対する全幅の信頼が、思考をすっ飛ばして彼女の身体を動かしたのだ。
直後、今まさにステラが立っていた場所に戦斧の刃が降り落ち、轟音と共にリングとこの場の静寂を打ち砕く。
「な、なんなのよアンタ!?」
「――――」
前に投げ出した身を右手一本で跳ね上げ、空中で旋回。
賊に向き直り、怒声を放つステラ。
見開かれた瞳には尋常ではない警戒がある。
それもそのはず。

ここまで容易く背後を取られたこともだが、強化石盤のリングを容易く打ち砕くその膂力。
ステラほどではないにしろ、黒鉄王馬クラスの腕力だ。
ただ者ではない。
対し、黒い甲冑に身を包んだ賊は何も応えず、再びステラに襲いかかってくる。
その行動には明確な戦意があり、
「ッ！　何者かは知らないけど、やるってんなら相手になるわよ！」
ステラはそれに応じた。
すぐさま固有霊装《妃竜の罪剣》を両手に顕現させ、
「蒼天を穿て！　煉獄の焔……ッ！」
その刃から炎を発現。
渦巻き、十重二十重に重なり合う炎は瞬く間に、その温度と光度を上昇。
白熱する光の剣と化す。
その輝きはドームの内部を隈無く真昼の如き輝きで照らし、
――闇に溶けていた黒甲冑の姿を克明に暴き出す。
その姿を、
（あの鎧、まさか……！）
一輝は見た覚えがあった。
だが、
「《天壊焼き焦がす竜王の焔》――――ッッッ!!!」
その気付きと同時にステラの放つ光の斬撃が甲冑を呑み込む。
文句の付けようのない直撃だ。
確かな手応えに、ステラは口唇を持ち上げ、
「ふんっ！　どんなもん、――ッ!?」

しかし、すぐにステラの表情は驚愕に染まった。
それもそうだろう。
彼女の必殺の一撃。《天壊焼き焦がす竜王の焔》。
その光の奔流をまるでそよ風のように突き抜けて、僅かな失速もせずに、光の中から黒い甲冑の騎士がステラの眼前に現れたのだから。
そして黒い甲冑は再び戦斧を振りかぶり、ステラの脳天目掛け力任せに叩き落とす。
《天壊焼き焦がす竜王の焔》の直撃を確信していたステラの回避は間に合わない。が、
「ステラァァッ！」
それを駆けつけていた一輝が補う。
ステラを横から強く突き飛ばし、降り落ちる戦斧の下を潜って刃を回避するや、
「ハアアッ！」
そのまま身体を捻り反転、甲冑の騎士に胴薙ぎの一閃を放つ。
戦斧を打ち下ろした甲冑の騎士はこれに対し応手が出来ない。
《陰鉄》の黒刃は吸い込まれるように甲冑の胴を打つ。
とはいえ一輝の斬撃は鋭さこそ比類無いがパワーはそこまで高くはない。
斬撃は装甲に阻まれ、文字通り刃が立たない。
しかし、そんなことはもちろん一輝も承知。
装甲を切断する必要は無い。
――刃が触れさえすれば、事足りる。
「ッ……！」
甲冑の脇腹に《陰鉄》が触れた刹那、一輝は全身の筋肉を連動。
筋伸縮による本命の二撃目を放つ。
第六秘剣――《毒蛾の太刀》
相手の武器や鎧に対しある種の振動を叩き込むことで、装備者の肉体内部の水分に波紋を生じさせ、一切の防御を無視して敵を内側から破壊する技だ。

強固さと吸震性は比例しない。
振動という毒は瞬く間に甲冑の騎士の全身に廻り――
甲冑の僅かな隙間から鮮血が迸る。
にもかかわらず――
「ぐっ！」
直後、黒い甲冑は一輝に対し槍のように鋭い蹴りを放つ。
《毒蛾の太刀》を受けてもさしたるダメージを感じさせない。
しかし、――これに一輝は驚かない。
なぜなら今の一撃、一輝自身ダメージを狙ったものではなかったからだ。
彼は今の一撃で確信した。
目の前の甲冑騎士が、何者であるかを。そして、
「イッキ！　こいつ、もしかしてあの……！」
蹴り飛ばされた一輝に駆け寄ってくるステラも、同様の気付きを得ていた。
故に二人は理解する。
一人では手に余る相手だと。
「ステラ！　僕に続いてくれッ！」
「任せなさいッ！」
一輝を先頭に、二人同時に攻め入る。
これに甲冑騎士は巨大な戦斧の柄を巧みに操り、頭上で戦斧を回転。
一輝が間合いに踏み入るや、充分な遠心力により加速した漆黒の戦斧は黒い旋風となって、一輝の胴を断ち切る。
断ち切った。――はずだった。
だが、完璧なタイミングで迎撃したはずの戦斧は、駆け寄ってくる一輝の数センチ手前を空振る。
第四秘剣――《蜃気狼》
特殊な脚捌きによる緩急で敵の目を幻惑する一輝の体技である。
一輝はそれにより自身の前方に残像を作り出し、甲冑騎士に間合いを誤認させたのだ。

そして、甲冑騎士が大きく空振った瞬間を、二人は狙い撃つ――！

「ハアアアアアアアアアア!!!」

一輝の背後を走ってきたステラが、刃を返して《妃竜の罪剣》を振るう。

同時に前を走る一輝が跳躍。

この振り抜かれる《妃竜の罪剣》の腹を足場に着地し、《落第騎士》が持つ七つの秘剣の中でも一番の破壊力を誇る突進技、第二秘剣《星撃》を放つ。

《星撃》の突進力と、ステラの剣の一振りで大地を震撼させる膂力。

そのすべてを切っ先一点に集中させ敵を穿つ、二人の一糸乱れぬインスピレーションとコンビネーションが生み出した、この二人にしかなし得ぬ合体技。

その名は――

「《角皇》――――ソッ!!」

「《愛の弾丸》――――ッッ!!」

技名のインスピレーションだけは全く連携がとれていなかったが、大きな問題ではない。

二人の力が合わさった一撃は見事に、空振りによって体勢を崩している敵の眉間に直撃し――

轟音と火花を生じさせ、甲冑騎士をリング外まで突き飛ばした。

しかし、

「なっ……!?」

リング外まで突き飛ばされ、そのまま観客席の下の壁にめり込むものかと思われた刹那。

甲冑騎士はくるりと身を回し、リング外周を囲む壁に両足で着地。

そのまま壁を蹴り砕き、砲弾のような勢いで一輝とステラに向かって跳躍し、二人諸共に両断せんと、戦斧を横一線に振るった。

流石に距離のある大振り。

二人は難なく躱すも、その表情には明らかな焦りが滲む。

それもそのはず。

ステラと一輝の膂力を一点に集中させた《角皇》。

それをまともに受けても、目の前の敵にはダメージが通っていないどころか、怯みすらしていないのだから。

「……これで決めきれないなら、もうやるしかないね」

「ええ。わかってるわ」

くるりと戦斧を回し、悠々と構え直す甲冑騎士相手に、二人は覚悟を決める。

共に深く息を吸い込み、

「《一刀――》」

「《雷情――》」

自身の性能。その極限を使おうとした。

――だがその時だった。

「そこまでだ」

「「えっ!?」」

よく知る声がリング上の三人の間に割り込んだ。

声のしたほうに目をやれば、そこにいたのは、

「理事長……!? それに――」

「ネネ先生と、ツキカゲ総理も……!?」

今日、二人がこの場で会うことになっていた三人がリングに上がってきていた。

その中の黒乃が、甲冑騎士に対し告げる。

「これ以上は殺し合いになる。武器を収めてもらおうか」

甲冑騎士は、……これに抵抗する素振りも見せずに構えを解き、戦斧の先を地に下ろした。

その姿からは、先ほどまでの戦意が失せている。

だから一輝とステラも一度切っ先を下ろし、――問う。

「理事長。これは一体どういうことですか？」
その問いに、黒乃の横にいた轟音が言葉を返す。
「ま、ちょっとした余興みたいなもんさ。黒坊もステラちゃんも、流石にそいつのことは知っているだろう？」
「ええ……」
それは、わかっている。
独特な風体でまさかと思い、しかし戦いながら確信を得た。
「使用者の肉体を無限に回復し続ける《不屈》の概念。それを操る固有霊装《無敵甲冑》を身に纏い、昨年、初めてKOK・A級リーグに登録されるや、驚異の快進撃にて瞬く間にランキング上位まで登り詰めた、フランスの《A級騎士》――
現世界ランキング4位。《黒騎士》アスカリッドさんですよね」

「――」
この一輝の問いに《黒騎士》は応答しない。
先ほどまでと同じく、ただ黙したままだ。
しかしこの強さ。もはや言質を取る必要も無い。
わからないのは、何故連盟加盟国の一流騎士が自分たちを襲ったかだが――
その疑問に対しては、黒乃が答えを示した。
「アスカリッドがどうしてもお前たちの力を見たいと言ってな。放っておけば闇討ちでもかけそうな気配だったから、私たちの見ているところでやらせたんだ」
「……やらせたって……。アタシ一応国賓なんですけど。ヴァーミリオン皇国の第二皇女なんですけど！　完璧に国際問題なんですけどっ！」
黒乃のぶっちゃけに、ステラがジロリと二人の後ろにいる月影を睨む。
これに月影は苦笑を浮かべた。
「私は止めたのだがね……」

「うちらが許可した！」
「それでも教師か！」
「このレベルの騎士とやり合う機会は多くない。連盟トップクラスの騎士の力を肌で感じるのも、お前たちにとってもいい経験になるだろうという親心だ。許せ」
「だ、だからってやり方ってもんがあるでしょうに……」
呆れたと肩を落とすステラ。
確かにスパルタにも限度がある。
そして、ステラが轟音たちに文句を言っているうちに、件の襲撃者、アスカリッドはやはり何も告げぬまま、踵を返しリングを立ち去ろうとする。
目的を果たし、もうここにいる意味は無いということなのだろう。
なんともマイペースな男だ。
まあ一輝としても向こうが戦意を見せないならば、別に追う理由はない。
だから、彼は遠ざかるアスカリッドの背中から視線を切り、
「アスカリッドさんが襲いかかってきた理由はわかりました。そのことはもういいです。それよりも月影総理。僕たちに話があるということでしたが……？」
この場に自分たちを呼び出した男に水を向けた。
これに今まで一歩引いたところにいた月影が、話の流れを変えてくれたことに感謝するような表情を浮かべ、
「今日君たち二人を呼び出した用件は二つある。話さなければならないことと、聞いてもらいたいことがあったからだ。……まずは前者から済ませよう」
真剣な口調で、切り出す。
「話さなければならないというのは他でも無い。一輝君。君の身に起きた出来事についてだ」

◆◆◆

「イッキの身体に起きたことって……何……？」

不穏な響きに不安げな顔になるステラ。
だが月影はステラの問いには答えず、
「一輝君はもう、何のことか察しが付いているのではないかね？」
一輝に尋ねる。
この問いに、一輝は頷きを返した。
身に覚えがあったからだ。
「おそらく、ステラとの試合で僕が使った、二度目の《一刀羅刹》のことではないかと」
対し月影は「その通りだ」と肯定する。
「魔力とは伐刀者が生まれながらに持つこの世界に対する影響力。
だからこそ、その総量は運命として定められている。
しかし……この世にはその前提を覆す例外が存在する。
自らの強固な意志で運命の鎖を断ち切った者。
人としての魂の限界を打ち破り、運命の外側に至った例外が。
我々はその存在を《魔人》と呼んでいる」
月影は言う。
ステラの《天壊焼き焦がす竜王の焔》を喰らった瞬間、一輝は本来の運命では敗北していたのだと。
だが彼はステラへの想いを燃やし、その運命を振り切った。
この世界を巡る運命が『黒鉄一輝』という存在に許した限界を超越し、魔力上限を引き上げるというあり得ざる奇跡を起こし、運命を覆した。
「あの時、君は通常の伐刀者とは異なる存在へと魂の位階を進めた。この覚醒に至った者はこの星を巡る運命の輪から外れ、魔力上限すら訓練次第で引き上げることが出来るようになる。私の一つ目の用件は、今回《魔人の領域》に足を踏み入れた君に、君がそういう存在になったという事実を伝えることだ」
「ちょ、ちょっとまって！」
と、そこで月影の話にステラが割り込む。
彼女は表情に強い焦燥を浮かべ、

「確かにイッキの魔力が増えた瞬間はアタシも見た。あり得ないことだけど、イッキならそのくらいやってみせるだろうって思ったわ。だけど、ツキカゲ総理。アナタの口ぶりだと、アナタはこの現象の存在を前々から知っていたってことよね？」
「ええ。まさしく。もちろん私だけでなく、連盟本部も把握していることです。覚醒を経た《魔人》にこの領域の話を伝えるのは、国際魔道騎士連盟加盟国の長としての務めでもありますので」
「ッ――」
この一言に、ステラの焦燥は憤りへと変わった。
「ヴァーミリオン皇国はそんな話を聞かされたことがないわ。御父様からそんな話、聞いたこともない！　……そもそも何故黙っているの？　こんなの『生まれたときから魔力の上限は変化しない』としている世界の常識を根底からひっくり返す重大な話じゃない……！　連盟加盟国すべてに詳らかにするべきことでしょう！」
当然だ。彼女は一学生騎士であると同時に、ヴァーミリオン皇国の第二皇女。
一国の行政機関の中枢に関わる政界人なのだから。
連盟が自国に対して隠し事をしていたなど、はいそうですかと流せる内容ではない。
魔力上限は取り払える。
そのノウハウを一部の国家だけで共有しているとすれば、それは同盟国に対する背任行為だ。
ともすれば、連盟離脱も視野に入れなければならない話。
だが、このヴァーミリオン皇国第二皇女の憤りに対して、月影は連盟を代表し釈明する。
「ステラ姫が憤られるのは尤もなことです。しかし……連盟がヴァーミリオン皇国を騙し、一部の国家間で《魔人》に至るノウハウを独占している、というのは誤解です。連盟が《魔人》の存在を隠しているのは、……ひとえに危険だからなのです」
「危険？」
「そう。《魔人》に至るにはまず自分自身の可能性を極めつくし、なおかつそれ以上の高みへ昇ろうとする強い本人の意志が必要なのです。それが覚醒の絶対条件。……ですが、この世に一体どれだけ、そこまで自分に厳しくあれる人間がいると思いますか？」

「それは……」

「ステラ姫。貴女ほどの騎士ならわかるはず。それが真似しようとして真似出来ることではないと。しかし、同時に一国の行政に関わる皇族であられる貴女には想像が出来るはずです。……欲深い『指導者』がこの領域の存在を知れば、どんな悲劇が起こるかを」

「……っ」

瞬間、ステラは目を見開き、息を呑み込んだ。

国民に対し強い権力を持ち、国家のメカニズムをよく知る皇族のステラには、その果ての悲劇が容易く想像出来たからだ。

「強力な伐刀者は国家にとって非常に重要な存在です。その数は多ければ多いほどいい。故に魔力の上限が上昇する方法があると広まれば、それを自国の伐刀者に強制する者が必ず現れる。その人間の可能性を無理矢理極め尽くす、そんな殺人的な訓練を。

……しかし覚醒とは第三者に強制されて至れるものではない。

運命を乗り越えるために必要なのは、自分自身の意志力なのですから。

死の淵に立たせるような苛烈な訓練を強要し、無理強いしたところで、悲劇しか生まれない。

だから、そういった悲劇を生み出さないために、連盟は《魔人》の存在を秘匿し、連盟傘下の中でも《魔人》を排出している国家の一部の人間にしか、その存在を明かしていないのです。別にヴァーミリオン皇国に悪意をもって秘匿しているわけではありませんので、そこはご理解いただきたい」

月影の釈明に、

「……ん。そういうことなら、まあ……、わかりました」

ステラは理解を示し、剣幕を引っ込めた。

想像し、その悲劇が避けられないものだと納得したからだ。

独裁国はもちろん、民主国家でも危うい。

命に関わるような無理をさせれば、伐刀者が魔力上限を超えて強くなる。そんな世論が生まれれば、絶対数の少ない伐刀者の人権は危機的状況になるだろう。

伐刀者を統括する連盟が秘匿するのも当然だ。

――そうして落ち着きを取りもどしたステラに、一輝は小さく安堵の息をつき、

「でも、《魔人》を排出している国家のみ、ということは……日本にはもう僕以外にもそういう存在がいるということなのですか？」

会話の途中で生じた疑問を投げかけた。

これに月影はコクリと、首を縦に肯定を示す。

「日本国籍を持つ《魔導騎士》では二人だけ。

一人は《大英雄》黒鉄龍馬と同じ時代を生きた伝説の騎士《闘神》南郷寅次郎氏。

そしてもう一人は今ここにいる《闘神》の愛弟子、《夜叉姫》西京寧音君。

国外の話ではあるが、アスカリッド氏もまた連盟に所属する《魔人》の一人だ」

「ネネ先生が……！」

「ま、伊達に世界ランキング三位やってるわけじゃないってときね。……覚醒に怖じ気づいてさっさと引退しちまった奴と違ってさ」

「……」

ジロリと非難の視線を向ける寧音に、黒乃はばつが悪そうに目を逸らす。

そこには普段の悪態をつきながらもじゃれ合っている二人とは違う、真実険悪な雰囲気があった。

それを察したのか、月影はパンと一度手を打ち、話を戻す。

「少し話が前後したが、騎士連盟加盟国の長が新たな《魔人》にアポイントを取るのは、つまるところ、今ステラ姫に説明したように《魔人》という存在がいかに伐刀者全体の人権を危うくしかねないかを自覚し、公にしないでもらいたいからに他ならない。それは理解してもらえただろうか？」

「はい。二度目の《一刀羅刹》に関しては、何かを聞かれても魔力が増大したのではなく、底から引き出したと表現するべきだ、ということですね」

「理解が早くて助かるよ」

公式の場で覚醒を経た際、連盟が推奨する定型文を言わずとも察した一輝の理解力に、月影は満足げな笑顔を見せる。そして、

「伐刀者全体の利益のためには秘匿すべき存在とはいえ、覚醒を経て運命の外側に至った《魔人》はこの世を巡る

運命に縛られない存在。訓練次第では魔力すら伸ばすことが出来る優秀な戦力だ。君がより強くなろうとすることに対し、私も日本国総理大臣として協力は惜しまない。必要ならば、私のツテで良い師を紹介することも出来るだろう」

新たな領域へと昇った一輝を国家としてフォローすることを確約した。

これに一輝は、

「ありがとうございます、――と言いたいところですが」

温和な瞳の奥に、刃が如き油断無い煌めきを宿して、月影に告げる。

「僕はまだ貴方という人を信用出来ていません。僕たちの学園を襲撃したこと。《解放軍》にまで協力を仰ぎ《国立暁学園》を立ち上げようとしたこと。その理由に納得のいく説明が成されない限りは、とても貴方を頼ろうという気持ちにはなれません」

「よく言ったぜ黒坊。その通りさ」

「ヴァーミリオン皇国としても、テロリストと結託しているような人間に対しては、不信感を持たざるを得ないわね」

「先生。そろそろ話してはもらえませんか。貴方が何を考え、こんなことをしたのかを」

一輝の不信に他の三人も追従。

皆の視線が月影に集まる。

それを月影は待っていたかのように、

「もちろんだ。……それこそが、今日ここに皆を集めた二つ目の用件だからね」

両腕を前に突き出し、

「万象を照らせ。――《月天宝珠》」

月の輝きのような淡い光と共に、自らの霊装を顕現させた。

◆◇◆◇◆

月影が広げた両手の前に現れたのは、金色の金属で装飾が施されたこぶし大の水晶球。

それは淡い金色の光を放ちながら滞空している。

「これが……先生の霊装……」

「武器って感じじゃないね。くーちゃんも初めてみたん？」

「ああ……。学園におられたとき非戦闘系の伐刀者とは闘いていたが、見るのは初めてだ」

「私の霊装《月天宝珠》はその能力故に、……発現したときからずっと日本の国家機密となっているからね。当然連盟にもその詳細は伏せてある。私も、これを人前で見せるのは久しぶりだよ」

「月影総理が今回の行動を起こした理由には、この霊装が関係しているのですか？」

問う一輝に月影は少し疲労を感じさせる表情で微笑み、

「まあ細かい話は後にして、まずはこれを見てもらいたい」

言うと、滞空する《月天宝珠》を指で弾いた。

すると《月天宝珠》の鏡面に波が立ち、球体の下部から一滴。雫が強化石盤の床に零れる。

その瞬間、

落ちた雫は一輝たちの足下に光輝く波紋を起こし、暗闇の中、床にある映像を映し出した。

「こ、これは……！」

その映像に、全員が表情を強ばらせ、息を呑む。

月影の霊装が映し出したのは、――地獄。

一面炎に呑み込まれたどこかの街と、生きながら焼かれる人々。

まさしく地獄としか形容できない、血と苦鳴と炎の光景だったからだ。

「……な、なによ、これ……っ！　こ、こどもが……！　うっ」

「ステラ……！」

瓦礫に下半身を潰されたのか。零れた臓物を引き摺りながら両手で地を這い、必死に炎から逃れようとしていた少年が、その願い叶わず火に呑まれる光景に、ステラは堪らず口元を押さえて蹲る。

一輝はすぐにステラに駆け寄り、丸まった背中を摩る、が、彼の顔色も青い。

それもそのはずだ。

これはただの映像ではない。

ただの映像では、ステラも眉をしかめる程度だったに違いない。
しかし、この場にいる全員が確かに感じていた。
周りを取り巻く炎の熱さを。
耳をつんざく絶叫を。
人間の肉が焼け焦げる臭いを。
そのすべてをありありと。
そして他ならぬ自分自身が感じた感覚が、理解を超えて確信したのだ。
この光景が作り物ではないことを。
疑いの余地もない、現実であることを。
「先生……！　これは一体何なのですか!?」
理解出来ぬ月影の行動に、黒乃が抗議の声を上げる。
だが、そのときだ。
「え？、……っ!?　くーちゃん、あれ！　アレを見ろ！」
眉根を顰めながらも映像を見つめていた軍音が、ある気づきを得て、映像の一ヶ所を指差す。
その先を黒乃も追いかけて、――戦慄した。
軍音が差した先にあったのは、ぐらりと斜めに傾いた『東京スカイツリー』の姿だったからだ。
「まさか、ということは此処は、東京なのか!?」
この気づきに、月影は「その通りだ」と告げる。
「『月天宝珠』は一定範囲内の人や場所の『過去』をのぞき見る力を持っている。しかし、因果を読み取る力は時折、今現在の因果線上に存在する『未来』を、私に『予知夢』という形で見せてくるのだ。……これはそんな力が私に見せた未来の記憶。今のまま星の運命が推移すればいずれ来たる日の東京の姿だ。それを私という人間の過去から再生している」
「「な……ッッ!?」」
この月影の言葉に、一同は揃って目を剝いた。
「これが、東京の未来だってのかい!?」

「そんな……！　ど、どうしてこんなことに……！」
震える声で漏れるステラの疑問。
これに月影は首を横に振る。
「それはわからない。私の力はただ『視る』だけだ。しかし、今の世界情勢から経緯を察することは出来る」
言うと、月影は指をパチンと鳴らし、《月天宝珠》を消し、床の映像を閉じた。
それから彼は膝を突いたステラに近づき、「不愉快なものを見せてすみません」と謝罪しながら手を差し出す。
だがステラはこれに険しい表情を返し、彼の手は取らず、一輝に寄りかかるようにして立ち上がり、
「謝罪なんていらないから、続けなさいよ……！」
そう求める。
他の三人も、同じ意見を視線で月影に示した。
その四つの視線が自分に集まったのを確認してから、月影は話を続ける。
「ステラ姫は知っていることだろうが、今この世界は三つの勢力が拮抗することでかりそめの平和を保っている。
一つは日本も所属している《国際騎士連盟》。
一つはアメリカや中国、ロシア、サウジアラビアなどといった大国が結んだ《大国同盟》。
そして最後の一つが、この世界の闇に巣くう超巨大犯罪結社《解放軍》だ。
まったくもって皮肉な話だが、《解放軍》という第三勢力の存在が、曲がりなりにも《連盟》と《同盟》双方の過激な動きを抑制し三竦みの形を作り出すことで、大きな衝突を避けられているのが現状だ。
だが……この拮抗はもう長くは続かない」
「それはどうしてですか？」
「寿命だよ」
一輝の疑問に、月影は簡潔に返す。
「この三勢力にはそれぞれ、一人非常に強力な《魔人》が存在する。
《連盟》にはKOK現世界ランキング一位にして、連盟本部長を務める騎士、
――《白銀公》アーサー・ブライト。
《同盟》には二十代という若さで米国が誇る《超能力部隊》の長を務める男、

——《超人》エイブラハム・カーター。

そして《解放軍》には第二次世界大戦以前より闇の世界に君臨し続けるならず者の王、

——盟主《暴君》。

この桁違いの力を持つ《魔人》三人がそれぞれにいてこそ、三つの勢力は拮抗している。

しかし、……第二次世界大戦前から史実に名を連ねている《暴君》はかなりの高齢だ。

何時天寿を全うしてもおかしくない。

その時、世界情勢がどう動くかといえば、まずは《解放軍》残党の囲い込み競争だ」

「どうしてそう言い切れるのよ……？」

「もうすでに始まっていることだからですよ。ステラ姫」

「ッ……！」

「米国やロシア、中国のような《同盟》の国々はもちろん、連盟加盟国の一部も、独自のルートで《解放軍》との接触を行っています。……風祭さんにも言えることですが、《解放軍》のメンバーには、表の世界でそれなりの立場に就いている者も多くいますので。そしてこの競争で《連盟》は《同盟》に対し大きく後れを取っている」

「《連盟》はその母体である騎士連盟本部が、明確に《解放軍》に対して敵対姿勢を取っているから……ですか」

月影は大きく頷く。

「その通りだ。私のように個人単位での小さな繋がりはあれど、組織としての繋がりは《同盟》の方が深く強い。《暴君》が死ねば、大多数の戦力は《同盟》に流れるだろう。そして、この囲い込み競争の後に必然的に生じるのが、……第三次世界大戦だ」

月影は言う。

この世界を大国による分割管理下に置くことを目的とする《同盟》と、小国同士が協力しあい今の世界の形を保とうとする《連盟》。

この二つは同じ星の中に決して共存することの出来ない組織だと。

《解放軍》という第三勢力が失われれば、必ず大戦は起きる。そして……

「その結果が、夢に見た光景だと私は考えている」

「つまり先生は、《連盟》に与したままではこの未来を避けられないと思い、《同盟》に鞍替えするために一連の行動

を取った、ということですか？」

「……大まかに言えばそういうことになるね。世界最大の大国アメリカ合衆国が生んだ《同盟》最強の男、《超人》エイブラハム・カーターはまだ若い。年齢的なリスクも少なく、《同盟》が《解放軍》と強く繋がっていることを考えれば、多少不利な条件を呑んでも《同盟》に加わることが、日本をこの滅びから救う唯一の方法だと私は考え、実行したのだ。《暁学園》を立ち上げ、その強さを以て脱連盟の気運を高め、《連盟》脱退の際にクリアしなければならない国民投票で過半数の賛成票を取得するための作戦を」

もう十年以上前。

この悪夢を見てからずっと。月影はひたすら、それを成すためだけに生きてきた。

そのためだけに、ただの教師というなんの票田も持たぬ身ながら、《反連盟》を掲げる有力者を取り込み、世論を動かし、保守派の旧与党を退け政権を握ったのだ。

戦う力を持たない月影には、他に方法がなかったから。

しかし、

「……それはもう叶わぬ夢だ。《暁学園》は敗れ、世論では《連盟》の方針を再評価する気運も高まってきている。この情勢では、《連盟》を脱退するなどというドラスティックな改革で、過半数の民意を勝ち取ることは不可能だ。……つまり、私は君たちに負けたということだね」

そう月影は肩を落として溜息をつく。

——しかし、

「そういうわりには、ずいぶんと嬉しそうに見えますが」

彼の言葉と、一輝が自身の洞察で見る彼の感情は、大きく乖離していた。

これを月影も否定しない。

彼はこの十年で深々と刻まれた面の皺を一層濃くして微笑み、

「……ふふ。そうだね。十年間。ただその救いだけを信じて戦ってきた。でも今私の胸にある感情は、喜びだけだ」

悔しさなど僅かほども存在しないと答えた。

なぜなら、自分が一人で狼狽し、道を外れ、未来を嘆いている時にも、

「若い力は運命を打ち破るほどに強く、逞しく育っていたのだから……」

この七星剣武祭で、月影は見た。

若い力が交わり、高め合い、ついには運命すら引き千切った瞬間を。

自分のように、運命の裏を掻こうと姑息に足掻くのではなく、真正面から、堂々と。

その姿を目の当たりにし、彼は理解したのだ。

もう、自分が出る幕ではないのだと。

「私の能力はあくまで星を巡る運命を視る力。その運命の外側、《魔人の領域》に至った者の過去や、彼らが作り出す未来を視ることは出来ない。だからこそ……、君なら、君たちならば、私が視た絶望の未来とは全く異なる未来へ、この国を導いてくれると信じられる」

ならば、もはや自分がすべきことは一つだ。

悟り、月影は一同を見渡すと、

――まるで救われたような笑顔で、

「……この国を、世界を、よろしく頼むよ……」

自分の願いを、愛した国の未来を、若い力に託したのだった。

◆◇◆◇◆

「……あのとき、ツキカゲ総理、泣いていたわよね」

「うん」

昨夜の出来事を、最後の月影の表情を思い返し、一輝は頷く。

彼の目尻にはあのとき、確かに小さな涙の粒が浮かんでいた。

気の毒になるほど、疲れ果てた表情で、しかし、救われたように。

それはステラも感じていた。だから、

「アタシ、あの人のこと嫌いだった。どんな理由があろうと、学園の皆を傷つけた奴なんだから、一発ぐらい殴ってやるって思ってた。……だけど」

ステラは言う。自分はもう、彼を憎めないと。

ステラは皇族の生まれ。

政界というものの恐ろしさを知っているステラには、よくわかるのだ。

たった十年で一国の行政機関の長にまで上り詰めることが、どれ程の困難を伴うことか。

月影の面には、その苦労の跡が在り在りと刻まれている。

しかし月影はやり抜いたのだ。

偏に、愛した国を救うために。

その行動力、意志力に、ステラは同じ政界人として畏敬すら感じていた。

憎しみなど抱けるわけがない。

そして、自分たちは図らずも暁に勝利することで、その願いを挫いたのだ。

「勝つということは、背負うということ……。代表メンバー発表のときにトーカさんが言っていた言葉だけど、……アタシたちはツキカゲ総理の願いを背負ったんだと思う。途方もなく大きく強い願いを」

いや、それでなくとも、あんな光景、現実のものにするわけにはいかない。

月影の推測。第三次世界大戦での連盟の敗北。

あの光景が本当にその未来を映したものだとすれば、同じ連盟加盟国であるヴァーミリオン皇国も人ごとではない。

なにより、ステラにとって日本はもう、第二の故郷のようなものだ。

この国には沢山の大切な友達がいる。

守りたい。

――守ってみせる。

だからステラは、ギュッと膝の上で拳を握り、俯いて自身に強く言い聞かせる。

「もっと、もっと、強くならないと……。イッキみたいに、自分の限界を超えて……！」

そんな彼女に、

「……ステラ」

一輝は隣から肩を叩いて呼びかけ、
「ん？　――みゅ!?」
ステラが振り向くだろう位置に指を立て、振り向いたステラの頬を刺した。
突然の子供じみたいたずらに、ステラは一輝の手を払い驚きを示す。
「な、なにするのよいきなり!?」
「気負いすぎだよ」
対し一輝は、真面目な声で忠告する。
「やる気になるのはいいことだけど、自分を追い詰めるのは怪我の元だ。確かに月影総理の話には驚いたし、あんな光景を現実のものにするなんて絶対に許されないことだ。……でも、もとよりそういう危機から力を持たない人々を助けるために存在するのが、僕たち《魔導騎士》だ。僕たち騎士はスポーツマンじゃない。ステラだって元々、故郷の国民たちを守るっていう気概で騎士道を歩んできたはずだ。違うかい？」
「あ……」
「だったら今更気負う必要は無いよ。どうせステラは自分に手を抜けるような人間じゃない。今まで通り、全力で騎士の高みを目指し続けていれば、……いずれ、自分の限界を踏破するときが来る。その必要に迫られたときに、必ずね」
――それに、
「月影総理は《魔人》のことを特別な存在のように言っていたけど、僕はそうは思わない」
言って、一輝は目線をステラからこの場にいる皆に移し、
「この場にいる皆と戦ってきた僕にはわかる。
ステラはもちろん、この中の誰一人だって、自分に負けるような騎士はいない。
プライドのため、夢のため、誰かのため――、限界なんて容易く超えてくるはずさ」
強い口調で断言した。
彼は心から確信しているのだ。

彼らの魂と鎬を削ってきた一輝だからこそ。
月影の見た悪夢。あんなものの実現を、ここにいる者達が許すはずがないと。
そのためなら彼らは皆乗り越えてくるだろう。
自分自身の限界を。
七星剣武祭決勝戦の自分と同じように。
誰も彼もが揃いも揃って、とんでもない負けず嫌いなのだから。
「そんな皆と力を合わせれば、なんだって乗り越えられるよ。必ずね」
そういうと一輝はステラの手に自分の手を被せ、優しく、しかし強く握る。
――君の隣には僕だっている。
一人、未来に責任を持つ必要などないのだと、そう伝えるように。
この一輝の言葉に、
「そうね。……その通りだわ」
ステラもまた一輝の手を握り返し、
「頼りにしてるわ。イッキ」
いつもの明るい笑顔を見せ、こてんと、一輝の肩にもたれかかった。
そこに危うい強ばりはもうない。
昨日未来を見せられてから、ステラは平静を装いつつも強い焦燥を滲ませていた。
皇族という立場。生来の責任感の強さ。
それらが彼女から余裕を奪い、気持ちを急かしていたのだ。
だがステラはあの未来が彼女一人や、あの場にいた者たちだけで対処しなければならないものではないことを一輝に指摘され理解した。
これならばもう、責任感のあまり無茶をするということもないだろう。
一輝はそのことに一先ず安堵し、
（僕としては、いつかもわからない未来のことより、目の前の壁のほうが頭が痛いよ）
近く迫るヴァーミリオン訪問に、内心で溜息をつく。

何しろこちらは自分の力一つで突破しなければいけない壁なのだから。
ヴァーミリオン国王からステラを奪っていく自分が。
……どこの馬の骨とも知れぬ男に娘を奪われる父とは、どういう気分なのだろう。
子を持たない一輝にはよくわからない。
わからない、が、――おそよ友好的な態度にならないことだけはわかる。
（どういうふうに話を切り出したらいいんだろうか……）
と、一輝が差し迫った挨拶の内容に悩んでいると、
「おっ。ホンマでっか？　おおきに！」
誰かと電話で話をしていた諸星が、椅子から立ち上がり、皆に大きな声で告げる。
「おいみんな！　近くで銭湯やっとる人がな、休みの日いやけどワイらのために貸し切りで開けてくれるそうや！　腹もいい具合に膨らんだことやし、みんなで銭湯行くで！」
この提案に祝勝会に集まった一同は声を上げて喜ぶ。
「え!?　ホッシーそれマジ!?　井倉さんとこだよね！」
「あらあら。それはいいですわねぇ。皆でお風呂なんて『若葉の家』に遊びに行っていた頃を思い出しますわね」
「我が聡慧なる右腕よ。銭湯とはなんだ？」
「庶民が使う公衆浴場のことです。そこでは皆が裸になりつまりお嬢様も裸になりわたくしも裸になり二人一緒に生まれたままのはだはだはだかかかカカカカカ」ボタボタボタ（鼻血）
「シャルーーーーッ!?」
そして日本に来てまだ数ヶ月のステラもまた、この提案に強い興味を示した。
「ねえねえイッキ！　日本の銭湯あれよね！　お風呂におっきなフジヤマの絵があるのよね！」
「確かに東京ではそうだけど……大阪だとどうなんだろ……」
「まあなかったらサラに描いてもらうわ！」
「え？」
「一度でいいから行ってみたかったの！　ねえ、早く行きましょう！」
突然ぶん投げられた依頼に戸惑うサラを余所に、ステラは立ち上がると一輝の手を取り、はやくはやくと子供の

ように急かす。
そんなステラに、珠雫が流し目を刺した。
「大変淫乱しているところ残念なお知らせですが、銭湯は混浴じゃありませんよ」
「い、淫乱してるってどういう動詞よそれ！　そのくらい知ってるわよ！」

……こうして、七星剣武祭は幕を下ろし、大阪での最後の夜は賑やかに更けていく。
たった一つの頂を巡り、死力を尽くした数ヶ月。
沢山の物語が生まれ、その数と同じだけの絆が結ばれた。
その絆を各々胸にしまい込み、若者たちはひとときの休息を楽しむ。
そして、この場所から歩き出すのだ。
それぞれが見据える未来、――新たな目標へと。

第二章　《深海の魔女》と《白衣の騎士》

七星剣武祭が終わり、出場選手たちにも遅めの夏休みが訪れる。
その日、珠雫は里帰りする有栖院と駅で分かれ、一人リニアを使って広島にやってきた。
能貴学園二年・薬師キリコを訪ねるためだ。
もちろん、相手は多忙な医者。事前にアポイントメントはちゃんと取ってある。
珠雫の訪問は驚く程好意的に快諾された。
珠雫はしばらくこちらで過ごすための生活用品を詰めたキャリーを引きながら、薬師総合病院の正面玄関をくぐる。
そして総合受付と書かれているカウンターに座る事務員に声をかけた。
「失礼します。東京から来た黒鉄珠雫です。キリコさんから着いたら総合受付に来て名乗るように言われたのですが……」
その言葉に事務員は「ああ、黒鉄珠雫さんですね。院長からお話は伺っております」と返し、一冊のパンフレットを取り出す。
「今先生は特別病棟の三階を回診しておられるので、直接そちらへ向かってもらえますか？　こちらに院内の地図がございますので」
「ありがとうございます」
珠雫は会釈一つ返しそれを受け取り、地図に従い広い院内を移動する。
そして二つの大きな病棟から中庭を挟んで存在する特別病棟に入り、エレベーターを使って三階まで昇った。
そこで――
「え……？」

珠雫は目の前の光景に戸惑いを覚える。
特別病棟の三階は、ひと言で言えば病院とは思えないような光景だったからだ。
それはＶＩＰ御用達の病院のように内装が豪奢とか、そういう意味合いではない。
内装そのものは他の病棟となんら変わりないのだが、中にいる人たちの雰囲気がとても入院患者とは思えないのだ。
何しろ誰一人として病衣を身につけておらず、女性は化粧までして、そこかしこで楽しそうにお喋りをしているし、ソファーでお菓子を食べながらカードゲームに興じている子供の姿もある。
なんとも活気ある場所だ。
本当にここで回診しているのだろうかと、珠雫は一抹の不安を覚えるも、地図に間違いはない。
だから彼女は病室を片端から覗いて回ることにした。
――結果、目的の人物は三つ目の部屋で見つかった。
《白衣の騎士》薬師キリコは、ベッドに横になった老人の手首を握っている。
最初は脈を取っているのかと思ったが、キリコの表情が非常に集中したものであることと、握られた手首からは淡い空色の魔力光が零れていることから、何かしらの魔術を使用しているのだとわかる。
おそらくは治癒術。ならば邪魔をするのは良くないと、珠雫は掛けようとした声を呑み込み、遠目からキリコの仕事を見つめる。
「はい。今日の処置はこれでおしまい。吉岡さん、気分はどうです？」
「ああ。痛みがどこかに吹っ飛んで行っちまったよ。これでばあさんとの食事に行けらあ。ありがとうよ。先生」
「ふふ。お酒は程ほどにしなきゃダメよ？」
「へへっ。酔っ払って覚えてたらな！」
黄ばんだ歯を見せてニカッと笑う老人に、キリコは肩をすくめる。
「まったくしょうがない患者だこと」
だがその所作は怒っているわけでもなく呆れているわけでもなく、微笑んでいるようだった。
（医者としていいのかしら。それで）
と、珠雫が疑問に思っていると、

「キリコちゃん！　どうだい。一段落したら一緒にお茶でもしないかい？　近頃評判のケーキを家族に買ってきてもらったのよ」

「ごめんなさい。実はこの後人と会う約束があって、――あら」

別のベッドの患者に話しかけられて振り向いたキリコと珠雫の目が合った。

「珠雫さん。もうこっちに着いていたのね」

「はい。つい先ほど。……なんだかずいぶんと明るい病室ですね。一瞬自分が職員の寮にでも迷い込んだのかと戸惑いました」

「ンフフ。ごめんなさいねうるさくって」

キリコは口元に指を当てて品良く笑う。

それから、すこし申し訳なさげに眉尻を下げて珠雫に言った。

「……折角来てくれたところ申し訳ないのだけど、もうすこし待ってもらえるかしら？　ちょっと回診時間が押しちゃって、まだ回り切れていないのよ。この部屋の患者で最後だから」

これに珠雫は、

「どうぞお構いなく。お忙しいところに押しかけたのは私ですから」

と返し、一歩病室に入ると邪魔にならないよう横にずれ、キリコの処置を見学する。

回診の間、キリコはずっと患者たちに話しかけられていた。

「センセー！　あのねあのね、明日ママとパパと花火大会するの！」

「へえ。素敵ね。もしかしてそこにある浴衣はその時に着るのかしら？」

「うんっ！　それでねそれでね！　センセーもいっしょにやらないかなって！」

「うーん。……ええいいわよ。明日の夜は何の予定もないし」

「やったぁ！」

「知り合いのちっちゃい子たちもつれていっていいかしら？」

「うんっ！」

年配から小さい子供に至るまで。

皆が彼女に向ける笑顔からは、とても大きな感謝と信頼が感じられる。

端から見ても微笑ましい光景だ。――が、

「先生……。いつもいつもありがとうね……。貴女のおかげで、孫の顔も見ることが出来たし、何も思い残すことはないわ……」

「え？」

キリコを取り巻く患者の一人。初老の女性の言葉に珠雫は疑問を覚えた。

「何も思い残すことはって……」

そんな歳でもなかろうに、どういうことだろうか、と。

その珠雫の疑問に、

「おや、お嬢ちゃん知らないのかい？」

珠雫から一番近いベッドで本を読んでいた老女が答えを示した。

「この階の患者は全員な、もう余命幾ばくもない助かる見込みのない人間ばかりなんよ」

「え……!?」

この事実に珠雫は驚きを露わにする。

「そ、それって、あの小さな子供も、ということですか!?」

対し老女はゆっくりと頷き、肯定を返した。

「全員が全員、現在の医学じゃどうにも出来ない疾患の持ち主でな。本来は短い余生をベッドの上で過ごすだけの人生よ。でもキリコ先生の力なら、寿命ギリギリまでわてらの身体を騙してくれる。おかげで……家族と食事にも行けるし、おしゃれも出来るし、遊びにも行ける。最期の瞬間まで、人生を楽しむことが出来る。……だから皆、キリコ先生には感謝しとるんよ」

（ああそうか……）

珠雫は理解する。

だからあのとき、キリコは患者の呑み過ぎを本気で諫めなかったのだと。

元々、今更節制したところでどうにかなる体調ではなかったから。

「世間じゃ戦いの強い弱いばっかりが伐刀者の能やと語られちょるが、……それだけが騎士の在り方やない。実際《白衣の騎士》は他のどんな偉大な騎士よりも、わてらにとっては英雄だよ。だから、よく見て学ぶとええよ。

《深海の魔女》さん」
「私のことをご存じで？」
「これでも昔はナショナルリーグの上位まで行った伐刀者やからね。七星剣武祭の中継も見とったよ。最近の若い子は無茶するねぇ」
と、珠雫が老女と話をしているうちに、キリコは全員の回診を終わらせ、珠雫の元へ小走りでやってきた。
「お待たせっ。ごめんなさいねぇ。もうみんな無駄話が長くって」
「……いえ。お忙しい中、時間をつくってもらって感謝しています」
これにキリコはパタパタと気にするなと手を振り、
「いいのいいの。私だって珠雫さんには用があったから」
そんなことを言った。
「え？　私に、ですか？」
「ええ。……まあとりあえず、場所を変えましょうか。ここじゃゆっくり話は出来ないもの」

◆◆◆

珠雫はキリコに案内されるまま、エレベーターで特別病棟の地下に降りる。
扉が開くと、そこには照明が抑えられた十二畳ほどの空間が広がっていた。
コンクリート打ちっ放しの壁には一見して日本語ではないとわかる背表紙の本が詰まった本棚が並び、部屋の中心には鉄板と鉄パイプを組み合わせて作られたような簡素な寝台がある。
一見すると手術室のようにも見える空間だが……
「ここは？」
「私の私的な実験室。自室みたいなものよ」
答えるとキリコは部屋の隅に置いてあるコーヒーメーカーに向かう。
「適当に掛けて。飲み物はコーヒーでいいかしら？」
「いえ。お構いなく。世間話をしにきたわけではありませんから」

「うん。確か、私にお願いがある、って話だったわよね」
珠雫はコクリと頷き、一歩キリコに歩み寄って、用件を告げた。
「私に、……キリコさんの水の魔術を、治癒術を教えてほしいんです！」
これにキリコは「……まあ、大体そんなところだろうと思ってたわ」とコーヒーを一口。
「私たちの接点なんて《水使い》であることくらいだものね」
「もちろん無償で教えろなんて厚かましいことは言いませんっ。私に出来ることならなんだってしますっ。変な人体実験の被験者だって、なんだって……！」
「へえ。……大した覚悟ね。じゃあ新術式の実験体にでもなって貰おうかしら。リンパに入り込んだ癌細胞を駆逐するため、リンパ液を一度全部外に出して綺麗にするってやり方なんだけど」
「かまいません」
珠雫は即答する。
本気だった。
なぜなら騎士にとって自分の技を他人に明かすことはメリットのある行動ではない。
門下生を集めている魔導騎士ならともかく、同じ学生のキリコにそれをせがむこと自体が非常識といっていい。
それを曲げて頼むといっているのだから、そのくらいの覚悟は珠雫にもあった。
この珠雫の覚悟に、キリコは苦笑を見せる。
「……フ。冗談よ。そういうことはもう諸星君で懲りたから、危険な実験は全部自分の身体で試す事にしてるのよ。だからそういうのは間に合ってる。珠雫さんにしてもらいたいことは特にないわね」
だから、
「見返りはいらないわ。タダで私の治癒術を教えてあげる」
「え、ほ、本当ですか!?」
このキリコの言葉に珠雫は声を大に驚く。
「そんなに驚くこと？」
「き、騎士は基本、自分の技術を人に教えたがらないものですから」
「だって私は騎士じゃないもの」

キリコはあっけらかんと言い放つ。
医術は広まってこそ価値のあるもの。
出し惜しみする理由が無いと。
「それに珠雫さんは素質もありそうだし、先生喜んで教えてあげるわよ」
そういうことなら珠雫としても願ったり叶ったりだった。
彼女は深々と頭を垂れて礼を言う。
「あ、ありがとうございます！」
が――
「……ただ」
そこでキリコが言葉の調子を変えた。
彼女はまだ中身が残っているコーヒーカップを机に置くと、珠雫に歩み寄り、
「見返りというわけではないけれど、一つだけ条件があるわ」
「条件？」
「修行の前にある処置を貴女に受けてほしいのよ。それこそが、私が貴女を呼び出そうとした用でもあるわけだけど――、ね」
つん、と。
軽く、本当に軽く指先で触れる程度の力で、珠雫の鳩尾をついた。
「ッッッ!?!?!?」
瞬間、稲妻が珠雫の体内に生じ、脚の指先から脳天までを駆け抜ける。
「～～～

「大体、どれくらい時間が掛かりますか？」
「半日作業にはなるわね。でも安心して。麻酔魔術を掛けてあげるから、貴女にとっては一瞬のことよ」
寝て起きたらすべて終わっている。
そう告げるキリコに、珠雫は真剣な表情で言う。
「……折角のご厚意ありがたいのですが、麻酔はかけないで貰えますか？」
「は？」
この申し出にキリコは普段から知性の高さを隠さない彼女のイメージからは想像もつかないような、ぽかんとした間抜け顔を見せる。
しかしそれも無理のないこと。
まるで意味のわからない申し出なのだから。
だが、それはキリコからすれば の話。
珠雫にとってこの申し出は、大いに意味がある。
彼女は言う。
「日本一の医者である《白衣の騎士》の治癒術を自分の身体で体験できる。そんなまたとない機会を無駄にしたくありません」
これにキリコはやや不機嫌さを表情に滲ませ、
「……あのねぇ。さっきの痛さをもう忘れたの？　今から私は、ちょっと外側からつつかれただけでもあれだけ痛い場所を、無理矢理手を突っ込んで捏ねくり回すのよ？　それも何カ所もね。正気で耐えられるような痛みじゃないの。暴れられて手元が狂ったらことだから、そのお願いは聞けないわね」
はっきりと拒否を示す。
こんな提案、無麻酔の開腹手術と変わらない。
医者として、到底受け入れられるような提案ではないからだ。
しかし、
「ガマンできます」
珠雫は引かない。

これだけは決して譲らないと強い意志を瞳に示し、
「ガマンできないのは……大切な人の窮地に、何も出来ないことです……！」
切羽詰まった必死な声でキリコに訴えた。
それは何時のことを指すのか。
当事者であるキリコにも伝わる。
あのとき珠雫は手術室の前で狼狽し泣き叫ぶだけで何も出来なかった。
誰よりも長く、誰よりも強く、一輝の助けになりたいと想い続けてきたのに――
一番大切なときに、自分にはそれを成すだけの実力がなかった。
運良くキリコという名医が駆けつけてくれたから一輝は助かったものの、キリコがあの場にいなければ……今頃一輝は命を失っていた。
一輝のいなくなった世界。
そんなの、想像するだけで頭がどうにかなりそうになる。
許せない。
許すわけにはいかない。
ならばどうすればいいのか。
答えは一つだ。
「強く……っ、強くなりたいんです……！　どんな怪我でも治せるくらい、どんな窮地からでもお兄様を助けられるくらい、強く！　――一秒でも早く！」
それは仲間の中で唯一治癒術が使える自分にしか出来ないことだから。
自分がやるべきことだから。
その珠雫の強い決意の表情に、――キリコは思い出す。
かつて彼女と同じ、自分が成すべきことを成すために、あらゆる障害を撥ね除けてみせた男の姿を。
「……はぁ。ホント、貴女たち騎士って連中はいつもそう。医者の忠告なんて聞きやしないんだから」

キリコは呆れ果てたように溜息をつきながら、
「でも……大切にするばかりが命の使い方じゃないものね……」
寝台の下から患者を拘束するためのベルトを取り出した。
そしてそれを使って珠宇の四肢を縛り付けていく。
珠宇の意志を受け入れたのだ。
「ありがとうございます。先生」
「お礼なんていらないわ。すぐに死ぬほど後悔することになるんだもの。ほらこれを咥えてなさい」
最後にキリコは珠宇の小さな口に猿ぐつわを咥えさせ、固定する。

これがないと確実に舌を噛み切ってしまうからだ。
そうして準備を終えると、
「……本当に危険なときはこっちの判断で無理矢理落とすから、そうされたくないなら気をしっかりもってなさい」
キリコは自分の右手に治療のための魔術を発動。
空色の魔力光を纏った指先で、先ほどつついた腹部の歪みに触れると、
ぞぶり、と、泥沼に突き入れるように、指の根元までを珠宇の腹部に沈めた。

第三章　ヴァーミリオン皇国

有栖院と珠宇がそれぞれの目的地に旅立った数日後。
一輝とステラの二人も、ヴァーミリオン皇国へ向け出発した。
学園から電車を乗り継ぎ空港に向かうと、各種手続きの後、VIP専用のチャーター機に案内される。
乗務員総出の歓迎を受け、臙脂色の絨毯の敷かれた階段を上り、機内へ乗り込むと、一輝はその内装に度肝を抜かれた。
何しろ機内には、BARにサロン、シアタールーム、寝室にはキングサイズのダブルベッドに、あろうことかバスルームまで完備されていたのだから。
まるで高級ホテル。とても飛行機の中とは思えない。
流石にステラもこのクラスの飛行機には乗ったことがないようで、一輝同様、信じられないと目を丸くし、あちこち興味深そうに見て回っていた。
というのもこれはすべて、先日の《黒騎士》がらみの非礼の詫びにと、月影が手配したものだからだ。
まあ狸な月影のこと。ステラと一輝に快適でロマンティックな空の旅を提供し、二人の中を深めてもらうことで日本とヴァーミリオンの友好を深めようという下心もあるのかもしれないが。
しかしそんな月影の思惑は二人には関係のない話。
ステラは折角用意されたのだから楽しまなくてはと、映画にジャグジーにアロママッサージと、空の旅を満喫していた。
だが一方で、一輝はとてもこの旅を楽しむ気になどなれないでいた。
ステラと一緒に見た映画もまるで頭に入ってこなかったし、夕食として出された豪華な京風懐石料理も、さぞいいものだったのだろうが、味などまるで覚えていない。

今、彼の思考を埋め尽くすのは一つの悩み。
――ついに明日に迫った、ステラの両親への挨拶。
そのシナリオをどうするかという悩みだけだ。
ステラ曰く、母親はステラの判断を尊重してくれているそうなので、実質は父親、すなわちヴァーミリオン国王をどう説得するかという話なのだが、
（……一体どう切り出せばいいんだろう）
サロンのソファーに深く腰を下ろし、一輝は頭を悩ませる。
何しろ経験値がまるでないのでさっぱりわからない。
わからないが、
（とりあえず、前連盟支部に軟禁されてた時に考えた案は却下だ）
男らしく小細工は用いず、「娘さんをください」と土下座で誠意を示しながらあらん限りの声量で伝える案。
あれは間が悪く現れた父に「お前に珠雫はやれんぞ」と真顔で拒絶され、縁起が悪い。
それにいくら飾らず誠意を伝えるためとはいえ、
（即土下座というのはなんというか、雑だよね、やっぱ）
物事には手順というものがある。
向こうがこちらの誠意を聞く気持ちになっていない時に、いきなりこちらの気持ちだけ叩き付けるのは、むしろ誠意とはほど遠い。
ただの自己満足と言っていいだろう。それではいけない。
（とにもかくにも、まずはステラのご両親に僕の誠意を聞いてもいいと思ってもらわないと）
まずはそこからだ。
そこからがスタートだ。
ではそのスタートラインに着くためにはどうするか、ということが問題になるわけだが、
と、その時だ。
「ふーっ」
「ッッ～～～～!?!?」

何の前触れもなく耳の穴に息を吹き入れられる感触に、一輝は総毛立った。
もちろん、息を吹き入れたのはステラだ。
「ス、ステラ!?　え、な、なにするのさトツゼン!?」
これにステラはむすっと拗ねたように頬を膨らませ、抗議を返してくる。
「なにするの、じゃないわよっ。さっきから話しかけてもずっと上の空っていうか空返事ばっかり。イッキこそ何ぼーっとしてるのよ！」
これに一輝は気まずい表情になる。
なにしろ彼には話しかけられた記憶そのものがなかったからだ。
無意識のうちに聞き流していたのだろう。
「ご、ごめん……ちょっと考え事してて」
「もしかして、明日アタシの両親に会うから、緊張してるの？」
隣に腰掛けながら問うステラに、一輝は頷きを返す。
「……う、うん。この飛行機を降りたらいよいよだって考えたら、ね……」
「まあ、緊張するわよね。恋人の親族に恋人として挨拶するって。……アタシもイッキのお父さんとあったときはガチガチになっちゃったし。思い出すだけでも恥ずかしいぃ……」
「はは。そんなこともあったね」

その言葉に一輝は七星剣武祭の最中、偶然にも医務室で一輝の父・厳と鉢合わせした時のステラの行動に、そしてその行動が以前の自分と全く同じだったことに思い出し笑いを浮かべる。

「あのときはステラが頑張ってくれたから、次は僕の番なわけだけど、どういうふうに話を切り出せばいいのか悩んでてね」

「土下座はやめておいた方がいいわよ」

「それはなんとなくわかる」

問題なのは代わりの案が思い浮かばないことだ。

なにしろ一輝にはこういう挨拶をした経験も、相手の情報もないのだから。

だが、そこで一輝はふと思い至る。

経験はいかんともしがたくも、情報は集められる。

ステラに父親が好きなものとか聞いておけば、なにかとっかかりがつかめるかもしれないと。

「ねえステラ。ステラのお父さんって何か好きなものとかないのかな」

「お父様の？」

「うん。いきなり本題を切り出すのは……やっぱりちょっと怖いから、なにかこう、場を温めるというか、ペースを摑むためのジャブになるような世間話のネタがあれば助かるんだけど」

この一輝の問いかけにステラはしばし思案してから、答える。

「……うーん。アタシかな？」

「渾身の右ストレートだなぁ……」

あてが外れ、一輝は項垂れる。

そんな一輝にステラは励ましの言葉をかける。

「難しく考えなくても大丈夫よ。お母様やお姉様はそもそも反対してないし、反対してるお父様も、すこし子離れが出来てなくて、わからず屋で、足が臭くって髭がうっとうしいけど」

（割と不満が多いんだね）

「それでもアタシのことを大切に考えてくれてるお父様だから。アタシが大好きになったイッキの魅力がわからないはずがないわ。絶対に……話せばわかってくれるわよ。だって……アタシの最愛と最強はイッキ以外あり得ない

んだから。アタシも一緒に説得するから、一緒に頑張りましょうっ」

ステラは明るい声でそういうと、「おいで」とばかりに自分の太ももをポンポンと叩いた。

大一番を控える自分を彼女なりに勇気づけようとしてくれているのだろう。

「……ありがとう」

礼を言って、一輝はステラの好意に甘える。

身体をソファーの上で横に倒し、後頭部をむっちりと張りつめたステラの白い腿に預ける。

柔軟な筋肉と女性らしく柔らかな脂肪の乗ったステラの腿は、とても寝心地がいい。

一輝は目蓋を閉じ、その心地よさに身を預ける。

そんな一輝の頭をステラは優しく撫で、前髪を指で弄る。

『ぽにゃ』っと頬を緩めた、二人きりの時にしか見せない幸せな表情で。

真紅の瞳の中には、零れ落ちんばかりの情愛が揺れている。

それを独占しているのが自分だと思うと、一輝はたまらない気持ちになる。

この眼差しを失うなんて、一輝にはもう考えられない。

ステラが隣にいない未来なんて、想像も出来ない。

だから確かに、ステラの言う通りこの挨拶は『上手くいかせるしかない話』なのだ。

それはわかっている。

でも、

（……たぶん、ステラのお父さんを納得させるのは簡単じゃない）

ステラは大丈夫と言ったが、そうスムーズにことは運ばないと一輝は踏んでいた。

何しろ一輝とステラの間には埋めがたい絶対的な差がある。

かたや一国の第二皇女。

かたや名家の生まれとはいえ半絶縁状態の根無し草。

かたや世界から将来を期待されるAランク騎士。

かたや《覚醒》を経てもなおEランクすら遠いFランク騎士。

両親への挨拶という大一番を控え、今改めて考えてみると、自分たちは全く釣り合いがとれていない。

ステラはそんな家柄や才能なんて関係ないと言ってくれるだろう。

だが、それはステラだけだ。

ステラを大切に思っているからこそ、ステラの父は相手により多くを求めるはずだ。

そして黒鉄一輝という跳ねっ返りは、その要求に応えられるものを何一つ有していない。

この事実は非常に重い。

（僕は……ステラのお父さんの期待に応えられるだろうか……）

ステラの父から、彼の宝物であるステラを譲り受けるに足る何かを見せることが出来るだろうか。

大事なことだから――

譲れない想いだから――

不安は、どうしても消えない。

それでも飛行機は大陸の夜を翔け、一路ヴァーミリオン皇国へ向かう。

そして一輝はまだ知らない。

向かう異国の地で、彼を待ち受ける現実が、彼の想定を遥かに超えたものであることを。

◆◇◆◇◆

翌日。一輝とステラの二人が遅めのモーニングを食べ終わる頃。

飛行機はついに、ヴァーミリオン皇国上空に辿り着いた。

「イッキ！　見てっ。これがアタシの国。ヴァーミリオン皇国よ！」

久しぶりの故郷に楽しげな声を上げるステラ。

彼女の視線を追いかけ、一輝もまた飛行機からヴァーミリオンの国土を見下ろす。

視界に映るのは、国土の殆どが平野なヴァーミリオンを、どこまでもなだらかに広がる鮮やかな緑の絨毯。

所々に並び立つ風車と、川沿いに見える数える程の小さな民家が寄り添った集落。

山と建造物の多い、ややごちゃついた印象のある日本とは全く異なる光景だ。

そんな牧歌的な光景を見つめながら、一輝はヴァーミリオン皇国についての知識を思い出す。

ヴァーミリオン皇国。
それは欧州の一角、北海に面した湾岸沿いに存在する、今時珍しい絶対君主制国家である。
元々は隣国クレーデルラント王国の一部だったが、数百年前独立し今に至る。
主な産業は広い平野を生かした畜産。切り花の輸出。
美しい自然を生かした観光業。天然ガスの輸出などだ。
ここまでは欧州では珍しくない、ごく普通の国家といえる。
だが、ヴァーミリオン皇国には他の国にはない大きな特徴があった。
それは、国民の皇族に対する忠誠心の高さだ。
有名なエピソードがある。
多くの悲劇を生んだ第二次世界大戦。
ナチスドイツの台頭により、欧州は火の海となった。
その戦火はヴァーミリオン皇国にも及び、皇都フレアヴェルグは陥落。
ヴァーミリオン皇国は一度、国家としての形を失った。
この際、当然ヴァーミリオン皇国を統治下に置いたナチスドイツは、ヴァーミリオン皇族の根絶やしに乗り出したのだが――、それは上手く行かなかった。
ヴァーミリオン皇国民が一丸となって皇族を匿い続けたからだ。
趨勢が変化し、ナチスドイツがヴァーミリオンから完全撤退するまでの間、どんな非道な拷問にも屈さずに。
そして第二次世界大戦が終結するや、国民は全世界に加速度的に広まった政治の民主化の流れを完全に無視し、再びヴァーミリオン皇族を唯一絶対の王として立てたのだ。
このエピソード、鉄の忠誠心には、ヴァーミリオン皇国建国の歴史が大きく関係している。
ヴァーミリオン独立戦争は、ときのクレーデルラント王国の圧政に耐えかねた民衆が、クレーデルラントの穏健派貴族筆頭であったヴァーミリオン公爵を旗頭に始めた戦争だったのだが、……この時代、有力貴族の縁者は大抵が中央に表向きは婚姻という形を取り、人質として囲われているもの。
ヴァーミリオン公爵も例外ではなく、クレーデルラント王国は家族の命を盾に、ヴァーミリオン公爵に反乱の中止を迫った。

だが、ヴァーミリオン公爵は戦争を止めはしなかった。
毎週愛する家族の肉体の一部が送られてくるという悪夢のような状況にも屈さず、自身の家族全員の命と引き替えに独立戦争をやりきったのだ。
自分に助けを求めてきた、弱き民のために。
このときのヴァーミリオン公爵――すなわちヴァーミリオン皇国初代皇帝の献身を国民は今もなお忘れていない。
それは童話として、歴史として、広く語り継がれ、鉄の忠誠心を育んでいる。
『アタシたちは一つの国で、一つの家族なの』
いつだったか。
寮室での何気ない会話の中、ヴァーミリオンが話題になったとき、ステラはそう自分たち皇族と国民の関係をそう言い表した。
国民は皆、皇族を愛し、皇族もまたそんな国民を愛し、善政を敷く。
ステラの国防に対する強い想いも、その気持ちが根幹にあってのものなのだろう。
そこまでは、一輝も一般常識として知っていた。
普通の国家よりも、皇族と国民が近しい間柄にあると、理解していた。
しかし――
それでも、飛行機を降りた瞬間に飛び込んできた光景には、度肝を抜かれた。

『ステラ様～～～

「キャー！　ステラちゃん！　試合、すっごく格好良かったよーっ！」
人がいた。
政府専用空港の敷地を埋め尽くさんばかりの、幾十万もの人が。
先ほどの衝撃は彼らの歓声だったのだ。
「みんなーーーーっ！　ただいまーーーーっ！」
この規格外の歓声に、ステラはさしたる驚きも見せず、手を振って言葉を返す。
これに集まった人々のボルテージは急上昇。
大地を揺らすほどの歓声が上がった。
そして、群衆の興味はステラの隣に立つ一輝にも及ぶ。
「あっ！　あの男の子テレビでみた！」
「ステラ姫に勝った奴だ！」
「ということは彼が、ステラちゃんのフィアンセか！」
「やだ結構格好いいじゃない」
「試合の時とは全然違って優しそうね」
「約束通り国王に挨拶に来たんだ！」
「ようこそヴァーミリオン皇国へッ！」
『『ようこそーーーーっ！』』
幾十万もの声援と視線が自分一人に飛んでくる。
大舞台は七星剣武祭でも体験したが、これはその比ではなかった。
一輝はどうすればいいかわからず、とりあえずステラの真似をして手を振った。
すると、

『『～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っっっ!!!』』

一輝の返した反応に、群衆は歓声と拍手を返してくる。

（う、うわ……なんかすっごい恥ずかしい……）
名家の生まれとはいえ、ぞんざいに扱われてきた一輝はどうにもこういう空気が苦手だ。
他人に有り難がられる。
自分はそんな立派な人間ではなかろうと、どうしても思ってしまう。
「ステラ様。黒鉄様。下に迎えの車が来ております。足下に気をつけてお降りください」
「ありがと。とっても楽しい旅だったわ」
見送る乗務員に礼を言って、二人は出発時と同じ臙脂色の絨毯の敷かれた階段を降りる。
階段の下には純白の高級車が停まっている。
一輝としてはこの視線の集中砲火からは早く逃げたかったので、車はありがたい。
と、そのときだ。
二人の到着を待たずに、送迎車の助手席の扉が開いた。
そして、そこから一人の小柄な、長くウェーブの掛かったビーチブロンドの女性が降車しこちらを見上げるや、
「おかえりなさい。ステラちゃん」
幼い造形の顔に温和な笑みを浮かべ、ステラの帰郷を歓迎した。
「え……っ！　迎えに来てくれたの!?」
これに隣のステラは驚きの声を上げると階段を一気に駆け下り、彼女の前に立つと両手を握った。
対し女性もステラの手を握り返し、
「当然よぉ。数ヶ月ぶりにステラちゃんに会えるんだもの～」
「ありがとう！　アタシも会いたかったっ！」
共に笑顔で再会を喜ぶ。
その少女はやや髪の色素が薄いが、『ほにゃ』と頬を緩ませた笑顔が、油断しているときのステラにそっくりだ。
ずいぶんと幼く見えるが、……彼女が第一皇女なのだろうか。
仲むつまじい二人の少女の姿に一輝がそんなことを考えながら所在なく突っ立っていると、ステラが一輝の置いてきぼりな心境を察し、彼に言った。
「あ、ごめんなさいイッキ！　紹介するわ！　アタシのお母様よ！」

「え!?　そっち!?」

西京先生と同じ類いの妖怪だろうか。

と、そんな失礼なことを内心考えていると、

「貴方が黒鉄一輝さんね。初めまして～。ステラ・ヴァーミリオンの母のアストレア・ヴァーミリオンです～。よろしくお願いしますぅ～」

アストレアがゆったりとした口調で自己紹介を済ますと、一輝に向かってお辞儀をする。

先に頭を下げられたことにしまったと、自らの手抜かりを感じつつ、一輝もまた慌ててお辞儀を返す。

「あ、ご丁寧にどうも……！　黒鉄一輝です！　本日は、お招きいただきありがとうございます……！　夏休みの間、お世話になります……！」

「ふふふ。テレビで見て感じた力強いイメージと違って、とっても丁寧な男の子なんですね～。おばさん、そういう男の子は好きですよぉ～」

「お母様も中継を見ていたの？」

「ええもちろん。七星剣武祭決勝、私もテレビで観戦させていただきましたよ～。正直に言わせていただくと、まさかステラちゃんが負けるなんて思っていなかったからびっくりしちゃいました。とおってもお強いんですね～」

「いや、そんな……、ギリギリでしたよ。あの試合は」

「圧勝でも辛勝でも勝ちは勝ちですよぉ」

アストレアはそう言うと、一輝の手をきゅっと握った。

それから、声音に乗せられるだけの感謝を込めて、

「イッキさん。本当にありがとう。ステラちゃんとあそこまで競い合ってくれて。あんなに楽しそうに戦っているステラちゃんは初めてみました。……ヴァーミリオンや、隣国のクレーデルラントには、ステラちゃんの強さについていける人が一人もいなかったので。……異国の地に娘一人送り出すのはすこし不安でしたけど、こんな素敵なボーイフレンドを見つけられたのだから、日本に行かせたのは正解でしたね」

握った手、表情、声音。そのすべてからアストレアの感謝が上辺だけでない、心からのものだと一輝には伝わった。

ステラの言う通り、母親はステラの行動、判断を支持してくれているようだ。

そのことに一輝は安堵し、緊張のほぐれた笑みで自分もまた礼を返す。
「ありがとうはお互いさまです。僕もステラに出会えたから、彼女を好きになったからこそ、あそこまで戦えたのですから」
「ふふ。では倍率ドンさらに倍ですねっ」
(ここにきて強烈な加齢臭が……!)
「ねえお母様。お母様が試合を見ていてくれたってことは、もしかしてお父様もいっしょに?」
「もちろん。ルナちゃんもいっしょに、家族みんなで応援していたのよ~」
「よかった! じゃあお父様もイッキが強いのは知っているのね! やったわねイッキ。これなら貴方のランクは障害にならなくて済みそうよ」
だがこのステラのひと言に、
「あ~……それは、ど~かしらぁ……」
アストレアは困ったような顔で懐疑的な意見を示す。
「どうって、どういうこと?」
「だってパパ、あの試合最後まで見てなかったから~」
「な、なんで!? あ、途中で仕事が入った、とか?」
「そうじゃなくて~、ほら、中盤くらい? にイッキさんがステラちゃんのお腹をズバーっておもっきり斬ったでしょ~。あれ見て泡吹いて三日ほど気絶してたからぁ~。もー目を覚ますなり軍隊を動かして日本に宣戦布告しようとするものだから、ママとダンダリオンさんの二人でなだめてたんだから~」
「……」
あまりに納得のいく理由に一輝は言葉と血色を失う。
「なによ。ちょっと斬られたくらいで大げさなんだから」
隣でステラがそんなことを言いつつプンスコ憤慨しているが、あの手応えはちょっと斬った程度ではなかった。高レベルの自己再生が可能なステラでなければ一発でレフェリーストップが入っていたであろう致命傷だ。
愛娘のそんな姿を見れば、卒倒は当然の反応だろう。
「あ、それでね、今のパパの話で思い出したのだけど、なんだかパパがイッキさんに会う前に、一度みんなで家族会議をしたいって言ってるの」

「はぁ? なんで?」
「ステラちゃんから一度、ちゃんとイッキさんについて話を聞きたいんだって~。今なにもわからないまま顔を見たら冷静な判断が出来そうにないからって。……どうかしら。イッキさんにとっても悪い話ではないと思うの。ちょっと客間で待ってもらうことにはなるのだけれど~」
「はい。僕は大丈夫です」
一輝は即答を返す。
断る理由などないに決まっている。
異国の地で早世したくはない。
「ごめんねイッキ。お父様がワガママなことといいだして」
「気にしてないよ。むしろ僕としても、いきなり顔を合わせるより、ステラから僕のことをある程度伝えておいてくれた方が気が楽だし」
「わかった! イッキの素敵なところ、尾ひれってかもうジェットエンジンくらいつけて話しとくわ!」
「き、期待値が上がりすぎない程度にね……っ」
こうして話がまとまり、アストレアが二人に対し後部座席に座るよう勧めたときだ。
今まで会話の邪魔にならないよう沈黙を保っていた群衆の中から、恰幅のいい中年女性が現れて、三人に提案する。
「ねえねえ。さっきから話聞いてたけどさ。婿さんが暇になるってんなら、その間ウチらで嫁さんに皇都を案内したいと思うんだけど、どうかね? ステラちゃんのダーリンにこの街や国のこと、色を知ってほしくて、帰郷に合わせて実はウチらでも準備してたんよ。もちろんイヤなら無理強いはしないけど……」
この中年女性の提案に、背後の群衆も『いいじゃんそれ!』『賛成ーっ!』と乗り気な反応を示す。
それはステラも同じだった。
「ヤナさん、それすっごく素敵なアイデアだわ! そうしてもらいなさいよイッキ!」
ヤナ、というのは中年女性の名前だろう。
名前がすぐ出てきたこと、話口調、それらからステラともそれなりに親しい間柄と見受けられる。

ならば信用しても問題なさそうだ。
一輝はそう判断し、
「うん。じゃあお言葉に甘えて、よろしくお願いします」
ヤナの提案を受け入れた。
一輝としてもただ城内で待ちぼうけをくらうより、恋人の生まれ育った街を見て回った方が有意義だと感じたからだ。
「では～、家族会議が終わったらステラちゃんに連絡してもらいますので～、イッキさんはそれまでヴァーミリオン観光を楽しんでいってください～」
「みんなー！　イッキのことよろしくね！」
『オオオーーーーッ！』
こうしてヴァーミリオンの皇妃と皇女は一輝を群衆に預け、先に城へ向かった。
車が見えなくなるまで見送ってから、一輝は改めてヤナと群衆に礼を言う。
「えっと、ヤナさん、でしたか？　親切な提案ありがとうございます。見知らぬ城の中で一人で待たされるのはとても落ち着けそうにないので、本当に助かりました」
対しヤナと群衆はニッコリと満面の笑みを浮かべ、
「いやいやお礼なんていらないよ。聞きたくもない」
「え？」
突如、ヤナの声音から温かみが失せる。
そして、口調の変化に戸惑う一輝の前で政府空港の滑走路に犇めく群衆たちは、どこからともなくぞろりと、鋤や鍬、高枝切ばさみ、果ては角材に釘を打ち付けたような物を取り出した。
（……は？）
彼らの行動に一輝の理解は当然のようについて行けない。
そんなモノを持って何をするつもりなのか、さっぱりわからず呆然と立ち尽くし、

「じゃあ早速案内してあげるよ婿さん。――ゲルマン海の深海へね！」
「うわあああああ!?!?」
自身の頭上に金属バットが降り落ちてきた段になって、一輝はようやく自らの危機を、そして自身に向けられる害意を知って回避行動を取った。
バコンッ！　と音を立てて的を外した金属バットが滑走路を砕く。
（な、な、なぁあああああ!?!?）
――本気だ。
理由はわからないが、間違い無く彼らは本気で自分に襲いかかってきている。
しかし、一体何故!?
「ちょ、え、ちょっと待ってください！　これはいったいどういうことですか!?」
その疑問を一輝が口にすると、
『どうもこうもねーよ！　このヤリチン野郎！』
『ノコノコ彼氏ヅラして現れやがって！　こんな田舎国家には情報が伝わってないとでも思ってんのか！』
『アンタが日本でも札付きの悪党だってことはニュースで知れ渡ってるんだよ！』
『戦いばっかで恋愛に初心なステラちゃんをそそのかして、ど、奴隷プレイしてるってこともね！』
『アタシたちの大事な大事なお姫様を汚しやがって！』
『テメェ、生きてヴァーミリオンから出られると思うなよォオオ!!!!』
群衆は目を血走らせ、一輝を圧殺するように四方八方から襲いかかってきた。
この彼らの言葉、そして行動に、一輝は悟る。
（も、もしかして、あの誤解がまだこっちでは解けてないのかーーーーっ!?）
それはもちろん、かつてのステラとのスキャンダルの際に赤座が流した一輝に対するデマだ。
一輝が昔から札付きの悪党で、ステラを弄んだとかなんとか。
自分がステラ以外の女生徒とも複数交際を持っている、ずいぶんとバラ色な学園生活を送ってる男になっていた

ことを一輝も覚えている。
日本では周囲の協力や、一輝自身の人柄もあり、少なくとも彼の周りではとうに解けた誤解。
しかし、地球を半周した場所にあるヴァーミリオンでは、皆の反応を見るにそうなってはいないようだ。
まあそれも無理のない話。
マスコミは基本的に騒ぎを面白おかしく煽りはするが、それが誤りだった場合のフォローは殆どしない。それは自らの非を認めることになるのだから。
ショッキングな誤報は過剰なくらい伝わっているが、真実は殆ど届いていないのだろう。
となれば誤解を解くしかない。ないのだが――
（ともかくみんな目がヤバイ！　とても話が出来るような状態じゃないぞこれ！）
ここは逃げの一手が正解だ。
そう判断し、一輝は身を低くかがめ、脱出経路を探す。
一瞬のうちに冷静さを取りもどし、周囲を窺う一輝の表情に、ヤナは彼がこの場を逃げようとしていることに気付き、声を上げる。
「逃がすんじゃないよお前たち！」
『『オオォォォ

目指すのは、遠く皇都フレアヴェルグの街並みの向こうに見える巨大な城だ。
今自分の口から何かを説明したところで、彼らの耳には入らない。
ここはもう、ステラを頼るしかないと考えたからだ。
しかし、そんな一輝の行く手に――
「ん？」
夏の日差しに揺らめく陽炎の向こうから、何かが押し寄せてくる。
車線も何もかもを無視し、道路の横幅一杯に広がって。
さながら洪水のように。
それはドラマやアニメの世界でしか見たことがないほどの車両の群れ――
砲をこちらに向けた、戦車の大軍だった。
「うそでしょ……」
直後、轟音と衝撃がヴァーミリオンの空に高く轟いた。

◆／◆／◆

「あら～、何の音かしら～？」
遠くで何かが爆ぜた音に、アストレアは小首を傾げる。
それは無数の戦車砲が一輝の乗る乗用車を消し飛ばした音だったのだが、
「ヤナさん色々準備してたって言ってたから、イッキのために歓迎の花火をあげてくれてるのかも！」
「うふふ。あとでみんなにはお礼をいわなくっちゃね～」
何も知らない二人はどこまでも平和だった。

◆／◆／◆

一方、黒鉄一輝は持ち前の運動能力をフル動員。

戦車砲が火を噴く直前に《陰鉄》を顕現。
車の屋根を切り飛ばすや、すぐさま脱出。
着弾の瞬間、切り取った屋根を手に取り、それを盾に爆風の直撃をやり過ごして、盾を打つ爆風の勢いを利用し跳躍。
道路沿いに並ぶ建物の上に飛び移り、難を逃れていた。
の、だが――
「し、し、死ぬってこれは！」
「死んでくれて結構。この程度で死ぬような男にステラ様を任せるつもりはない。それがヴァーミリオン皇国民の総意だ」
一輝の割と本気な抗議に冷淡な言葉を返すのは、建物の屋根の上で待ち構えていた赤い軍服を着た者たちだ。
彼らは屋根の上に逃れた一輝を囲むように、近隣の建物の屋根に展開。
一輝に銃の照準を合わせていた。
そして、そのうちの一人。
肩章を着けた妙齢の女性が、眼鏡の奥から鋭い視線を投げつつ、一輝に宣告する。
「私の名はシグナード・イルオーン。ヴァーミリオン皇国陸軍大将を任されている者だ。イッキ・クロガネ。貴様はすでにヴァーミリオン皇国陸軍に包囲されている」
「軍まで動くほどのことですか……」
ヴァーミリオン皇国民の忠誠心の高さは聞き及んでいたが、まさかこれほどとは。
しかしこれもすべては身内の蒔いた種だ。
「逃げたり暴れたりしないので僕の話を一度聞いてください。すべては誤解なんです」
「誤解？」
幸いこのシグナードと名乗った女性は職業軍人だけあって、空港の国民たちに比べればだいぶ落ち着いているように見える。
だから一輝はなんとか会話による説得を試みた。
「あのスキャンダルのとき、僕に関するいろんな情報が出回ったと思うんですけど、それはデマなんです。僕は実

家と仲が悪くって、僕のことをよく思っていない人たちが流したでたらめなんですよ！」

「ほう。では貴様がなんの罪もない穏やかに日々を営んでいた家庭に乗り込み、暴力を振るう不良だという話は嘘か」

「……もちろ、ん……、あれ？」

即答しようとして言葉に詰まる。

――この場合、中学の頃の道場破りはどういう扱いになるのだろうか。

「ステラ様が着替えをしているところに突然上がり込み、自分も服を脱ぐという痴漢行為に及んだことも嘘か」

「……そ、それは、その」

「ステラ様に敗者は勝者に一生服従などという理不尽な条件を提示し、決闘に負けたステラ様を奴隷にし言うことを聞かせたのもか！」

「……」

（ど、どうしよう……！　なんか全部微妙にホントのことっぽくって言い返せない！）

ついにぐうの音も出なくなる一輝。

思い知るのは赤座の巧妙さだ。

一〇〇％の嘘ではないので否定することが出来ない。

一輝の真面目な性格を実に上手い具合に利用している。

ようやく引き攣った笑顔で絞り出せた言葉は、

「いやぁ、ニュアンスって怖いですね」

「クソが」

汚物を見るような目で吐き捨てられた。

周囲の兵士たちが引き金に掛けた指に力を込めるのがわかる。

だが――、そんな殺気立つ兵士たちを手で制し、シグナードが意外なことを口にする。

「……まあ、情報とはどうしても第三者の恣意が反映される。地球を半周する間に、歪んでしまうのもまた事実なのだろう。……ステラ様は貴様のことをいたく気に入っておられるようだし、あの決勝を見る限り、ただの人間のクズというわけではないのは、私たちにもわかっている。だから貴様に関する情報がどの程度正確なのかなど、もはやどうでもいい。肝はそこではないからな」

「どういうことですか？」

「ステラ様の恋人ならば知っているだろう。ステラ様がどのような苦難を乗り越えて自分の力を操れるようになったかを」

「……ええ、まあ」

それはステラ本人から聞いた話だ。

能力が発現した当初、ステラは竜の炎の力を御しきれず、自らの力でその身を焼かれたという。

しかしステラは小国ヴァーミリオンにとって自分の力がどれだけ貴重な物か、幼いながらに理解していた。強い伐刀者はその国にとって掛け替えのない財産だと。

だから周囲の反対を振り切り、決死の覚悟で自身の力のコントロールを身につけた。

すべてはこの国の民のために。

……ステラがまだ五歳の頃の話である。

「ステラの皇族としての矜持には、圧倒されました」

「やさしいお方なのだ……」

シグナードは噛みしめるように呟き、

「しかしステラ様がそう思っているのと同じように、私たちもまた、ステラ様のことを守りたいのだ」

「……！」

「この場にいる全員が、ステラ様のことを、娘として、妹として、姉として、家族として愛しているから。大切に想っているから。……だからこそ、私たちの頭越しにこの縁談を纏めるなど許されることではない！　決して許しはしない！」

再び一輝を睨みつけると、声を大に告げた。

「イッキ・クロガネ！　ヴァーミリオン皇国民は貴様に決闘を申し込む！

ステラ様を娶りたくば、騎士らしく剣を以て私たち全員に示してもらおう！

貴様があの誰よりも美しく気高く、そして優しい私たちの愛する少女の伴侶に相応しい男であることを！」

『『そうだそうだーーーっっっ!!!』』

『『じゃないと絶対みとめねえぞおおお!!!』』

シグナードに同調し、屋根の上の兵士たちや、いつの間にか建物の下を埋め尽くしていた軍人や国民が一斉に声を上げる。

その光景を目に、一輝はようやく、自身が置かれている状況を理解した。

なんてことはない。

ようするにこの国は――

（国民全員、親バカなのか……！）

障害はステラの父親一人と思っていたが、大甘だった。

しかしそれも仕方がない。

普通考えられることではない。

いかに一国で一つの家族だ、とステラから聞かされていても、日本人である一輝にとって皇族とは遠い存在だ。

皇族がどこの誰と結婚する云々も、すべてが決まった後ニュースになっているのを見る程度。

皇族の結婚相手を自分たちで見極めてやろうなど、考えもつかない。

――だけど、

「なるほど。それは確かに道理だ」

◆◇◆◇◆

「……！」

瞬間、国民を代表し一輝と対峙するシグナードは見た。

一輝の口元に、薄い笑みが浮かんだのを。

そして、

「ステラも前に言っていました。自分たちは一つの国で一つの家族なのだと。なら貴女方の慎りはまったく当然の

ことだ。貴女方を納得させずにステラを娶るなんて許されることじゃない。――この決闘、僕に断る理由はありません」

異国から自分たちの姫を奪いに来た男は、軽く手に持つ黒い刀の切っ先を持ち上げると、渋ることすらせず自分たちの挑戦を受け入れた。

「っ……！　威勢がいいな。ならば――」

「ただし！」

だが、シグナードが兵士たちを制していた手を振り下ろそうとした刹那、一輝は言う。

「ただし一つだけこちらからも条件があります」

「条件？」

「貴女方全員を倒すのではなく、貴女方全員を相手に振り切って、ステラの元まで辿り着くことが出来たら僕の勝利ということにしてもらいたい」

「勝利条件を緩くしろと？」

対し、一輝は「違う」とひと言。

「僕と貴女方の最愛の女の子が、貴女方が傷つくことを望まないからですよ」

「ッ――！」

その返しに、シグナードは言葉を失う。

一輝がステラという少女に対しての深い理解を示したからだ。

なるほど。確かにこの提案を蹴るような人間に、ステラへの愛を語る資格はない。

だから、

「……――いいだろう。逃げ切れるものなら、逃げ切ってみせろっ！」

シグナードは一輝の提案を受け入れるや、兵士たちを制していた右手を振り下ろした。

瞬間、爆布のような音が飛沫き、幾百もの鉛の驟雨が一輝目掛け放たれる。

だがこのとき一輝はすでに行動を終えていた。

《陰鉄》を持ち上げ、シグナードたちの挑戦を受けたそのときに。

常人では目で追えぬほどの刹那の中で、

——自分の足下の屋根を切断していたのだ。

一輝が軽く踵で屋根を叩くと、切り込みを入れられた屋根は容易く崩落。
綺麗な丸い穴の中に一輝を飲み込んでしまう。
これでは当然銃撃は当たらない。
『あいつ！　屋根を斬って下に逃げやがった！』
「くっ！　建物の扉と窓を見張れ！　出てくるところを逃がすな！」
シグナードはすぐに建物の出入り口の警戒を命じる。
これが、大きなミスだった。
なぜなら一輝は穴からそのまま建物の中へは入らず、
——縁に指を掛け、摑まっていただけだったからだ。
「よいしょっと」
一輝はシグナードの指示で屋根へのマークが外れたことを確認してから、指先で身体を跳ね上げ、穴から飛び出す。
そして、
『シグナード大将！　あれを！』
兵士が気付くよりも早く、城に向かって駆け出した。
その後ろ姿にシグナードは苦虫を噛みつぶしたような表情になる。
「し、しまった……！　フェイントかッ！　追え！　絶対に逃がすな！」
『『オオオオォォォォオオ!!!』』
遠ざかる一輝を追いかけながら、兵士たちは手にした銃の引き金を引く。
しかし、放たれる銃弾そのすべてを、右へ左へステップしやり過ごした。
発射音の位置を聴覚で確認。
弾速から到達時間を予測し、一度として後ろを振り返らないまま。

その動きは、不安定な足場にもかかわらず非常に素早かった。
ともすれば、平地の空港を走っているときよりも。
というのも、ここにきて黒鉄一輝の心身のコンディションは、最高潮に達したからだ。
すべては、彼らヴァーミリオン国民のおかげだ。
彼らが本気で向かってきてくれたおかげで、一輝は気付くことが出来た。
『ステラの伴侶と認めてもらう』
『ステラを譲ってもらう』
それが愚かな考えであると。
心から愛しているのなら、何よりも大切に想っているのなら、

——譲れるはずがあるものか。

自分がステラを譲れないように。
ヴァーミリオン国民のどこまでも本気な姿勢に、一輝はそれを思い知る。
彼らもまた自分と同じなのだと。
ならば、相容れるわけがない。
相容れようとする事自体が甚だ間違いなのだ。
同じ少女を心から愛する者同士。
少女を手に入れんとするならば、すべきことはただ一つ。
ステラの手を引き、掻き抱いて、奪っていく。
相手よりもより強い力で、——想いで！
（想いの強さなら、誰にも負けない——ッ！）
彼らにも、ステラの父親にも、——決して。
それ以外に、彼らを納得させる方法など存在しない。
その心境に行き着いた瞬間、一輝はようやく気持ちに踏ん切りを付けることが出来た。

――認めてもらえないかもしれない。

つい先ほどまで一輝の頭の中を埋め尽くしていた、そんな弱い考えは霧散し、彼は燃える瞳で真っ直ぐ城を見つめる。

もう二度と、認めてもらい、譲ってもらおうなどとは思わない。

奪って、認めさせる……！

それこそが、――黒鉄一輝の生き方であり、ステラが愛してくれた自分なのだから。

『な、なんだあの男……！　後ろに目でもついてるのか!?』

『それにこの不安定な足場で、なんであんなに速く走れるなんて……！』

『大将！　ダメです！　追いつけません！』

「チィイッ」

心の重荷が消え、一層身軽になった一輝に兵士たちが追いつけるはずもない。

一輝は屋根と屋根の間を跳躍しながら、瞬く間に追っ手を引き離す。

兵士たちは手にした銃で一輝に銃弾を放つが、そのいずれもが当たらない。

兵士たちの腕が悪いのではない。

一輝が右へ左へステップし、的確に銃弾を回避しているのだ。

――一度として背後を振り返らぬまま。

弾丸の速度はすでに見た。そして覚えた。

ならば、発射音の位置と角度から銃弾が飛来するタイミングは大凡通算できる。

気持ち大きめに回避を行えば誤差を含めて避けきることは可能。

これにはシグナードも舌を巻いた。

彼の運動能力の高さは知っていたが、シグナードが見たのはあくまでも平たいリングの上での一輝だ。

目にとまるのは主に剣技の冴えばかり。

伐刀絶技《一刀修羅》の印象も合わさり、試合に特化した強さの騎士と思っていた。

しかしそれは間違いだ。

シグナードは思い知る。

その剣技を支える根幹、基礎。

尋常ではないほどに研ぎ澄まされた、一輝の身体能力と集中力。そして空間把握能力を。

一輝はあらゆる地形を、あらゆる不意打ちを、まるで苦にしない。

常に頭を回し、瞬間瞬間で最善の行動を選び出し、戦局を打開する術を心得ている。

このしぶとさ、目に付くすべてを利用するしたたかさ――

（――この男、正規の試合よりも戦争で活きるタイプか……！）

非伐刀者の軍隊など相手にもならない。

一輝ならば単騎で乗り込んで敵将の首を挙げて帰ってくることも可能だろう。

ステラのような大軍を一撃で瓦解する派手さこそないが、さながら鋭い針のように敵の懐中深く突き刺さる突破力を持っている。

侮っていた。

アレを自分たちで止めることは出来ない。

しかし――

（それでも、彼女たちを振り切ることは出来んぞ……！）

◆◇◆◇◆

（おかしい）

シグナードたちを完全に千切り、一人ヴァーミリオンの建物の屋根を疾駆する一輝は、違和感を覚えていた。

とうに追手は振り切り、姿も見えないというのに――

（ずっと貼り付いてきている視線が二つある）

しかも一つは、吐息すら聞こえそうな近くにある。

一体どこだ。

右でもない。

左でもない。

前でも、後ろでも、上でもない――ならば、
「――下かッ！」
瞬間、水音と飛沫を上げて、一輝の真下の屋根から三つ叉の矛が飛び出してきた。
一輝はこれをからくも《陰鉄》で防ぐ。
だが動きは止められてしまい、
「へっ、今だぜミリィ！」
矛を手に屋根の中から現れた小麦色の肌の少女が叫び、
「ていうかぁ、言われなくてもわかってる系～」
直後、一輝の耳を乾いた炸裂音が打つ。
同時に大腿部に走る稲妻のような予感。
（狙撃か……！）
「ファ！」
「おおぅ⁉」
幾たびも死線を越え研ぎ澄まされた直感は、一輝の身体を流れるように動かした。
矛の長い柄に体重の乗った蹴りを放ち、一人目の襲撃者を引きはがすや、
「セアッ！」
風を突き破り飛来してきた黒く丸い銃弾を、一刀両断、叩き斬る。
割り断たれた弾丸は《陰鉄》の刃を滑り、一輝の左右に流れ――
「アッハッ☆」
「ッ……⁉」
直後、左右から一輝の両足目掛け、半球状の弾丸が急旋回し突っ込んできた。
一輝はこれを咄嗟に後ろへ跳んで躱す。
それは敵の攻撃をやり過ごしたからといって油断しない、常に分の悪い戦いを勝ち抜いてきた一輝の集中力あってこその回避だった。
半円の弾丸はターゲットを失い屋根にめり込み、その動きを止める。

「やだ！このヒト超はやい！。今のタイミングで躱されるとかマジダルいんですけどぉー」
「へへ。まあそのくらいじゃねえとオレらの相手としちゃハリアイがねーけどな」
一輝に斬り飛ばされた少女は、宙でくるりと身を回し、赤い瓦屋根に着地する。
隣には小柄なマスケット銃を携えた少女もいた。
突然、屋根を破壊することもなく、水面から飛び出すように現れたこと。
先ほどのあり得ない軌道でこちらを追尾してきた弾丸。
一輝は悟る。
間違い無くこの二人は――
「……伐刀者か」
「はじめましてだなステラの彼氏！　オレはヴァーミリオン国立魔導院一年、ティルミット・グレイシー！　さっきの反応は中々良かったぜ！」
「あれ～？　自己紹介的な流れー？　んじゃアタシもやっとこか。ドーモ、ヴァーミリオン国立魔導院一年、ミリアリア・レイジーでーす。ステラちゃんとはぁ、ちっちゃい頃からのマブダチぃみたいなぁ？」
「黒鉄一輝です。……君たちもステラのために僕を試そうと？」
問うと、ティルミットと名乗った少女がカララと笑う。
「あー、違う違う。オレらはべつにステラが誰と結婚しようとどーでもいいよ。そんなんアイツが好きに決めればいいじゃん」

「アタシたちの目的は、こおれぇ～」
言って、ミリアリアが一枚のざら紙を一輝に見せる。
そこには一輝の顔写真と――

DEAD OR ALIVE の文字。

「賞金首になってるーッ!?」
「そ。アンタを倒すと軍からボーナスがもらえんだよね。それも一〇〇万EL（ミリス）！」
「先週超かわいいバッグみつけちゃってぇ、金欠でミリーちゃん超困ってたの～。まさに渡りに舟ってかんじぃ？」
どうやら手配書は皇国陸軍により街中にばらまかれているらしい。
ちなみに一〇〇万ELは日本円にして一億円。
破格の金額だ。
その金額に聡（さと）い一輝は理解する。
敵の本気の度合いを。そして、軍やティルミットたちの背後にいる者の存在を。
（仮にも軍を動かしているのだから、国民の独断じゃないと思っていたけど――）
絶対王政のヴァーミリオンでこれだけの金額を国庫から引き出せるのは一人しかいない。
この騒ぎにはヴァーミリオン国王も関与している。
主導しているのか、協力しているのか、どちらかはわからないが、容認はしているということだ。
（殺意高いなぁ）
まあこの試合を見れば当然かもしれないが。
と、一輝が自身に向けられるヘイトの高さに苦笑していると、
『いたぞ！　一〇〇万EL（ミリス）だ！』
『くそっ！　もうあの問題児コンビが接敵してやがる！』
『あいつらこんなときばっかり真面目に働きやがって！』
『二人に美味（おい）しいところもってかせるな！　いくぞ！』

ティルミットたち以外にも賞金に目が眩んだ者たちが屋根伝いに押し寄せて来ていた。
これを見てティルミットたちは、
「おっと、ハイエナが集まってきやがった」
「んじゃチョッぱやで片付けちゃおっか」
再び戦闘態勢を取る。
ティルミットは自身の霊装《トリアイナ》の能力を発動。
「《物質潜行》！」
再び屋根という物質を自分にとっての海に変え、頭から飛び込み、内部に入り込む。
同時に相方のミリアリアはその場に膝を突き、
「《カラミティバレット》――三連射ッ！」
マスケット銃型の霊装から、三発の弾丸を撃ち放った。
形こそマスケットだが、彼女の霊装に装填という概念はない。
そしてこの弾丸はただ真っ直ぐ空を翔る弾丸ではない。
先ほどの一撃でそれを理解している一輝は、ギリギリで躱そうとはせずにすぐに走り出す。
するとやはりというか、弾丸は鋭くカーブし、逃げた一輝を追いかけはじめた。
これこそが絶対命中の概念を持つミリアリアの霊装《カスパール》の能力だ。
幾たび弾かれようが、弾丸が両断されようが、敵を貫くまで追いかけ続ける魔弾。
非常に厄介な能力だ。が、
攻略法はすでに割れている。
一輝は自分の周囲を旋回しながら襲いかかってくる弾丸を辛くも躱しつつ、屋根の上のある場所を目指す。
煙突だ。
（さっきと同じように、引きつけて壁にめり込ませる）
だが――
「ところがぎっちょん！」
煙突に近づいた瞬間、待っていたとばかりに、煙突の側面から三叉槍が突き出てくる。

これを一輝は咄嗟に身体を捻り、皮一枚で回避。
すぐに煙突から離れる。
（壁に近づくとティルミットさんからの攻撃が来るのか……！）
「まだまだいくぜー！」
「くっ」
しかも逃げた先の足下からも、次々と三叉槍が飛び出してくる。
これにより一輝は一ヶ所に留まることが出来ず、引きつけてめり込ませるという誘導系お決まりの攻略法は使えない。
《カラミティバレット》の弱点を、実に上手くカバーしている。
「いいコンビですね……！」
「当然だぜ！　なんたってオレとミリィはこの国じゃ二人しかいないCランク騎士だからな！」
「ていうかー、褒めても見逃してあげないけどー」
言って、ミリアリアは速度の減衰してきた《カラミティバレット》の制御を放棄。
再び三発の《カラミティバレット》を発射し、弾丸を入れ替え容赦無く一輝を追いかける。
それに加えて嫌がらせのように足下から不規則に突き出してくる三叉槍。
上下左右全方位からの間隙のない攻撃には、流石の一輝も防戦一方だ。
このままではいずれ捕まる。
だから一輝は、全力で屋根の縁へ駆け出すと、大きく跳躍した。
別の建物に移ることで、《潜行》しているティルミットを捲く。
そういう算段なのだろうと一輝を追う二人は理解する。
このティルミットとミリアリアの波状攻撃を受けた者は、大抵がその考えに行き着くからだ。
故に、――ミリアリアはニヤリと笑う。
「アッハッ☆　それを待ってた系ー！」
瞬間、ミリアリアは再び速度の衰えた《カラミティバレット》を放棄。
新たに三発の《カラミティバレット》を宙に身を躍らせた一輝目掛け撃ち放つ。

そう。この状況を作り出すことこそ、ミリアリアたちの波状攻撃の狙い。
空中では特殊な能力を持つ伐刀者以外、身動きがとれない。
完全な無防備だ。
そんな体勢で撃ち放たれたばかりの、最高速の《カラミティバレット》を躱すことなど出来はしない。
襲いかかる三つの弾丸。
これに一輝は空中で身を反転。
剣を手に、迎撃の構えを取るが――
(それって超無意味～)
斬られようが弾かれようが、《カラミティバレット》はお構いなしだ。
斬られれば先ほどと同じように玉の数が増えるだけ。
弾かれても跳弾の勢いを推力に、何度でも襲いかかる。
――そのはずだった。
だからこそミリアリアとティルミットは勝利を確信したのだが――
「ハァッ！」
三発の弾丸が一輝を穿たんと同時に迫った刹那。
一輝の周囲に三つの斬光が奔るや《カラミティバレット》が一切の推力を失い、重力に引かれるまま力なく地面に落ちていき、そして一輝は危なげなく、ミリアリアたちがいる建物より背の低い建物に着地した。
「あれ？」
予想もしていない結末に、ミリアリアは混乱する。
黒鉄一輝の能力は身体強化のはず。
なのになぜ、自分の伐刀絶技を無効化できたのだ、と。
だがミリアリアよりも体術センスのあるティルミットは、石の海の中で今の一輝の神業を戦慄と共に理解する。
(完全相殺か……！)
まさしくそのとおりだった。
一輝は此処までの攻防、二度ミリアリアが弾丸を入れ替えたことから、彼女の能力が保証するものはあくまで『弾

道』であり、撃ち放った弾丸を『再加速』させる力はないことを看破し、弾丸に対し、そこに込められたエネルギーと全く同じエネルギーを叩き込むことで、前にも後ろにも弾かず、斬らず、すべての運動エネルギーを相殺したのだ。
(ミリィの能力はあくまで『弾丸』で、『ミサイル』じゃないからなぁ。これをやられるとどうしようも無い)
これほどの技を持っている敵に、《カラミティバレット》は無力だ。
(だったら――！)
もはや自分がやるしかない。
ティルミットはそう決し、水底を強く蹴ると水面に向かって急浮上。
「《浮上突撃》――ッ！」
建物の壁から飛び出した。
両棟の距離、実に十メートル。
その距離をティルミットはわけなく飛翔し、一輝に接近。
背の低い建物に着地した一輝の斜め上から、彼の頭部目掛け三叉槍を突き出す。
対し一輝の動きも速い。
彼はすぐ《陰鉄》を持ち上げ、ティルミットの刺突を刃で防御する態勢を取る。
十メートル先からの突進など、彼にとって防ぐのは容易い攻撃だ。
しかし、――それこそが罠。
(一度仕込みはしてある……！)
初撃、ティルミットは一つ、《カラミティバレット》では仕留めきれないときのための布石を打っていた。
一輝に防御させた最初の一撃がそれだ。
あのとき、ティルミットはわざと自分の刺突を一輝に防がせることで、一つの認識を植え付けた。
《トリアイナ》の刺突は防ぐことが出来ると。
だが、

（潜行出来るのは、建物だけじゃねーんだな！）

相手の霊装もまた例外ではない。

ミリアリアとの連携が上手く行かなかった場合に備えた切り札を今こそ切る。

《トリアイナ》は矛先を受け止めようとした一輝の《陰鉄》を水音と共にすり抜け、一直線に一輝の顔面へ奔る。

（もらったッ！）

そうティルミットが確信した刹那――

「それは露骨すぎるな」

確かに一輝の額を突いたはずの《トリアイナ》が、つるりと一輝の表皮を滑るように、横へ逸れた。

僅かな体捌きのみで刃を受け流す奥義――《天衣無縫》だ。

それを以て一輝はティルミットの槍撃をいなし、

「フッ」

予期せぬ防御によって空中で無防備となっていたティルミットを、《幻想形態》の刃で一閃した。

「く、ぁ」

「あの距離からの突撃はどうぞ受けてくださいと言わんばかりだ。君の能力の特性を考えれば霊装をすり抜けることは容易に予想できるから、返り討ちにもされやすい。今のはかなり危険だから二度とやらない方がいいよ」

本当の戦場、本当の敵が相手だった場合、今の軽率な攻めがティルミットの命を奪いかねない。だから一輝は彼女の軽率を厳しい言葉で戒める。

だがその言葉を噛みしめる間もなく、強烈な眠気にも似た意識のブラックアウトがティルミットを襲い、彼女は屋根の上に崩れ落ちた。

そしてそのまま、屋根の傾斜を転がり落ちていく。

それを一瞥し一輝は、

「じゃあ後はお任せしますね！」

爽やかな笑顔ですべてをミリアリアにぶん投げ、逃亡を再開する。

「キャー！　ティルちゃーん！」

伐刀者といえど、魔力で身を守らねばただの人間。

気絶した状態で高さ一〇メートルはあろう建物の屋根から落ちればただでは済まない。

ミリアリアは全力疾走で屋根から飛び出し、空中でティルミットを受け止め地面に着地した。

それから屋根の上を見上げるも、もう一輝の姿はどこにもなかった。

◆◇◆◇◆

一輝がティルミットとミリアリアを下した頃。

ステラとアストレアの二人が皇都中央の城に到着した。

「ん～やっぱり自分の家は落ち着くわ～」

広い大理石の廊下を歩きながら、ステラは大きく息を吸う。

毎日掃除は人念にされているはずだが、自分の家というのは不思議と落ち着く空気の匂いがある。

しかしのんびりするのは後だ。

国民が相手をしてくれているとはいえ、一輝をあまり待たせるのは心苦しい。

「それで、お父様はどこで待ってるの？」

「食堂に連れてきてくれって言われたから、そこじゃないかしらぁ」

なら急ごうと、ステラは侍女に荷物を預け、食堂へ向かう。

そして食堂へ通じる大きな観音開きの扉を押し開ける、と――

「スゥゥテラァァアアアーーーッッッ！　会いたかったゾオオオーーソソソ！」

髭の濃い中年がステラの唇目掛けロケットのような勢いで飛んできた。

「イヤアアアアアッッ!!!」

当然殴る。

渾身のカウンターだ。

メキリといやな音を立ててステラの拳は中年の顔面にめり込み、殴り飛ばす。

殴り飛ばされた巨体の中年は、変な方向に曲がった鼻を押さえながら震える声でステラに抗議した。

「な、なぜじゃあ……ワシはただ……おかえりのチュウを……」

「それが理由に決まってるでしょうが！」

これにステラは、憤怒の表情で中年――

現国王にして自らの父、シリウス・ヴァーミリオンを怒鳴りつける。

「もう一五にもなる思春期の娘にそんな暴挙が許されると思ってんの!?　こんなの事案よ事案！」

「……ふ、そんなに顔を真っ赤にして照れ隠しか。素直じゃないのぉ」

「怒ってんのよ！　ホント、デリカシーがないんだからっ！」

言ってステラは大きな溜息をつく。

数ヶ月ぶりの父親との再会がこんな形とは。

彼女としても不本意極まりなかったからだ。

と、そんなステラの横から、

「パパぁ～？」

呪詛のような声が響く。

（あ……）

ヤバイとステラが横を振り向いたときには、彼女はすでに動き出していた。

彼女、アストレアはステラに殴られ片膝を付くシリウスの頬を両手で包み、視線を自分に向けさせ、

「私というものがありながら娘にキスを迫るなんてどういうことかしら？」

泥のような闇を湛えた大きな瞳を限界まで見開き、シリウスに問う。

「マ、ママ……!?」

「浮気？　浮気ナウですかぁ？　ママもしかして娘にパパを寝取られちゃってるんですかぁ？　離れて初めて二人の大切さに気付いちゃったんですかぁ～？」

「ヒッ……！　そ、そんなことあるはずないじゃろがっ。ワシは一万年と二千年前からママ一筋じゃけえのッ！」

「ん～～～？　本当かなぁ～～～～～？」

額に汗を浮かべて釈明するシリウスの瞳に、アストレアは自分の眼球を接触しそうなほど近づけ、彼を見つめる。

シリウスもまた瞬き一つしない。

今この瞬間、一瞬でもアストレアの瞳から視線を切ろうものなら、どんな恐ろしいことになるか、よく知っているからだ。

それを一分ほど続けた後、アストレアはようやくシリウスの頬から両手を放し、

「よかったぁ～。ママも一億年と二千年たってもパパのことが大好きですよぉ～」

ニッコリと穏やかな微笑みを見せた。

「でも次ステラちゃんに変なことしようとしたら、オシオキですからねぇ～」

「あ、アイマム」

「もう！　お父様がおかしなことをするとお母様までおかしくなっちゃうんだから、気をつけてよねっ！」

「お、おう。ワシもおかしくなったママより優しいママのほうが好きじゃけえ……」

そういうとシリウスは立ち上がり、咳払いを一つしてから、

「よく帰ってきたのぉ。ステラ」

厳のような強面に優しい笑顔を浮かべ、ステラを抱きしめた。

「……ん、ただいま。お父様」

これにステラもシリウスの分厚い胴に手を回し、抱擁を返す。

（……最初からこうしてくれたらアタシだって殴ったりしないのに）

本当にしょうがない父親だ。

まあ、それだけ愛してくれているということなのだろうが。

そして身体を離してから、

「ところでお父様。ルナ姉はまだ来ないのかしら？」

先ほどから気になっていることをシリウスに尋ねた。

食堂で家族会議をやるものだと思っていたのに、姉の姿がなかったからだ。

これにシリウスはすこし渋い表情で、

「ルナは自分の結論はとっくに決まっているから勝手にやっとけと自室に籠もっとる。……まったく家族の一大事じゃというのに」

「仕方ありませんよぉ。戴冠の準備として今回『戦争』の準備はルナちゃんに任せてますから、忙しいんですよぉ～。明日もクレーデルラントに出張すると言っていましたし」

そのアストレアの言葉にステラは納得する。

『戦争』は五年に一度の重要な外交。

それを目前に控え、調整業務に追われているのだろう。

ならば邪魔するのも悪い。

なにより元々姉、ルナアイズ・ヴァーミリオンは自分の行動や判断に肯定的なので、同席の必要も無いだろう。

ステラはそう判断し、

「じゃあルナ姉ぬきでさっそく家族会議を始めましょうよ」

食堂の椅子に腰を下ろした。

「そう急かさんでもええじゃろ。折角数ヶ月ぶりの再会なんじゃけえ」

「ダメよ。今こうしている間もイッキを待たせているんだから」

「気にせんでもどうせ奴はここまで辿り着け――おっと」

「お父様？」

「なんでもない、なんでもないわい！　そ、そうじゃのお！　彼氏をいつまでも待たすのは可哀想じゃけえ、早速話を聞かせてもらおうかいのぉ！」

「……？」

急に素直になった父にステラは首を傾げる。

しかし、この父親が変なのはいつものことなので、すぐに気にとめなくなった。

だが妻であるアストレアは何かに気付いたようで、

「パパぁ～？　もしかして性懲りもなく良からぬことを考えているんじゃないでしょうねぇ？」

ジロリと訝しげな視線をシリウスに向ける。

「な、なにをバカなことを！　ワシは公明正大なヴァーミリオン国王じゃ！　やましいことなど何一つないわい

っ！　ワハハハハッ！」

シリウスはそう豪快に笑いながら否定するも、――額には冷や汗が浮かんでいた。

そう。企んでいないわけがない。

シリウス・ヴァーミリオンはこの日のために、前々から動いていた。

七星剣武祭が終わったら挨拶に来るように言ったときから。

アストレアとルナアイズの目を盗み、シグナードを通し軍隊と、元メイド長のヤナを通し国民と協力し、駄目押しに多額の賞金まで掛け、黒鉄一輝包囲網を作り上げていたのだ。

今、ヴァーミリオン皇国は一丸となって黒鉄一輝を追い立てている。

それを知っている故、シリウスは確信しているのだ。

――黒鉄一輝が永遠にこの城に辿り着くことは出来ないと。

（何しろ今回は、『奴ら』も動いておるからのぉ……！）

非戦闘員である国民や非伐刀者である軍隊、賞金目当ての輩ではもしかしたら止められないかもしれない。

仮にもAランク騎士である彼の娘に二度勝った男なのだから。

しかし、それでも『奴ら』は突破出来ない。

ヴァーミリオン皇族に絶対の忠誠を誓い、ステラのためならば命を失うことすら厭わない忠義の獣。

『奴ら』がステラに近づく毒虫を仕損じるはずがないのだ。
（任せたぞ。ヴァーミリオン皇国皇室親衛隊……ッ！）

◆◇◆◇◆

シリウスが強く念を送ったまさしくその時。
皇都外周部の城下町を抜け、高級住宅街に通じる橋に辿り着いた黒鉄一輝は、その橋の上で待ち構えていた皇室親衛隊と対峙していた。
「よくぞここまで辿り着いたなイッキ・クロガネ！
流石は戦いでステラ殿下を倒した男だ！
しかぁし！　貴様の快進撃も此処までだ！
城下町から貴族街に通じる橋は此処を残しすべて崩落させてある！
王城に行きたくば此処を通る他に無い！
しかし見よ我らが精鋭を！
我々こそがヴァーミリオン皇国の盾にして、ステラ殿下に絶対の忠誠を誓いし戦士たち。
ヴァーミリオン皇室親衛隊であるッッ！」
「Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ！　ステラ!!」
「Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ！　ステラ!!」
「Lovely！　Lovely！　ステラッ!!!!」
「「ヒュウゥゥゥゥ～～～～～～～～～～!!!!」」

（な、なんだこの人たち……!?）

赤い半被を身に纏い、サイリウムを手にものすごい勢いで上半身を回し続ける五十人ほどの集団に、一輝は困惑のあまり歩を止めてしまう。

武に生き、体捌きを極めた一輝にはわかるのだ。
彼らの体捌きが、膨大な鍛錬の果てに身につけられたものであることが。
もっとも、
（なんて洗練された無駄な動きだ……っ）
それになんの意味があるのかはさっぱりわからなかったが。
一方自分たちを前に歩を止めた一輝を見て、集団の先頭に立つ男、親衛隊長はほくそ笑む。
「クク。奴は我らの一糸乱れぬ統率と忠誠心にぐうの音も出ないと言った様子だな。しかし今更怖じ気づいてももう遅い！　ステラ殿下を誑かした大罪、我らが剣にて断罪してくれる！　そのためにも、これより皇様の罪状を確認する！」
親衛隊長がそう告げると、彼の後ろでぐるぐる謎の動きをしていた親衛隊がピタリとその動きを止める。
皆一様に真剣な、あるいは切羽詰まった表情。
しかしそれも当然のこと。
これからの問答。ともすれば彼らの存在意義にも関わるものなのだから。
誰もが固唾を呑んで見守る。
そんな沈黙の中、数回の深呼吸の後、親衛隊長は一同を代表し、一輝に問うた。
「皇様がステラちゃんと、お、おおおなじ部屋で生活しているという情報は本当かァ!?」
「え、……と。はい。それは本当です。理事長にそうしろと言われて」

「「ぐふぁあッ!!!」」

直後。栖を封鎖していた親衛隊の半数が喀血してその場に倒れた。
「隊長ォォォ！　二等兵たちが昏倒しましたアァッ！」
「ええい軟弱者どもめ……！　あれほどNTRエロゲをやって覚悟を決めておけと言っておいたのに、準備を怠りおったな……！」
「そ、そういう隊長も拳から血が！　強く握りしめすぎて血が！」

「おちつけいっ！　まだい、いいい一緒の部屋で生活しているという事実確認だけだ……！　ただ一緒に生活しているだけかもしれない！　そうとも！　聞くところによるとこの男、実家との折り合いが悪く、ステラちゃんとのスキャンダルもこいつの実家がばらまいたねつ造という説もまだ活きている……！　そのあたりどうなのだ!?　こ、この写真はァ、偽物なのかァァッ!?」
そう言って親衛隊長が一輝に向けかざしたのは、かつて一輝とステラの関係をすっぱ抜いた週刊誌の写真だ。
改めて見ると実によく写っている。
プロの仕事だ。
その鮮明さに一輝は照れくさそうに目を背けながら、
「いえ、……それは本物です。僕とステラは恋人ですので、キスくらいは」

「「ウギャアアアアーーーーーーッッッ!!!」」

瞬間、絞められる家畜のような声がヴァーミリオンの空に響き、生き残った親衛隊員ほぼ全員が昏倒。一問目で倒れた者たちも無意識下で一輝の答えを脳が理解したのか激しく痙攣し始める。
「うううろろたえるなぁぁ！　こ、これは我々を動揺させるためのやちゅの罠らァっ！」
「隊長落ち着いてくださいッ！　動揺しすぎて舌が回っていませんよ!?」
「ちょ、ちょっと待ってくれッ！」
と、その時だ。
死屍累々の後列から一人の不健康に細い男が這い出てきて、
「これだけは聞かせてくれ！　アンタが本当にステラちゃんと恋人だっていうなら、……まさか、アンタもうステラちゃんと、セ、セセセ、セック――」
「やめんかバカモノォォォォォォ!!!」
「ぶぴぇらッ!?」
だが細い男が一輝への問いを言い終える前に、親衛隊長が彼の言葉と顔面を踏みつぶす。
「おおおおまえ、オマエェェェッ！　軽はずみなことを聞こうとするんじゃないィィッ！　オマエさぁ！　そ、

それでもしさあ！　『はいそうです』とか、そうでないにしろビミョーな沈黙とかが返ってきたらどおぉするんだよおおお！　親衛隊を滅ぼすつもりかアアアッ!!!」

「ひ、す、すいませんでしたぁっ！」

それから親衛隊長は血涙を拭うと一度大きく息を吸い、総崩れの隊員たちに檄を飛ばす。

「お前たちも気をしっかり持て皇室親衛隊！　我々はまだ何一つ確認したわけではない！　この男が虚偽の申告をしている可能性も、まだ残っているのだ！　希望を捨てるな！　今の問答ではっきりしたことはたった一つ！　たった一つだけ！　それはこの男の言が真実であろうが虚偽であろうが、我々はこいつをメッチャゆるさんということだけだアアッ！　総員抜剣ッ！　みじん切りにしてしまえェェ――――ッ!!!」

「「オオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーーーーッッッ!!!」」

この親衛隊長の号令は、橋の上で痙攣していた者たちまでをも起き上がらせた。

親衛隊は全員が全員、各々の霊装を顕現させるや一輝に向かって全力で襲いかかる。

敵の数は五十人。

それも全員が伐刀者。

広い場所での戦闘は不利だ。

ならば、

（突出してきた足の速いのをかたづけて、一旦路地へ退がろう……！）

狭い路地ならば数の有利は活かせない。

上手く立ち回れば戦闘を最小限に相手を捲くことも出来よう。

そう一輝は一瞬のうちに状況を判断。作戦を立て、

「ハアッ！」

「ぐはっ！」

突出してきた三人の親衛隊を《幻想形態》の刃で首を刎ね昏倒させ、逃げに転じようとする。

だが――

「――ぬ、おおおあああああああ!!!」

「ッ……！」

首から赤い血のような魔力光を散らしながら、斬られた親衛隊はそれでも鬼の形相で襲いかかってくる。

一輝はからくも彼らの反撃の白刃を防ぐも、動揺を表情に出す。

（《幻想形態》じゃ倒れないのか……！）

体力を直接そぎ落とす《幻想形態》のダメージは、肉体的損傷を伴わない。

腕を斬られれば斬られた腕が動かなくなるが、実際に損傷は存在しない。

これらはすべて強い『思い込み』による一時的な作用だ。

本来この霊装による思い込みは人体に強烈に作用し、逃れることは出来ない。

致命傷を受ければ、昏倒する。

それが普通。

しかしごく稀に、この思い込みを意志の力ではね除ける者が存在する。

決死の覚悟すら生ぬるい、肉体と精神の双方を超越した気力を以て戦いに臨む者。

そういう手合いに《幻想形態》の刃はほぼ無力なのだ。

もっともそんな手合い、滅多に存在しない。

存在しない故に、一輝は驚愕した。

今自分の前にいる皇室親衛隊。

見てくれこそなんだかおかしな連中だが、

（この心の強さは本物だ……！）

気をしっかり持たねば、彼らの強い意志に呑み込まれる。

一輝はそれを確信し、自身も負けじと強い力で三人を押し退ける。

その瞬間、

「ん？」

ひらり、と親衛隊員の斬り裂かれた半被の裾から、一枚の紙片が零れるのを見た。

そして紙片は滑るように一輝の足下へと落ちる。

「これって……」

一輝はほぼ反射的にそれに手を伸ばし、

「あっ、そ、それに触るなアッ！」

落とした親衛隊員は絶叫に近い声で一輝の行動を制止する。

だがそれは僅かに遅く――、一輝は目にした。

尻の食い込みをまさに直している瞬間を捉えた、ステラの水着写真を。

「――――……」

「それは皇室に忠誠を誓った親衛隊にしか与えられない勲章だ！　返せェェッ！」

皇族のために命を捨てることも厭わない。

そんな忠誠心と引き替えに、親衛隊長から賜ることが出来る秘蔵のお宝写真。

その宝に勝手に触られた男は激怒し、一輝に対し西洋剣を振り下ろす。

それは、ああそれは、――なんと愚かな行動だったことだろう。

なぜなら、

「親衛隊にしか与えられないということはつまり、ここにいる連中は全員これと同じようなものを持っているということですね？」

ニッコリと口元だけで笑みを作る、今この場で一番キレている男から逃れる最後のチャンスを棒に振ったのだから。

――のちに親衛隊員たちは震えながら語る。

自分たちの姫は、日の本の国から『鬼』を連れて帰ってきたと。

◆◆◆

（おかしい……）

シリウスは妙な胸騒ぎを感じていた。

もう一輝がヴァーミリオンについてから結構な時間が経っているというのに、

――国民からも軍からも、親衛隊からも、一向に一輝を倒したという報告が上がってこないのは何故だ。

剣の腕こそ確かとはいえ、所詮Fランクの単体戦力。

軍隊まで動かして、よもや苦戦などあり得るはずがあるまいに――

「お父様ッ！」

「――っ、お、おう、なんじゃいステラ」

「何じゃないわよ！　お父様がアタシからイッキがどういう人か聞きたいっていうからこうして話してるのに、なにぼーっとしてるのよ!?」

「い、いや！　ぼーっとなんてしとらんぞ！」

「ホントに？　ちゃんと聞いてたの？」

まったく聞いてなかった。

というか彼氏のノロケ話を娘の口からなど聞きたくもなかった。

だがそんな正直なことを口走ればこんがり焼かれてしまうだろう。

だからシリウスは、

「あ、ああ。聞けば聞くほど、感心な若者じゃ。まさにサムライというべきかの。流石はワシの娘。男を見る確かな目をもっちょるわい」

どうせステラは相手の男のことを褒めちぎっていたのだろう。

ならばこちらもそれっぽく褒めておけば納得するはずだと、心にもない世辞を言う。

これにステラは輝くほどの笑顔を浮かべた。

「で、でしょ!?　イッキはホント格好いいの！　お父様もようやくわかってくれたのね！」

このステラの喜びようにシリウスは自らの失策に気付く。

（い、いかん。咄嗟に話を合わせたが、このままでは家族会議が終わってしまう）

まだ一輝を倒したという報告が上がってきていないのに、それは不味い。
最悪、ステラが逃げ回る一輝の加勢に入ることになりかねない。
（なんとか時間を稼いだらんと……！）
「じゃあさっそくヤナさんに連絡してイッキを――」
「ま、待ってくれぃステラ！」
「え、なに？」
携帯を取り出したステラに制止をかけ、シリウスは言う。
「確かに立派な男だとは思うが、結婚となれば話は別じゃ！」
「そ、それってどういうことよ？」
「何しろあれじゃ、お前はヴァーミリオン皇国の第二皇女。当然その結婚には、政治的なあれやこれやが、うん、関わってくるわけじゃろ。そのアタリ次期ヴァーミリオン国王であるルナの意見も、やはり挨拶の前に聞かねばならんと、そう思うわけじゃな」
このシリウスの言葉にステラは眉を吊り上げ、
「今更そんなこといわないでよ！」
と抗議する。
当然だ。そんなことは家族会議が始まる前に言うべきことなのだから。
「そんなのイッキを呼んでからでいいじゃないっ。ルナ姉は元々反対してないんだし」
「じゃが賛成を表明したわけでもないじゃろう？」
しかしシリウスも引かない。
今更ルナアイズの意見を求めるなど、滅茶苦茶なことを言っているのは自覚しつつ、食い下がる。
「これはヴァーミリオン皇国にとっても大切な話。皇族の意見はちゃんと纏めておきたいんじゃ。すまんがステラ。やっぱりルナを此処へ呼んできてくれ！　ルナの意見も踏まえた上で、ワシも現ヴァーミリオン国王として態度をはっきりさせるけぇ」
「む、むぅぅ……」
シリウスの主張はまったくもって今更だ。

今からルナアイズを呼んできて、もう一度会議をするなんて、ステラからすればただの二度手間。
一輝を外で待たせている今、非常に心苦しい。
しかし、……まったくもって忌々しいことに、まるで理のない主張というわけでもない。
現国王として、次期国王と第二皇女の婚約について意見のすりあわせを行いたいというのは、確かにもっともな話だ。
だからここはステラが折れた。
「わかったわ。じゃあ今からルナ姉呼んでくるからっ。そしたらいい加減覚悟を決めてイッキと挨拶してよねっ。まったくもう……！」
言って、ステラは少しでも一輝を待たせる時間を短くするため、走って食堂を飛び出す。
その背中を見つめながら、アストレアは溜息を零し、視線でシリウスを非難する。
「……パパもとことん往生際が悪いですねぇ」
「マ、ママがなにをいっとるのかワシにはようわからんのぉ……！」
これにシリウスは逃げるように視線を逸らし、立ち上がる。
「どちらへ？」
「と、トイレじゃ。すぐ戻るけぇ」
そして食堂を出てトイレに駆け込むと、親衛隊に連絡を取った。
いや、正確には取ろうとした。
しかし――、親衛隊は誰一人、シリウスの電話に出ない。
携帯から聞こえてくるのは、いつまでも続く無機質なコール音だけ。
その音にシリウスは言い表しようのない不吉を感じ、一筋冷たい汗を流す。
（一体……外で何が起こっとるんじゃ……？）

◆◇◆◇◆

ほぼ同時刻。

（まずったなぁ）

黒鉄一輝はついに数多の障害を突破し、城を囲む城壁のすぐ外側までやってきていた。

しかし、今彼は建物の陰に隠れ、その身を潜め、歩を止めている。

一輝が親衛隊を一人残らず病院送りにし、写真を処分するのに余計な時間を取られている間に、シグナードとヤナ率いる軍隊と国民の連合軍が城壁前に集結。

数にものを言わせた鉄壁の守りを敷いていたからだ。

これでは正面突破は難しい。

いや、突破自体はやってやれないことはないが、向こうに多くの被害を出すことになる。

《幻想形態》で斬られても痛みはある。

先ほどの連中はともかく、国民と陸軍は殆どが非伐刀者。

なるべく交戦は避けたいというのが一輝の本音だ。

だから彼は周囲を窺い、――ある場所に目を付ける。

城壁の側に立つ青い屋根の教会だ。

（あそこの屋根からなら城壁に取りつけるな）

そうと決まれば行動だ。

幸い国民たちの警戒は上には向いていない。

二十メートルを超える城壁を飛び越えようとするとは考えていないのだろう。

一輝は誰にも見つかることなく、背の高い教会の三角屋根に飛び乗り、

「――ホホホ。やはりこのルートを選びましたか」

その者と対峙した。

「ッ……！」

「噂通り、優しい少年だ」

一輝をして、同じ屋根の上に立つまで存在を悟らせなかった禿頭の老人は、老化により垂れた目蓋の奥から抜け

目ない視線を一輝に向け、冗談めかした口調で問う。

「どうですかな？　ヴァーミリオン皇国観光ツアーの感想は」

「貴方は……」

「ホホ、これは申し遅れました。私は国際魔導騎士連盟ヴァーミリオン支部長官兼、ヴァーミリオン皇国剣技指南役を任されているダニエル・ダンダリオンという者です。貴方が来るのを待っていました。《七星剣王》黒鉄一輝殿」

答えると老人は自らの霊装を顕現する。

獅子の顔を模った黄金色の柄に、白銀の刀身を持つ細身の長剣だ。

老人はその得物を手に、切っ先を一輝に向け構える。

瞬間、彼から発される剣気に一輝は総身の産毛が焦げるような感覚を覚えた。

（――強いな。この人）

敵の確かな実力を汗まいから感じ取り、一輝は自らの不利を悟る。

敵の得物はレイピア。

日本刀よりも細く長い刀身を有する武装。

加えて敵の構えは突き技を主体とするフェンシングの構え。

横の動きが制限される傾斜の鋭い三角屋根の天辺という地形で、この手合いと相対するのは、上手くない。

何より、敵の水準がここに来るまでに蹴散らしてきた者たちとは違う。

地の利を取られたまま相手にしていいような力量の敵ではない。

だから一輝は場所を変えるために後ろへ下がろうと跳躍。

直後、――背中を襲った衝撃に膝を突き、愕然とする。

「っ!?　これは……」

背後にいつの間にか、目に見えない壁がある。

この事実に気付いた一輝に、老人は白い雲のような頭髪の奥に笑みを作る。

「ホホ。すでに貴方は私の檻の中なのですよ」

「伐刀絶技、ですか」

「ご明察。私の霊装《ライオンハート》の伐刀絶技――《血戦》。

視線を交えた敵一人を外部からの干渉を受けない決闘場へと取り込み、たとえ乱戦時であっても一対一の状況を作り出す結界型の能力です。

貴方の逃げ道は断たせてもらいました。

この檻を出たくば、決闘に勝利するほかございませぬ」

あまり使い勝手のいい能力ではないが、どうしても戦いたい相手がいる場合は便利な方だ。

そう老人、ダンダリオンは自身の能力について語り、

「さあ、抜いてもらえますかな？　ステラ様がまだ赤子だった頃からお世話をさせていただいた身。老骨一人押し退けて通れない者にステラ様を任せるつもりはありませんぞ？」

逃げる手段をなくした一輝にそう迫った。

ここから先に行きたければ、自分を倒して行けと。

これに一輝も、

「わかりました。――来てくれ。《陰鉄》」

自らの霊装を顕現させ、闘争の構えを取る。

……戦場は鋭角な屋根の上。

いかに一輝の体幹が安定していようと、流石に横に逃げることはできない角度だ。

戦いは、屋根の天辺。

この一直線の足場のみで行われる。

霊装のリーチで勝り、なおかつ突き主体のレイピアという武装を持つ敵に絶対有利な戦場。

しかし、――ここは押し通るしかない場面だと判断したのだ。

そして、

「いざ……っ」

戦いの火蓋が切られた。

◆◇◆◇◆

先に仕掛けたのは黒鉄一輝だ。

彼はダンダリオンに対し利き手側を前に、片手で真っ直ぐに切っ先を持ち上げ、ダンダリオンと同じ突き技を主体とするアロンジェブラと呼ばれる構えを取る。

リーチの優位を少しでも殺すためだ。

正眼、八相、いずれにしろ、日本刀本来の構えで突っ込んでは、敵の切っ先に対し急所が近すぎるという判断である。

そして、その構えのままダッシュではなくステップで距離を詰めた。

（まずは敵の力量を、同じ土俵で見極める……！）

この一輝の踏み込みに対し、ダンダリオンはその場から動かず受けの構え。

向かってくる一輝に対し切っ先を掲げ、《陰鉄》の先端が間合いに入り込んだ刹那！

「――シュッ！」

「ッ……！」

閃光のような連突きを見舞う。

これに一輝も連突きで応戦し、切っ先を打ち払いながらのベース争いが始まる。

三角屋根の上。黒と銀の閃光が、火花を散らしながら交錯する。

互いに相手が僅かでも立ち後れようものなら、即座に心臓を穿ちにいくだろう。

そんな一瞬たりとも気の抜けない戦いの中で、――しかし黒鉄一輝は冷静に敵を分析する。

（なるほど確かに速い。鋭い）

とうに全盛期は過ぎたであろう老人とは思えぬ剣捌きだ。

中々こちらに踏み込む隙を与えてくれない。

――だが、

（僕はこれより速く、これより鋭い剣をいくつも知っている！）

《剣士殺し》の《八岐大蛇》を、

《浪速の星》の《三連星》を、

そして《比翼》の世界一の斬撃を――すべて曲がりなりにもかいくぐってきた一輝の戦歴は、ダンダリオンの速

度を苦にしなかった。
「ッ……！」
分厚い目蓋の向こうでダンダリオンが目を剝く。
一輝が切っ先を突き出す速度を加速させたからだ。
ダンダリオンのリーチを、切っ先が伸びきる前にパラードすることで潰し、一輝は一歩一歩、確実にダンダリオンに迫る。
圧倒的な速度と数で迫る黒の閃光。
ダンダリオンはこの身体能力にものをいわせた猛攻の前に後退を余儀なくされ、
――あっという間に三角屋根の端まで追い詰められる。
（あと一歩だ）
あと一歩詰め切れば、《陰鉄》の切っ先がダンダリオンの急所に届く。
それを嫌いダンダリオンが結界を解き屋根を飛び降りれば、その瞬間にこちらの身動きを封じる鎖はなくなる。
ならば再び視線を合わされる前に、城壁に飛び移ればいい。
そう判断し、一輝はダンダリオンに向かって踏み込みながら突きを見舞う。
直後、青い屋根に真紅の飛沫が散った。
――それは、黒鉄一輝の穿たれた肩から迸ったものだった。
「ぐっ!?」
一輝は目を見開き、表情を歪める。
肩に感じる燃えるような痛みに苦悶しているのか。
否。
彼は、結果ではなく、そのプロセスに困惑していた。
（な、なんだいまのは……！）
そして、肩を突かれ後ろへ蹌踉めく一輝に、
「フッ――！」
今度はダンダリオンが仕掛ける。

アロンジェブラから前足を大きくステップインし、先ほどのお返しだとばかりに素早い連突きを見舞う。
一輝は当然、飛来する切っ先を打ち払おうと《陰鉄》を構える。が――
直後、先ほどと同じプロセスが発生した。
《陰鉄》に打ち払われたダンダリオンの霊装《ライオンハート》の刀身が、蛇のようにその身をうねらせ戻ってくるや、一輝に襲いかかってきたのだ。
（また……ッ）
顔面に伸びてきた突きを、頬の皮一枚でかろうじて躱した一輝は、理解する。
ダンダリオンの突きは、弾いても戻ってくるのだと。
まるで生きているように。
ならばこれをパラードで防ぐことは不可能だ。
このまま差し合いを続けるのは分が悪い。
ここは一度仕切り直すべき。
そう判断した一輝は一度距離を取ろうと後ろへ下がり、
「ッ!?」
――直後、その判断を待っていたとばかりに大きく深く踏み込んできたダンダリオンに、最有効距離を取られた！
（逃げ足を読まれた……ッ！）
そして――、
「《クロワ・デュ・スュド》」
最有効距離からダンダリオンが刺突を放つ。
その速度、まさに電光石火。
これまでの差し合いとは異次元の速度だ。
刹那。
死線をかいくぐり研ぎ澄まされた一輝の直感が、肌を刺す幻痛を産む。

場所は、両肺、喉、心臓、丹田。
それはダンダリオンが放つ、南十字星の名を冠する瞬間五連突きが今まさに穿たんとしている人体急所五カ所だ。
（――これは、不味い……ッ！）
一撃だって貰えない。
しかし、ダンダリオンの刺突はパラードしても戻ってくる。
防ぐのは困難。
しかし防がねば敗北。
だから一輝はこのダンダリオンの攻めに対し――
ダンダリオンも愚いも寄らぬ応手を取った。
「ぬっ――!?」
次の瞬間、ダンダリオンは驚嘆を露わにする。
一輝が下がるために引いた足で地面を蹴るや、刺突を放たんとする自分に向かって身体ごと突っ込んできたからだ。
そして彼は右肺を穿つ《クロワ・デュ・スュド》の一撃目を刀の柄を盾に受けると、――そのまま力任せにダンダリオンの身体を押し飛ばす。
これにより押し飛ばされたダンダリオンと、刺突を受けた一輝、共に後方に弾かれ、両者の間合いは再び開いた。
そう、一輝はダンダリオンの五連突きを出始めで潰し、押し飛ばすことで窮地を脱したのだ。
「ふぅ……っ」
息を整える一輝にダンダリオンは心からの畏敬を抱いた。
「流石に、Fランクながらにステラ様を倒しただけはありますな」
敵のモーションや微細な目線の動き、そして膨大な実戦経験から来る直感。
それにより敵の剣を読み切り、初見の技すら看破。
それが自らの技量で受けきれぬと見るや、迷わず出始めを潰しにきた。
ダンダリオンはその観察力とイマジネーション、そしてそれに身を委ねられる決断力に惜しみない賞賛を送る。
「それに柄を盾にするとは、噂に違わず実に面白い剣の使い方をする」

「……面白い剣はお互い様でしょう」
対し、一輝はダンダリオンの賞賛に苦笑を返す。
「その霊装……見た目こそレイピアですが、刀身が異様に柔らかい。どちらかといえばフルーレに近い剣ですね。どうりでおかしな動きをするはずだ」
フルーレの刀身は剣というには不自然なほどの柔軟性を有しており、よく撓る。
撓るということはいくら弾こうが、反動で切っ先が返ってくるということだ。
この刀剣としては異質なほどの柔軟性の扱いを極めれば、向かい合う敵を背後から突き刺す《振り込み》という絶技すら可能となる。
「……実戦で使われるのを見たのは初めてなので、面食らいましたよ」
「ホホホ。まさしく。私の《ライオンハート》はこの柔軟性が売りでしてね。こればかりは、一輝君の《模倣剣技》でも真似出来ないでしょう？」
「僕のことをよく知っていますね……」
「敵を知り己を知れば百戦殆うからず。
特にこんな能力ですから、戦う相手の事前調査は入念に行うことにしておるのですよ。
ですから……一輝君の次の一手もわかります。
この場に《霊気狼》を仕掛けるだけの距離はない。
《青嵐の太刀》もフルーレの撓れる刀身には通りにくい。
――ならば、残る可能性は一つ」
言うと、ダンダリオンは再び切っ先を前に、アロンジェブラの体勢を取り、
「さあ。使ってご覧なさい。――第一秘剣《岸撃》を」
「っ……！」
このダンダリオンの言葉に、一輝は息を呑む。
彼の予想が、ずばり的中していたからだ。

一輝はまさしく次の一撃に《犀撃》を使うつもりでいた。
理由は、敵の武装だ。
フルーレは柔軟性という唯一無二の個性を有する剣。
しかし個性というものはメリットばかりではない。
フルーレのデメリットは刀身が柔らかすぎる故、力が乗りにくいということだ。
ならばパワーで押すのがもっとも効果的。
それ故の判断。
だが、ダンダリオンはこの一輝の選択を読み切っていた。
（本当に、よく調べているな……）
ダンダリオンの周到さに感心しつつ、しかし一輝はゆっくりとスタンスを広げ、腰を沈め、弓を引くように切っ先を引き絞り、《犀撃》の構えを取る。
読まれているのは不気味だが《犀撃》がフルーレという武器に対して有効な技であることは事実。ならば、臆するな……！）
「――言われずともッ！」
一輝は屋根を踏み砕くほどの力で渾身の《犀撃》を放つ。
昔は《一刀修羅》と併用しなければ使えない剣技だったが、エーデルワイスの剣を《模倣剣技》し、体得した体技により《一刀修羅》なしでも充分な威力を発揮出来るようになった。
フルーレのような柔らかい刀身では、到底受けきれない……！

――はずだった。

「う……っ!?」
だが、ダンダリオンはそれを受けてみせた。
かつて世界最強の剣士《比翼》のエーデルワイスがやって見せたように。
《犀撃》の切っ先に、自らの剣の切っ先を合わせて。

一輝の突進を停止させたのだ。
この事実に一輝は戦慄する。
あのエーデルワイスでさえ、使っていた武器は頑丈な片刃だったというのに、
（フルーレの針金のように柔らかい刀身が、撓みすらしていない……！）
《陰鉄》の切っ先に対し、一本の真っ直ぐな針としてすべての力を点で受けきっている。
（こんな技術もあるのか……！）
「これでも私はこの細身でステラ様の剛剣を相手に剣術指南をしていた身。力の殺し方は人一倍心得ておりますので……！」
ダンダリオンは言う。
一輝の《犀撃》程度、彼女の振るう剛剣に比べれば児戯に等しいと。
角度を間違えず、魔力放出のタイミングを過たなければ、容易に受けきり、
――なおかつ、押し返すことが出来ると。
「フンッ！」
ダンダリオンの魔力放出により強化された膂力に弾かれ、一輝の身体がさらに後方へと追いやられる。
気付けばそこは二人が一番最初に対峙していた場所。
先の突撃で詰めた距離を、すべて振り出しに戻されたのだ。
いや、位置関係こそ振り出しで済んでいるが、戦局は違う。
一輝は手札の中で最強の攻撃力を有する突進技《犀撃》を防がれ、一層追い詰められている。
しかし、そんな状況で、
「……ふふっ」
「！」
「なるほどステラの剣を受けきってきた相手に、僕程度の力技が通じるはずがなかった」
一輝は口の端に小さな笑みを浮かべた。
「ステラが羨ましい。僕も貴方のような人に、剣の指南を受けてみたいものです。いずれまた、機会があったら手合わせをお願いできますか？」

「次も何も、今日じっくり、いやというほど見せて差し上げますとも」
言って、ダンダリオンは切っ先を持ち上げつつ、――不穏を感じる。
最強の手札を失ったというのに、一輝のこの余裕はなんだ、と。
思い当たる節があるとすれば――
(《一刀修羅》……か。あるいは自分と同じ、魔力放出による行動強化か)
一輝を調べる過程で綾辻絢瀬戦の流出データにも目を通しているダンダリオンは、その可能性も捨てず、どちらに対しても警戒を強める。
そんなダンダリオンに一輝は、
「いえ。今は遠慮しておきます。……これから彼女の父親に挨拶に行かなければならないんです。その場に、これ以上見窄らしい格好で出て行くのは御免ですから」
軽く肩を竦ませ、冗談めかした口調でいうと、
姿勢を低く、地面に対し水平に寝かせた切っ先を弓を引くように構え、
「この一撃で貴方を突破します。ダニエル・ダンダリオン……！」
屋根を踏み砕き、再びの《星撃》を放った。
それも、魔力放出も《一刀修羅》も用いずに。
これでは先ほどと何も変わらない。
(玉砕特攻でこの私が突破出来るとでも!?)
だとすればそれは愚かな考えだと、ダンダリオンは断じる。
――先ほど一合で《星撃》の速度、距離、タイミング、何もかもをダンダリオンは覚えた。
ならば次はもう受けない。
受ける必要が無い。
紙一重で躱し、痛恨のカウンターで一輝の眉間を貫く！

「ッッ!?!?」
直後、ダンダリオンの意識は凍りついた。
突然眼前に現れた《陰鉄》の切っ先によって。
生命の窮地に、ダンダリオンの時間は停止する。
その停止の中で、彼は愕然とした。
何故こんな目の前に切っ先があるのか。
自分の切っ先はまだ敵に届かないのに。
自分よりもリーチに劣る敵の武装が、何故。
《星撃》にしては速すぎる。近すぎる。
――ならば、その答えは一つだ。
(投擲、か……！)
そう。一輝は《星撃》の体勢から《陰鉄》をダンダリオン目掛け投げつけたのだ。
これにより、《星撃》にカウンターを合わせようとしたダンダリオンに対し、カウンターを被せた。
ダンダリオンはもう前足をステップし、踏み込むと同時に一輝の眉間を突く体勢。
止まれない。
もはや止まれる状態ではない。
故に――
「ヌウゥアアッ！」
それでも身体を動かし、自分の動きを無理矢理押し止め一輝の《陰鉄》を打ち払ったダンダリオンの運動能力は、流石のひと言に尽きた。
(中々にいい奇襲でしたが、一歩及ばず――ッ!?)
だが、次の刹那にダンダリオンは絶望を目にする。

眼前の武装をはじき飛ばされ無防備になった一輝。
彼の手から《陰鉄》に伸びる、黒い糸の存在を。
（あれは、日本刀の柄糸ッッ！）
しまったと、ダンダリオンが理解した瞬間、すべては決した。
一輝は解いた柄糸を引き、弾かれた《陰鉄》をヨーヨーのように手元へ引き戻すと――

「ハアアアッ!!!」

《陰鉄》を弾くためフルーレを振り切ってしまった無防備なダンダリオンを、一刀の元に斬り伏せたのだ。
ダンダリオンは「かはっ」と、血を吐き出しその場に膝を崩す。
同時に彼の手から《ライオンハート》が霞となって消え、一輝を縛る力もまた失せた。
「……実に姑息な発想もあったものですね……」
ダンダリオンはなんとか首を持ち上げ、自分を見下ろす少年に毒づく。
対し一輝は、
「それが武というものでしょう」
後ろめたさなどどこにもない、誇るような笑顔を返した。
これにダンダリオンもまた、血に染まった唇の奥で笑う。
全くその通りだと。
武とは、弱き者が強き者に是が非でも勝つために生まれた手段。
ならば、真の武において姑息さとは美徳である。
（……《一刀修羅》くらいは使わせるつもりだったのですが……）
剣戟における引き出しの数が違い過ぎる。
本来ならばこちらにとっての絶対有利であるリーチの差。
それすらも逆手に取る戦術眼。
戦いの場で見えているモノが違う。

一体どれ程の死線をくぐり抜ければ、この若さでここまでの老獪さを身につけられるのか。
もはや自分では足止めにもなるまい。
ダンダリオンはそれを認め、
「完敗です。……ステラ様をよろしくお願いします」
娘のように愛していた少女の未来を託した。
これに一輝は、
「はいっ」
力強い答えを返し、ダンダリオンの脇を通り抜けて、城壁に飛ぶ。
そして僅かな凹凸を足場に城壁を駆け上がると、城の中へ消えていった。
その姿をダンダリオンは失血で霞む視界で見送り、自らの王に託びる。
「すみませんね、シリウス」
私はもうあの少年の敵になれそうもありませんよ、と。

◆◆◆

ダンダリオンを撃破した一輝はついに城壁を越え内側に潜入することに成功した。
城壁の内側にももちろん衛兵たちは存在し、侵入者に対し目を光らせてはいるが、城壁さえ超えれば一輝の運動能力を用いれば城内への侵入は難しいことではない。
彼は城壁をよじ登ったように、僅かな凹凸を摑み、城の壁面を登攀。
開けっ放しになっていた窓から、城の中へ易々と侵入し、
「ふぅ。やっと城内までこれ、た――」

「――――ッ、」

侵入しようとした瞬間、目が合った。

部屋の中。
突然の侵入者に瞳を一杯に開き、絶句する、――下着姿の女性と。
（し、しまったぁぁっ!?）
気がはやり、中の確認を怠った自らの痛恨のミスを一瞬は悟るも、時すでに遅し。
女性は顔を朱に染め、瀟洒な作りのレース地に収まった小ぶりな乳房を腕で隠し、一輝を睨み付ける。
「こ、ごめんなさい！　中に人がいるとは思ってなかったっていうか、確認を忘れてたっていうか、とにかくわざとじゃないんです！　窓から忍び込んで何を言っているんだって感じですけど、ホントに不可抗力で……ッ」
これに一輝は自分でも言い訳にしか思えない言い訳をまくし立てるが、
「っ――――」
女性は唇を絞めたまま、ずんずんと大きな歩幅で一輝に近づいてきた。
緋色の瞳一杯に、窓枠に足を掛ける一輝を逃がさないとばかりにしっかり収めて。
そして一輝の至近に近づくや、手を振りかぶった。
（殴られる……！）
だが、それも仕方ない。
どう考えても言い逃れが出来るような状況じゃない。
ここはもう拳の十発ぐらいは受け入れるしかないだろう。
一輝は覚悟を決め、目を閉じ、自分の頬を打ち付ける衝撃に備える。
が――
「何をしている。連中に見つかる前にさっさと入れ、バカモノ」
「うわっ」
衝撃は訪れなかった。
代わりに一輝を襲ったのは、襟首をつかまれ部屋の内側へ引っ張り込む力だ。
殴りつける衝撃に備えていた一輝はこれに抗えず、窓枠から部屋の中へ落ちる。

何事だと、絨毯の上に倒れた一輝は顔を上げる。
視界に映ったのは、窓の外をきょろきょろと警戒する様に確認してから、窓を閉じ、カーテンを閉める女性の姿だった。
「あ、あの……」
彼女の行動が理解出来ず、一輝は困惑する。
そんな一輝を見て、
「ふっ、あはははっ！」
女性は知的さを隠さない美貌を崩して、大笑いした。
「いやいや、たまげたな。ステラが連れてきた男がどの程度のものなのか、私も知りたかったから父上の悪巧みに気付かないふりをしていたが、まさか一人で軍と国民を相手取り、城まで辿り着くとは予想もしていなかったぞ。すごいじゃないか、ボウヤ。
伊達にあの脳筋を女にしたわけではないな。
おかげで助けるために準備していた国営放送の用意が無駄になってしまった。
……ぶっくく、し、しかもよりにもよって私が着替えている部屋に侵入してくるとは、お前。確かステラが日本に着いたばかりのころも似たようなことをしたという話ではなかったか？」
（え……）
この女性の口ぶりに一輝は気付く。
彼女の髪の色が、先ほど空港で出会ったステラの母、アストレアと同じ淡い桃色であることに。
ならばこの女性は――
「あの、もしかして貴女は……、ルナアイズ殿下ですか!?」
その一輝の問いかけに、女性は笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を指で拭うと、
――大きく頷き、肯定を示した。
「うむ。まさしく私がお前の恋人の姉にして、ヴァーミリオン皇国次期女王。
第一皇女ルナアイズ・ヴァーミリオンだ。
初めましてだな。イッキ・クロガネ」

改めて名乗ると、ルナアイズは握手を求めるように右手を差し出す。
これに一輝も慌てて立ち上がり、
「あ、は、はいっ。初めましてっ。ほ、本日はお招きいただき、あ、ありがとうございます」
挨拶と握手を返す。が――その視線は泳いでいた。
理由はもちろん、ルナアイズの恰好だ。
身につけているのはレース地の下着だけ。
勝手に窓から入ってきた自分が悪いとはいえ、目のやり場に困るどころの話ではない。
この一輝の落ち着かない視線に、
「なにをキョドっているのだ？　……ん？」
ルナアイズは首を傾げ、――直後、はっと目を見開くと一輝の両腕を掴んだ。
「お前、怪我をしているじゃないか！」
言ってルナアイズが見つめるのは、先ほどダンダリオンに貫かれた左肩だ。
細身とはいえ貫通痕。
出血はそれなりに多く、白い制服には血が滲み、指先まで滴っていたのだ。
これに一輝もしまったという表情になる。
「すいません！　絨毯が……！」
「そんなことはどうでもいいから服を脱げ！　手当てしてやる！」
だがその一輝の的外れな心配にルナアイズは怒ったように眉を立てると、彼の服を脱がしに掛かった。
「え、えええ!?　いやちょっと、いいですって！　このくらい！」
「このくらいと言えるような怪我ではないだろう！　ダンの奴め、完全に本気で相手をしたな……。あの親バカどもは加減ってものをしらない――ってこら！　動くな！　子供じゃないんだから大人しくしろ！」
「わかりました！　大人しくするんで、せめて服を着てから手当してください！」
後回しだそんなもの！　肌を見られて死ぬわけじゃあるまいし！」
「そ、そりゃそうですけどもぉ～～っ！」
一輝は抵抗するもルナアイズの意志は思いの外強く、引きはがせない。

いや一輝が本気で振り払えば引きはがすことは出来るだろうが、それで怪我でもされたらと思うと力を入れられないのだ。
だから結局一輝はルナアイズのなすがまま、上着とインナーを剥ぎ取られ、
「ルナ姉！　仕事中悪いんだけどちょっと食堂に来て――――……
な、な、なななにやってんのよアンタたちぃぃぃぃぃ!?!?!?」
自分の恋人と姉が半裸で絡み合う光景を見たステラの絶叫が、城の地下室にまで響き渡ったのだった。

◆◇◆◇◆

とんでもない形だったとはいえ、一輝はステラと無事合流することに成功した。
最初こそ目に飛び込んできた衝撃的な光景にひどい混乱を示していたステラだったが、その誤解はルナアイズが見せた一枚の紙ですぐに解けた。
そう。街中にばらまかれた一輝の手配書だ。
その後、ルナアイズはこの物的証拠と、自分が掴んでいた父シリウスの行動を、皆を集めた食堂で暴露。
これにより黒鉄一輝来訪から始まった騒動は一旦の決着を迎え、
――食堂では大理石の床に正座させたシリウスを囲んでの糾弾会が開催されていた。
「なるほどー。つまりパパはヤナちゃんやシグナードちゃんと結託して、国庫から賞金まで出して、みんなでよってたかってイッキさんを追い出そうとしていたと？」
「ああ。家族会議もそのための分断工作。時間稼ぎでしかなかったということだ」
「パパ、そうなんですか？」
呆れた様子で自分を見下ろす妻に、シリウスは一国の王とは思えないほど情けない表情で反論する。
「う、ぅ……、しゃ、しゃーないじゃろがっ。なんで手塩に掛けて育てた娘をどこの誰ともしれん野郎にくれてやらにゃならんのじゃ！」

「そうやって駄々をこねて卑怯と卑劣の限りを尽くしたあげく、そのすべてを悉くイッキに乗り越えられたというわけか。いやまったく、なにひとついいところがないな。父上」

「ママはなんかもうがっかりですぅ」

「む、むむぅ……。ぐっ！」

アストレアとルナアイズの二人に冷めた目で見下ろされたシリウスは、言葉を詰まらせた後、怒りを込めた視線で一輝を射る。

お前さえいなければ、という声が今にも聞こえてきそうな形相だ。

一輝はひどい八つ当たりだなと苦笑する他に無かった。

と、そのときだ。

「お父様。……今の話、本当に全部ホントのことなの？」

食堂に来てからこっち、ひと言も声を発さなかったステラが初めて口を開いた。

妙に落ち着いた声音。前髪に隠れ窺えない目元。

一輝は胃のあたりに冷たい何かが降りてくるのを感じた。

そして気付く。

今のステラが無数の信管を突き刺した爆薬のようなものだと。

何か僅かでも、不用意な刺激を加えようものなら大爆発を起こすだろう、と。

そしてそれは、

「ス、ステラ。聞いてくれ。ワシはただお前を守ろうとじゃな……」

「しんじられない……」

シリウスの不用意な言い訳で、

「しんじられないッ!!!」

まさしく爆発した。

ステラは部屋が揺れるほどの、爆風さながらの大きな声で叫ぶや、緋色の髪の毛をその芯から輝かせ燐光を散ら

し、怒りに燃える瞳をシリウスに向ける。

「嬉しかったのに！　お父様がイッキの話を聞きたいっていってくれたとき、アタシたちのこと、お父様も真剣に考えてくれてるんだって思って……嬉しかったのにッ！　なのに何で!?　どうしてこんなことするの!?　ねえッ!?　どうしてこんなひどいことができるのよッ！」

感情のまま怒鳴り声を上げ、シリウスに迫るステラ。

放射される熱にステラの周囲の光が歪み、景色が捻れる。

これは不味い、と一輝は感じた。

ステラの怒り方が尋常じゃない。

理性が怒りに焼き尽くされている。

このままでは暴力沙汰になりかねないほどだ。

同じことをアストレアも感じたのだろう。

流石にこれを放置するのは不味いと、彼女はシリウスを庇うよう、

「ステラちゃん。怒るのは当然だけど、ちょっと落ち着きましょう？」

横からステラに声をかける。が――

「おちつけないわよっ!!!」

火を噴かんばかりの瞳でステラはアストレアを睨みつけ――

じわりと、目尻に大粒の涙を浮かべた。

「す、ステラちゃん……」

「だって……ッ！　だって、こんなの、ひどい……！

みんなでよってたかって、せっかく来てくれたイッキをいじめるなんて……！

こんなひどいコトしたら、イッキがみんなのこと嫌いになっちゃう……っ。

この国のこと、キライになっちゃうじゃないッ！

あた、アタシはっ、お父様も、国のみんなも、大好きだから、っ――、

そんなみんなを、イッキにも、っ、好きになって、ほしかった、のに……なのにこんな、うっ、う、うぁ、～～～～っっ！　うわあぁぁ～～～～～～～～～～～～アアアッ!!!」

そこでステラの昂ぶった感情が臨界点を突破した。
ステラはその場に崩れ落ちるや、顔を両手で覆うとわんわん子供のように泣きじゃくった。
父や国民たちの行ったことに対する憤りが、悲しさが、もはや少女の幼い心で処理出来る限界を超え、嗚咽となって吐き出される。
これにシリウスは狼狽を示す。
殴り飛ばされることは覚悟していた。
だがまさかこんな大泣きされるとは考えていなかったからだ。
「す、ステラ……！　ママ、こういうときはどうしたらええんじゃ……！」
「……今回ばかりはちょっとどうにもならないんじゃないかしらぁ」

「そ、そんなぁ……！」
確かにどうにもならない。
自分の家族を、国民を、大切な人に好きになってほしい。
そう思っていたステラにとって、あまりに残酷すぎる出来事だ。
今シリウスが何を言ったところで火に油だろう。
しかし、
――そのステラの悲しみは、勘違いだ。
だから、それをステラに知らせるため、黒鉄一輝は動く。
「ステラ」
彼は床に座り込み泣きじゃくるステラの丸い背中をそっと抱きしめ、
「なっ、キサマなにさらし――」「座ってろ」
立ち上がろうとしたシリウスに踵落としを決めたルナアイズに目線で礼を送ってから、しゃくり上げるステラの耳元で優しく囁く。
「大丈夫。僕はこの国のことも、この国のみんなのことも、キライになったりしない。むしろ……今日ここにくるまで、この国のみんなと戦って……、僕はこの国のことがとっても好きになったよ」
「イッ……キ……？」
この言葉に、ステラは充血し真っ赤になった瞳を不思議そうに一輝に向けた。
ステラは知っている。
一輝が自分を慰めるためにその場限りの嘘をつくような男じゃないと。
つまり彼の言葉は本心なのだ。
だからこそ理解出来ない。
「どう……して……」
初めて来る異国の地で、ここまでの迫害を受けてどうしてそんなことが言えるのか。
これに一輝はステラの涙を優しい手つきで拭いながら、答えた。

「だって、僕の大切な女の子のために、こんなにも必死になってくれる人たちなんだから」
心からの偽りのない気持ちを。
そうだ。嫌いになれるはずがない。
確かにやり過ぎではあるし、非常識な行動なのは間違い無い。
でも、……それを押してでも、彼らは試さずにはいられなかった。
ステラの夫とならんとする男を。
それは何故か。
誰もがステラという少女を心から愛しているからに他ならない。
愛しているからこそ心配し、心配だからこそ、求めるのだ。
その男が、自分たちの宝物を手にするに相応しい器なのかを。
その気持ちを、心を、愛情を、硬ましく思うような一輝ではない。
ステラの選んだ男は、そんな器量の狭い男ではない。
「温かくて、やさしい国だね。ステラが守りたい気持ちがよくわかったよ。
……そして、愚った。今までで一番強く。
僕も、――そんな国の、家族の一人になりたいって……っ！」
言うと一輝はステラから身を離すと、立ち上がって彼女の家族に向き直る。
そして、一つ静かに深呼吸すると、
「お姉さん。お母さん。――お父さん」
「誰がお父さんと呼んでええと――」「黙ってなさい」
耳たぶをアストレアに捻られるシリウスを中心に、三人全員を視界に収め、口を開く。
ステラを愛するすべての者たちに対する自らの答えを。
そして今日、この場所に来た目的を果たすため。
「あたらためてご挨拶させていただきます。

ステラさんと交際させていただいている、黒鉄一輝と申します。
自分は巷で噂になっている通り、あまり多くを持っている人間ではありません。
伐刀者としての才能も優秀とはとても言えませんし、一応黒鉄の家の次男ではありますが、実家との折り合いも悪く半ば絶縁状態にあり、社会的な地位もありません。
ステラさんの交際相手として、甚だ見劣りする人間だということは自覚しています。
こんな男にステラさんを任せられるかと、心配する皆さんの気持ちも、もっともだと。
ですが――
ただ一つ。ステラさんを愛する気持ちだけは、この国の人たちにも、お姉さんにも、お母さんにも、お父さんにも決して負けないという自信があります！
そして、この気持ちを貫き通す覚悟も……フ！
ですから僕の覚悟を気の済むまで試してください。
皆さんが納得出来るまで、僕という男を見極めてください。
僕はそのすべてに全霊を以て応えます！」

強さが必要というのなら、どんな敵にも打ち勝ってみせる。
地位が必要だというのなら、いかなる方法を使っても手に入れてみせる。
ステラを愛し、守りたいと思う優しい人々の誰一人にだって、妥協させるようなことはしない。
一輝はそう宣言し、

「そして……それが叶ったなら、そのときはどうか、ステラさんを僕にください！」

一輝は床に正座するシリウスよりも深く、身を低く頭を垂れた。
この一輝の行動に隣にいたステラも頬の涙と鼻水を拭い、
「おねがいします……っ」
彼の隣で自らの家族に深く頭を垂れ、示した。

ステラ・ヴァーミリオンが誰の傍らに在る者かを。
この二人の決意を見て、アストレアは自らの娘の成長に愛おしそうに目を細め、シリウスに問いかける。
「どうします？　パパ」
「な、なんでワシに振るんじゃ……！　ワシはみとめんぞ！　なにをやろうとステラを嫁になんぞ絶対にやらんからなッ！」
「というこどらしいが、どうするステラ」
「ウチに父親なんていたっけ？」
「はて、どうだったかな。母上」
「もしかしたらいなかったかも――」
「よっしゃあ！　ワシも男じゃけえ、イッキ君がそこまでの覚悟を見せるいうなら前向きに検討しようやないか！」
「あ、ありがとうございます」
礼を言いつつも女性陣の息の合った連携にやりこめられるシリウスの姿に、一輝は女性が多い家族における父親の肩身の狭さを感じ苦笑する。
婿入りすればきっと自分もこうなるんだろう。
しかしとにかくこれで渡りはついた。
（あとは、――自分の根性の問題だ）
何でもしてみせる。
我ながらずいぶんと大口を叩いたものだと思わなくもないが、後悔はしていない。
必ずやりきってみせると、一輝は強く決意する。
そしてそんな一輝に早速、ルナアイズが告げた。
「さて、好きに試せといったなイッキ。ならまずは私から課題を提示させてもらおうか」
「ル、ルナ姉!?　ルナ姉は反対しないって言ってたじゃない！」
「反対はしないが手放しで賛成すると言った覚えはないぞ」
「うっ」

まさかここに来てシリウスのハッタリが正しい事になるとはと、苦い表情になるステラ。
対しルナアイズは「まあ安心しろ」とステラをなだめ、言った。
「そう難しい話ではないさ。イッキの腕っ節ならな」
「腕っ節が関係ある課題なのですか？」
一輝の問いにルナアイズは頷く。
「ああ。イッキ。お前には近々クレーデルラントと行う『戦争』に参加してもらう」
「せ、『戦争』、ですか……!?」
言葉の物騒さに驚きを隠せない一輝。
だがルナアイズは彼の想像をすぐに否定する。
「なに。戦争といってもそこまで血なまぐさいものじゃない。クレーデルラントもヴァーミリオンも同じ《国際魔導騎士連盟加盟国》だからな」
《国際魔導騎士連盟》には小国同士が助け合い、大国から身を守るため、有事の際には戦力や戦費を提供し合うという取り決めの他に、連盟加盟国同士での戦争についての取り決めも存在する。
その取り決めとは、連盟加盟国同士の諍いは通常兵器や軍隊を用いず、両国の代表となる《魔導騎士》を選出しての決闘によって、その勝敗を決するべし――というものだ。
このシステムは『伐刀者は力なき民衆を守るべし』とする連盟の大原則の象徴であると同時に、加盟国間の調和を保つには欠かせないものだ。
加盟国間で国力によって上下関係が構築されてしまうようなことになってしまえば、力のない小国が連盟に居づらくなってしまう。
だがこのルールを用いれば、小国が大国に勝利することも可能。
対等の立場を保てる。

『同じ連盟に加盟しているといっても一つの国と国。
どうしても政治的諍いは起こるもの。それは避けられない。
無理に避けようと凝り固まれば、組織は柔軟性を失い、ひび割れ崩壊する。

だからこそ、その加盟国間の戦争は公平な条件で行われなければならない』
連盟の長《白髭公》が主張し定めたこのルールは、連盟内でも賛否が分かれるものだが、《国際魔導騎士連盟》という組織が半世紀の間に世界を二分するほど巨大なものになることが出来たのは、間違い無くこのルールの存在のおかげだろう。
「もちろん、ヴァーミリオンとクレーデルラントの戦争も、このルールに則って行われる。イッキ。ヴァーミリオンがクレーデルラントから独立した国家なのは知っているか？」
「はい。その経緯は存じています」
「ならそのあたりの説明は省くが、そういう成り立ちの国家だから、当然のように領土問題を抱えていてな。今でも国境付近のガス田をクレーデルラントと取り合っている。
この戦争は、件のガス田の所有権を懸けて、五年に一度行われているものだ。
試合形式は毎回変わるが、今年は代表として五名の《魔導騎士》を立てての団体戦。
計五試合で勝ち星を多く挙げた国の勝利とすることで、すでに話は付いている。
……ここまで言えばもう私の条件はわかるな？」
「その戦争にヴァーミリオン代表の一人として参戦して、勝利すること……ですか」
「少し違う。お前一人の勝利では意味が無い。
自分の敵に勝利し、なおかつヴァーミリオンに勝利をもたらすこと。
これが私からの課題。第二皇女にして次期女王ルナアイズ・ヴァーミリオンが、第二皇女ステラ・ヴァーミリオンとの交際を認める条件だ」
そう告げて、ルナアイズは一輝を試すような笑みを見せる。
「悪くない話だと思うぞ。何しろ直接国益に貢献できるチャンスだ。
しかもここ二十年、ヴァーミリオンは一度もこの戦争に勝てていない。
その状況を打ち破った男となれば、もはや誰もステラとの婚約に異論を挟みはしないだろう。……頭の固い父上もな」
このルナアイズの言葉にシリウスはぎょっと目を剝く。

「ぇ!?　ちょ、ちょっとまてやルナ！　そんなことひと言も――」
だが、
「ねえルナ姉。さっきから気になってるんだけど、そのオジサン誰？」
「とーぜんじゃ！　この国に勝利をもたらしてくれるサムライならば、ヴァーミリオン国王であるワシが反対する道理なんぞあるはずもない！　安心してステラを任せられるっちゅうもんじゃ！　ナハハハッ！」
ステラのひと言でシリウスはあっさり転んだ。
彼も気付いているのだ。
さっきから自分を見るステラの目が冷え切っていることに。
今ステラの中で父親の存在は非常に危うい場所にあるのだ。
そうそれこそ、ほんの僅かな衝撃でもポロッと頭の外に零れ落ちて二度と思い出せなくなるほどに。
まあ自業自得以外の何ものでも無いが。
そうしてシリウスを言いくるめてから、ルナアイズは改めて一輝に問う。
「どうだ。私の課題、受けてみるか？」
対し一輝は、
「もちろんです。それがステラの夫として求められることならば、必ず勝利してみせます」
即答を返す。
最初戦争と言われて少し驚いたが、剣で道を斬り拓くのは、むしろ望むところ。
断る理由などありはしない。
この返事を聞いて、
「よしっ」
ルナアイズは突然、くるりと踵を返すと一輝たちに背を向けた。
そして一人食堂の大きなガラス戸に近づき、両手でそれを開くと――
「そういうことだ！　皆も聞いたなッ!?」
テラスから城の外へ向かって叫んだ。
瞬間、

『『ワアアアアアアアアアアアアアアア!!!!』』
と、地鳴りのような喝采が、開け放たれた窓から食堂に飛び込んできた。
何事かと皆でテラスに出てみれば、城の外には数え切れない程の群衆が詰めかけ、歓声を上げている。
「こ、これって、どういうこと!?」
「こういうことだ」
驚き目を剝くステラに、ルナアイズは悪戯少年のような表情でドレスの裾からあるものを取り出す。
それは父親の暴挙を見て見ぬふりしつつも、いざというとき一輝を助けるため、事前に皇都すべての放送設備にリンクさせていた集音マイクだった。
「今までの会話全部、国営放送で外に流した。こうすれば国民に説明する手間も省けると思ってな」
「ちょ……っ」
しれっととんでもないことを言ったルナアイズに一輝は抗議しようとする。
彼女の両親に対する挨拶を、ご町内すべてに垂れ流されていたのだから当然だ。
だがルナアイズはそんな一輝を完璧に無視して、外の者たちに言葉をかけた。
「今聞いたとおりだ！　ここに一つの約束が成された！
ヴァーミリオン国王シリウス・ヴァーミリオンは、戦争の勝利を以てイッキ・クロガネを第二皇女ステラ・ヴァーミリオンの夫として認めると！
この約束に異論のある者はいるかアッ!?」
対し群衆が応える。
『いるわけねえ！』
『俺たちは全員で戦って、全員で負けたんだ！』
『しかもこんなアタシたちのことを、婿さんは好きだって言ってくれた……っ』
『こんなに強くて優しい男は見たことがないわ！』
『ステラちゃんを任せられるのはアンタだけさ！　もし国王が駄々をこねて約束を反故にしようとしたら、クーデ

ター起こしてでもアタイたちはアンタの味方につくからね！』

一輝に向けられるのは、否定的な感情ではなかった。

ここに来る前に交わした、決闘の約束。

国民全員を振り切ってステラの元へ辿り着けば、一輝の勝利とする。

ヴァーミリオン国民は決闘の約束を守ったのだ。

ならば――、一輝が果たすべきもただ一つ。

「国民一同、活躍を期待しているぞ。イッキ」

告げるルナアイズの言葉。

一輝はそのすべてを受け止め、答える。

「はい……っ！　精一杯、やらせていただきます！」

勝つというのは背負うということ。負けた者の願いを受け継ぐということ。

だから彼は勝者として誓う。

この勝ち取った信頼を、決して裏切りはしないと。

第四章　惨劇の開幕

クレーデルラント王国首都リュシェール。

世界遺産にも登録されているアール・ヌーヴォ建築立ち並ぶ都市。

その傍らに街の景観を崩さないよう、まるでオペラ座のような仰々しい外観をした《魔導騎士》の訓練施設がある。

そして今、その訓練施設には、近く迫るヴァーミリオンとの戦争に向け、クレーデルラント代表の五人が特訓を行っていた。

「ふんぬぅぅぅ――――ッッ!!!!」

「だらぁぁぁぁぁぁ!!!!」

赤い髪の小柄な男と、樽のような身体の大柄な男は、それぞれの目の前に置かれた巨大なプレス機のピストンを身体全体で押しかえしている。

これは伐刀者の瞬間魔力放出量を鍛えるための装置だ。

圧力を加えたプレス機のピストンを、魔力放出による膂力の強化を以て押し返す。

単純なトレーニングだが、それ故に確かな効果が期待できる訓練だ。

大型プレス機の圧力はすでに、双方共に二tを超えている。

だがそれでも二人は、少しずつだが確実に、ピストンを押し返していく。

伐刀者の平均は精々五〇〇kg前後なので、二人とも中々の膂力の持ち主だ。

流石は、一国の代表として選ばれた精鋭といえる。

そして同じトレーニングルーム内に存在するアクリルでしきられたプールでは、他のメンバーが別の訓練を行っていた。

「ミラちゃん、これきついよぉ……！」
「まだまだっ！　あと一〇往復いくで……っ！」
「ええぇ……っ、す、スパルタすぎるよぉ……！」
「エナは魔力の使い方が下手くそやから、戦争までに鍛え直してくれってリーダーに言われとるんやっ！　ほら、遅く走ると余計制御が大変になるで！」
「ひぃ～ん」
まるで増水し氾濫した河川のように激しく流れる訓練用の五〇mプールを、二十代前半の女性二人が走る。
そう、泳ぐのではなく、荒れ狂う水流の中、プールの底まで真っ直ぐに魔力による足場を通しながら走るのだ。
これによって鍛えられるのは魔力制御力である。
魔力制御の訓練には手を触れずに粘土を整形したり、水を浮かせそれを零さないよう保ち続けるような訓練も存在するが、二人が今行っている激流の上を走る訓練はその中でも屈指の難易度を誇るもの。
それを不満を口にしながらもなんとかやり続けられるあたり、この二人の女性の伐刀者としての実力も相当高いことがわかる。
そして四人が各々汗を流していると、もう一人、訓練場に金髪長身の青年が入ってくる。
青年は訓練場に入るなり、手を数度打って、四人に呼びかけた。
「みんな。トレーニング中すまないが、少し集まってくれ！　ついさっき、ヴァーミリオンから代表五人の最終オーダー表が届いた！」
この呼びかけに四人は「ようやくかよっ」と、待ちかねた様子で訓練を切り上げ、金髪の青年……代表団のリーダーであり、クレーデルラント王国第一王子ヨハンの元へ集まる。
「こっちは一ヶ月は前から決まってたってのに。何ちんたらしてやがったんだか」
「たしかに、ずいぶんと遅かったね」
赤い髪の青年は悪態をつきながら、大柄な青年はそれに同意を示しながら、それぞれヨハンからヴァーミリオンのオーダー表を受け取る。
女性二人も後に続き、オーダー表に目を通した。
「どれどれ～。……うひー。やっぱりステラ殿下は出てきよるかぁ～」

「あの二人もいるね。潜る人と撃つ人」
「ヴァーミリオンじゃ三人しかいないCランクだからな。順当だろ」
「四人目は同じくCランクのヴァーミリオン国王やね。まあこの人は当たり前か。割と手堅いメンツやけど、なんでオーダー決定がこんなに遅れたんやろ？　……って、あれ？」
と、そこで活発そうな雰囲気のある女性、ミラが首を傾げる。
「五人目の男の子、誰やろ？」
「イッキ・クロガネ？　日本人か？　なんでヴァーミリオンの代表で日本人が出てくんだ？」
「しかも備考みてみぃやルーク。Fランクって。ヴァーミリオンは散々悩んでなんでこんなの出してきたんやろ？」
眉を顰める二人。
だが、大柄の男リッドと大人しそうな女性エナリスの反応は、この二人とは異なった。
「いや、ちょっとまって。僕この人の顔、どこかで見たことあるよ？」
「あっ！　こ、このひと！　テレビで見た！　ステラ姫の彼氏だよっ！」
「あー！　そうだよ！　この間衛星放送でやってたステラ殿下の日本での試合だ！」
「その通りだ」
この二人の反応に、ヨハンが肯定を示す。
《七星剣王》黒鉄一輝。ランクこそFだけど、低い魔力値を補ってあまりある神業的な剣技の使い手で、日本では二度も《紅蓮の皇女》を破っている。正真正銘の実力者だよ」
そのヨハンの言葉に、ルークとミラの二人も顔色を変えた。
試合の放送を見ていなかった二人も、《紅蓮の皇女》を異国の低ランク騎士が倒したという噂だけは知っていたからだ。
「あ、あの噂ってマジネタなのかよ……っ」
「そんなん絶対うそや思ってたわ……」
「うそじゃないよ。……私も試合見てたけど、この人本当にすごかったもん」
「で、でもさヨハン。この人ヴァーミリオンの人じゃないよね？　なのに戦争にエントリーしていいの？」

確かそれは連盟規約で禁止されていたはずだ、というリッドにヨハンは頷いて肯定を返す。
「本来は駄目だ。でも今回は国王……ようするに俺の父さんが許可して、『特例招集』枠で参加することになったそうだ」
「えーーーっ！　なんでそんなウチらが不利になるようなことをわざわざ許可したん？」
「どうやら一ヶ月前からずっとルナアイズさんが何度も甲斐甲斐しく足を運んで交渉していたようだね。――クロガネ氏がステラ殿下の婿に相応しいかどうかを試す試験に、この戦争を使いたい、と」
「な、なんだそりゃあ。どっかの部族の成人式かよ」
「そのくらいの実績がないと子煩悩な国王がいつまでも娘を嫁に出してくれないから、だそうだ。彼女も中々苦労しているようだよ」
失笑しながら肩をすくめるヨハン。
その横でミラとエナリスの二人も堪えかねたように噴き出す。
「あはは！　せやなぁ。なんか目に浮かぶわその光景」
「私のパパもそうだったけど、父親ってどこの家もそんなものなのかな？　リッド」
「ははは……。かもしれないね」
水を向けられ、つい先日エナリスの両親に婚約の許しをもらってきたばかりのリッドは苦笑しながらそう答える。
僕も娘が生まれたらそうなるのかも、とも。
「ヨハン。ちなみにこの男はマジで噂通りツエエの？　《紅蓮の皇女》が体調を大崩ししてたとかじゃなく？」
「はっきり言って俺たち五人の誰が当たっても勝てないな」
「でもFランクって書いてるじゃねえか。これはなんかの間違いってことなのか？」
「いや、ランク自体は正しいだろう。俺も試合は見たが、彼の魔法関係の力はFランク以外にランク付け出来るものじゃなかった。ただ彼は強いっていうか……異常なくらい『戦うのが上手い』んだ。悔しいけど、俺たちじゃ相手にならないよ」
断言するヨハンに、ミラは「え～」と声音で不平を示す。
「じゃあウチらは始まる前から二敗確定ってことやん。つっら」
「王子様よぉ。お前の力でやっぱ部外者は出場禁止ってルール変えてこいよ」

これにヨハンは「無茶を言うな」と返す。
「ルナアイズさんには日頃から色々と知恵を貸してもらってるんだ。これ以上借りは増やせないよ」
というのも、ヨハンとルナアイズは両国の次期王位継承者として幼い頃から付き合いのある、一歳違いの幼なじみなのだ。
大学も同じケンブリッジ大学を出ており、当時は学業に私生活にと、世間知らずのヨハンはしっかり者のルナアイズに大いに助けて貰った。
彼女がいなければ、大学で誤って作ってしまった悪い友達の誘いのまま、取り返しのつかない間違いを犯してしまっただろうと、かつてルナアイズからもらった本気の平手打ちの痛みと共に、ヨハンは心に刻んでいる。
子供の頃からずっと自分を導いてくれた一つ年上の頼りになる女性。
それがヨハンにとってのルナアイズであり、このイメージは今に至っても払拭出来ていない。
だから彼はどうにもルナアイズには強く出られないのだ。
「相変わらずヨハンはルナアイズさんに弱いね」
「仕方ないだろう。子供の頃からの上下関係なんてそう簡単にひっくり返せるものじゃない。
だからここはみんなをあてにさせてくれ。
それに確かに二敗は大きいけど、残りすべてを勝てばいい話だ。
ティルミット・グレイシーとミリアリア・レイジーの二人はタッグを組んでいるときは強いけど、一人一人相手をするならそこまでの騎士じゃない。
《紅蓮の荒獅子》と呼ばれたシリウス王もとうに全盛期は過ぎてるロートルだ。
俺たち五人の誰が当たってもこの三人はどうにか出来る範疇さ」
それに――、
と告げて、ヨハンは表情を和らげる。
「まあ最悪負けたところで何か大きな損があるような話じゃないしね」
これは本当のことだった。
国境付近のガス田の所有権を懸けた戦いという名目の戦争だが、数十年前に結ばれた両国間の協定で、勝った方が負けた方のインフラ整備費を援助金という形で負担することになっているからだ。

つまりこの戦争、勝っても負けても殆ど差がない。
実質、自国の優秀な騎士を出し合っての公開合同演習のようなものなのだ。
国民としても、隣国と本気でバチバチやり合っているような情勢より、双方で利益を分け合うこの戦争の形は概ね肯定的に受け取られ、今では戦争とは名ばかりの五年に一度の両国民の親睦会になっている。
クレーデルラント国王が他国の実力者である一輝の参戦を許したのも、こういった背景があるからだ。
両国共に死に物狂いで勝ちに行くような戦いではない。
だから代表団もはじめからヨハンや国王を本気で糾弾する気はない。
ルークはヨハンの言葉に「そうだな」と賛同し、
「んじゃまあ、折角だし遠くは日本からはるばる来てくれたサムライの技。堪能させてもらうとすっか」
旅行を心待ちにしているようなテンションで、自身の霊装である緋色のナイフを顕現させ、それを軽く投げて弄ぶ。
「にしてもあのお姫様が婚約かぁ。昔剣技大会で戦ったことあるけど、とにかくストイックつーか真剣すぎて近づきがたくて、てっきり武に処女まで捧げる生き方をすると思っとったから驚きやで」
「ああいう手合いは憧れると一気に行くとこまで行くんだよ。来年にゃガキの一人もこさえてんじゃねえか。――エナ、リッド、おめーらも負けてられねえな？」
「～～～～っ」
「る、ルーク！　余計なお世話だよっ！」
ルークの下世話なひと言に新婚夫婦の二人は顔を林檎のように真っ赤にする。
その様子が微笑ましく、独身組のルークとミラの二人は肩を揺らして笑う。
やがて、そんな二人の笑顔につられて、新婚夫婦の二人も。
この四人の姿に、ヨハンは心から自分の率いるチームをいいチームだと思った。
彼らとなら残り三勝をしっかり抑え、ヴァーミリオンに勝利することが出来るだろう。
そう確信し、口元を緩ばした、――瞬間だった。
皆の楽しげな皆の笑い声に混じって、
ノイズが、聞こえた。

「アハ　アハ　アハ」
「え……？」
まるでこの世のすべてを嘲るような、嫌悪感を掻き立てる笑い声が。
同じ者をヨハン以外の全員も聞いたのか、彼らは顔を見合わせ、
同時に、自分たちのうちの誰の者でもない哄笑のほうに目を向けた。
そして、見つける。
「いやいや噂には聞いていたけど連盟の戦争ってのはひどい茶番だねぇ。勝っても負けてもいい戦争なんて、へタな喜劇にもなりゃしない」
訓練場のキャットウォークの欄の上に座る、黒いパーカーフードを目深に被った小柄な人形を。
人形は、暗く闇の落ちたフードの奥に光る、鬼火のような青と血のような赤の二色の瞳を細め、嘲笑う。
「蟻の巣でも眺めてたほうがよっぽど有意義だね」

◆◇◆◇◆

「勿体ないなぁ。折角力ある存在としてこの世界に生まれたのに、『社会』なんてくだらないものに飼い慣らされて、それを満足に振るうことも出来ないなんてさ。ボクから言わせればそれは人生という掛け替えのない時間の損失だよ」
（なんだ、この子は……）
何の前触れもなく自分たちの前に現れた、不気味な子供。
ヨハンは彼の遺伝をまぶしたようなくすんだ白髪と、その奥で妖しく輝く蒼光と赤光の瞳に言いしれぬ怖気を感じる。

ただ者ではない。
それはヨハン以外のクレーデルラント代表メンバーも感じていた。
「な、なんだテメェ！　一体どこから入りやがった!?」
「ここは代表メンバーが貸し切っている合宿場だ。部外者の立ち入りは禁止されている。すぐにそこから降りてきなさい」
ルークもリッドも、自分たちよりもずっと幼い子供を叱る口調ではない。
体勢も、すぐにでも戦闘に移れるよう重心を低く備えている。
そんな一同に対し、侵入者はつまらなさそうに白い素足をパタパタさせながら、
「……まあ無理もないか。キミたちは何も知らないのだから。殺戮の快楽も。略奪の恍惚も」
憐みすら籠もった口調で告げると、フードが落とす影に赤い三日月が如く頬に深く切れ込む笑みを浮かべ、言った。
「だからボクが教えてあげるよ。……実演を交えてね」
（――――ッッ！）
直後、この場で一番の実力者であるBランク騎士ヨハンは気付いた。
彼だけが、気付けた。
ぞわりと、まるで地獄の釜の蓋を開けたように、侵入者の小さな身体からこの部屋すべてを覆い尽くすほどの悪意と害意が噴き出したことを。
同時にヨハンは理解する。
――勝てない。
これは、この目の前の存在は自分たち程度が相対していいような領域の存在ではないと。
だから、
「みんなアッ！　今すぐ逃げろォォォ――――――ッッ!!!!」
叫んだ。

生まれてこの方、出したことがないほどの大声で。
血を吐くように。
しかし、――遅かった。
いや、遅い早いの問題ではない。
この存在を前にした時点で、彼らの運命はすでに決していたのだから。
「……ぇ？」
ヨハンの顔と身体に、赤い鮮血が散る。
鮮血を散らしたのは、大柄の青年リッドだ。
彼は心臓を穿たれていた。
他ならぬ、ヨハンの左手に顕現された黄金の騎士槍によって。
「は……？　ぁ？」
リッドは突然のヨハンの凶行に理解が追いつかない。
痛みを理解することすら。
ただ、目を白黒させ――
「ヨ、ハン……なん、で……」
次の瞬間、引き抜かれる槍に引かれるまま前のめりに倒れ込む。
リッドは胸部の空洞から滝のように血を噴き出しながら、助けを乞うよう、この惨劇に声を失い愕然とする自らの妻に手を伸ばす。
だがその手は届かず、彼の意識と共に地面に落ちると、そのまま動かなくなった。
「い、いやぁあああああああ――――っっっ!?!?」
「お、おい。リッド……。うそだろ……!?」
「り、リーダーッ!?　な、なにを、なにをやっとるんや!?」
ミラは凶行に及んだヨハンに自らの霊装である二丁拳銃を突きつける。
だが、――もちろんこれはヨハンの意志ではない。
（これは……っ！）

ヨハンは気付いた。
もう自分の身体が、自分の意志では動かなくなっていることに。
それがどういう理屈なのかヨハンにはわからない。
だが、自分が敵の手中に落ちたことは理解出来た。
それを自分の力ではどうすることも出来ないことも。
だから、
「全員俺に近づくなァァッ！　はやく！　はやく逃げるんだッ！」
ヨハンは自分を捨てて逃げるよう、必死で仲間たちに叫ぶ。
だが、その必死さがルークに気付かせてしまう。
彼の身体に起こっている異常を。
「ッ……！　そうか、このガキがなんかやってんだな！」
惨劇の元凶。
今倒すべき相手を理解したルークは、ナイフ型の霊装を逆手に構えると、《疾風》の二つ名の由来でもある速度を以て、キャットウォークに座る敵に飛びかかる。
「待ってろ！　今すぐ――ッ!?」
「ルーク!?」
しかし、ルークの刃が敵に届くことはなかった。
彼の身体は、何も無い空中で停止したのだ。
まるで……蜘蛛の巣に捕まった蝶のように。
「ん、だぁ、これ……？　身体が……うごかねえっ！」
そしてそんなルークの足下に、ヨハンの身体は彼の意志とは無関係に近づき、
「うそっ。いや、何する気なんやリーダーッ！　やめてぇえ！」
「よ、よせ……！　やめろおぉっ！」
ヨハンの叫びも空しく、彼の身体は宙に磔にされたルークの身体を、真下から騎士槍で突き貫いた。
「ゲ、ぼ――、」

黄金の騎士槍に貫かれたルークの身体は数度激しく痙攣した後、弛緩。
程なく絶命した。
槍を引き抜くヨハンの全身に、ルークの腹部に詰まっていた何もかもが降り注ぎ、彼の美しい金髪と心を汚す。
自分の仲間を、親友を、次々と手に掛けたヨハンの精神はもう限界だった。
だが、それでも彼は焼き切れそうになる精神を必死に繋ぎ止め、
「……頼む……っ、ミラ……！」
逃げてくれ、と。
涙を零しながら生き残っている仲間に懇願する。
「ッッ――――！」
このヨハンの視線に、ミラは自分がすべきことを理解した。
彼女は夫の亡骸を揺すり続けるエナリスに駆け寄ると、彼女の腕を掴む。
「エナ！　立って！　走るんや！」
「リッドっ！　リッド返事してエッ！」
「こんのおお！」
「いやあああああっ！　リッド！　リッドォ！」
錯乱し言うことを聞かないエナリスをミラは力任せに引き起こして、ヨハンの指示に従いこの場所から逃げ出すため、一心不乱に出口へ向かう。
そんなときだ。

「へー、君はこういう技が使えるのか。折角だからあの二人はこれでやっちゃおう」
まるで新しい玩具をみつけたようにはしゃぐ声が背後から聞こえ、――直後、
金色の光が訓練場全体に迸った。
「み、ミラちゃん！」
（まさか……っ）

エナリスの焦った声にミラも背後を振り返る。
そして、絶望した。
チームメイトであるミラとエナリスは知っている。
この輝き、それは――

「よけろおおおおおおおおおおお!!!」
ヨハンの霊装《黄金戦車》による伐刀絶技――
《疾風の王道》
彼の霊装の本体である黄金の軍馬に跨がり、自身の前方に存在する悉くを轢いて潰して道となす、万夫不当の突撃技だ。
破壊力はもちろん、《疾風》のルークすらも置き去りにする瞬間速度を誇る、クレーデルラント最強にして最速の一撃。
とてもミラたちで対処出来る代物ではなく、
「っ……！」
一閃。
すべてを突き破る黄金の輝きが駆け抜ける。
それによる破壊は光が駆け抜けた直線に止まらない。
爆砕された大気は四方に打撃として迸り、施設内に存在するすべての備品を根元から引き抜き、壁に打ち付け、照明を破壊する。
軍馬の足が止まり黄金の光が弱まると、施設内には闇が落ち――
「あ……、あぁ……っ」
自らが踏み砕いた道を振り返り、ヨハンは見た。
闇の中、焼け爛れた地面に転がる、全身が砕かれねじ曲がった二人の女の亡骸を。
一方、すべての元凶はヨハンの表情を見て楽しそうに手を打って嗤う。

「どうだった王子様？　なかなか刺激的だったんじゃないかな？　大切な仲間を自分の手で一方的に殺戮するなんてさ、アハ　アハ　そうそう味わえないトキメキだろう？」

「……ろしてやる……っ！　殺して、やるゥウァアアアアアアアッッ！」

瞬間、限界を超えた怒りがヨハンを突き動かした。

ブチブチと筋繊維の断裂する音を立て、引きちぎれた皮膚から血飛沫を散らしながら、自分の肉体が破壊されるのもお構いなしにヨハンは黄金の軍馬の手綱を引き、

「《蹂躙の王道》――――ッッ!!!」

身を焼き焦がす程の憤怒を以て、キャットウォークに座る敵に突撃をかけた。

《黄金戦車》の能力は《道》。

ありとあらゆる悪路、障害を踏み越えることはもちろん、空中に漂う大気すら自身にとっての《道》とする異能。

故に軍馬の蹄は何も無い空中を蹴りながら真っ直ぐに敵に向かい、

ヨハンが突き出した騎士槍が敵の顔面を突き飛ばす――刹那、

当たり前のように、ヨハンはすべての動きを停止させられた。

「うーん。殺戮はお気に召さなかったかー。男のくせに血に酔ってヒャッハーすることも出来ないなんて、情けないね。王子様」

敵はやはり、ヨハンたちの前に現れたときと変わらずに不動。

指一本動かさないままだ。

なのに、――そんな敵に何一つ出来ない。

（差が、ありすぎる……ッ）

それがどれほどなのか、理解すら出来ぬ程隔たる力。

瞬間、ヨハンの乗る軍馬と騎士槍が砂金のような粉となって散る。

霊装とは伐刀者の魂。

持ち主の心が崩れれば、霊装もまた崩れる。

そんなヨハンの姿に、

「あっ、そっか。女々しい王子様はこっちの方が好みなんだねっ。なら最初から言ってくれればよかったのに～」

この惨劇を生み出した邪悪は、今までで一等楽しそうな笑みを浮かべた。

「っ……!?」

その怖気を催す表情にヨハンは身構える。

まだ、まだ何かするつもりなのかと。

しかしいくら身構えようが、彼の身体はすでに邪悪の意のままであり――

ヨハンの身体は地面に降り立つと、事切れたエナリスの身体を引き起こし、

彼女の上着を力任せに引き裂いた。

まろびでる乳房に、ヨハンは邪悪の思惑を察し声を震わせる。

「まさか……っ」

絶望するヨハンに、邪悪――《傀儡王》オル＝ゴールは鮫のような歯を覗かせ、喜悦一杯の笑顔で告げた。

「もう死んじゃってるけど、まだ温いから気持ちいいと思うよ？」

◆◇◆◇◆

「アハ　アハ　アハ」

吹き飛んだ窓から差し込む月明かりだけが照らす薄闇の中。

機械的に肉を打ち付ける音を聞きながら、《傀儡王》は愉悦に身を震わせる。

先ほどまで声の限り許しを乞うていたヨハンだったが、今はもう嗚咽も零さない。

ただただ焦点の合わない目のまま、ブツブツと譫言のように謝罪の言葉を繰り返しながら身体を動かす。
純緑の霊装《地獄蜘蛛の糸》を通し、《傀儡王》には確かに伝わってきていた。
彼の心がひび割れ、ボロボロと崩れゆく音が。
――たまらない。
自分と同じ一つの命。
誰かに愛され、誰かを愛する、慈しむべき存在。
それを安物の人形のように、思うままに破壊するこの感覚。
胸を打つ悲しみ、空虚感、――それを大きく上回る恍惚。
一度知ったら、もう戻れない。
この破壊の刺激無しには生きていけない。
そしてその刺激は、強ければ強いほど良い。
「たのしみだなぁ」
《傀儡王》は恋い焦がれる。
国民、家族、最愛の恋人……。
それが全部壊れたとき、ステラはどんな顔をするのだろうかと。
「きっと、とっても可愛いんだろうなぁ……」
想像するだけで、総身に恍惚が走る。
身体の芯が熱くなり、とろりと溶け出す。
その刺激は、恍惚は、かつて彼女を破壊した時以上の悦びを自分にもたらしてくれるだろう。
――もう、我慢出来ない。
早く、彼女と遊びたい。早く、彼女で遊びたい。
でも、せっかく遊ぶなら、玩具は沢山用意しておかなければ。
《傀儡王》はそこで初めて、両手を動かした。

だぱついたサイズのあってないパーカーに覆われた両手を水平に掲げ、
――日では捉えられぬほど細い糸を伸ばす。
糸は吹き飛んだ窓を通り抜け、森の木々を縫い、街にいたり――
軍人を捕らえ、妊婦を捕らえ、子供を捕らえる。
そうして……少しずつ、少しずつ、作り上げていくのだ。
自らの王国――《人形王国》を。
捕らわれた人々も、今はまだ誰も気付かない。
知らぬまま、誰も彼もがかの者の人形になっていく。
糸はやがて、いくつものハブを設けてクレーデルラント全域に伸びていく。
それはさながら『根』だ。
クレーデルラント王国を苗床にする宿り木の根。
そしてこの宿り木が実を結ぶとき……それは始まる。
星の歴史に《ヴァーミリオン戦役》と記される戦争が。

◆◇◆◇◆

英国に存在する《国際魔導騎士連盟本部》
各支部の長官、または連盟が定める世界ランキング一桁の騎士しか立ち入ることが許されない区画の一室に二つの人影がある。
「――ああそうだ。フランス外務大臣のアレクシス氏が倒れた話。君も聞いているだろう。外遊先での会食中、まるで糸が切れたように倒れた、と。すぐに意識を取りもどしたので、ただの過労だろうということで一旦は落ち着いたが……、それが世界中の政財界関係者で、ほぼ同時刻に五百人以上となれば話は別だ」

一つは照明の落とされた部屋で、唯一光を発するはめ込み式のディスプレイの前に立ち言葉を発する青年。
もう一人は、部屋の四方に淀む闇のなかから彼の声を聞く長身だ。
青年はディスプレイを操作しながら、長身に説明を続ける。
「メディアと警察の情報を統合すると、政財界以外でも同時刻に千人近い人間が世界中で倒れていたことが確認されている。その殆どが熱中症患者として処理されたが、そんな偶然があってたまるか。そして我々連盟にとって決定的となったのが、世界同時多発熱中症の二日後、クレーデルラントで撮影されたこの映像だ」
言葉と共にディスプレイの表示される画像が変化する。
フードを目深に被った小柄。
直後、闇の中に立つ長身の影が揺れ、金属の擦れ合う音が発される。
動揺か。
青年は構わず言葉を続ける。
「こちらが持つパイプを使って裏に探りを入れたところ、どうやら奴の行動には《解放軍》の方にも大きな混乱が起きているようだ。
まあ、《十二使徒》の単独行動自体はそこまで珍しいものじゃない。
《解放軍》の連中は元々統率がとれているような連中ではないからな。
問題は……奴が人形でではなく、生身で日の当たる場所に出てきたということだ。
それも《解放軍》にとっての目であり耳であった人形のコントロールをすべて、勝手に手放した上で、だ。
何かするつもりなのか……、ただの気まぐれか……、現時点ではわからないが、動いたのがあの《傀儡王》オルゴールとなれば無視できる事態じゃない。……総合的な危険度で語れば、《解放軍》の盟主である《暴君》よりも遥かに厄介な《魔人》だ。――我々連盟としても最悪の事態に備える必要がある」
そして青年は、闇の中に佇む黒い甲冑に、強い視線を向け言った。
「ヴァーミリオンへ行ってもらうぞ。《黒騎士》アスカリッド。
この任務、君以上の適任は連盟にいない。
君は誰よりも、《傀儡王》の恐ろしさを理解しているのだから」

「――――」
この命令に《黒騎士》は外套を翻し、踵を返す。
そして部屋を出ていった。
肯定も否定も返さぬまま。
だが、その拳は怒りで強く握られていた。
――板金の継ぎ目から血が滴るほどに、強く。強く。

あとがき

こんにちわ。

猫の肉球をプニプニしていたらキックされた作者の海空りくです。

落第騎士の英雄譚十巻、ご購読ありがとうございます！

落第騎士シリーズもついに二桁巻！

これも読者さんが応援してくださったおかげです。

この十巻から落第騎士シリーズは『ヴァーミリオン皇国編』に突入します。

七星剣武祭も終わり、選手達が各々の未来へ歩き始める中、一輝達とステラの未来にかつてないほどの凶悪さと強大な力を持った邪悪が立ちはだかる羅刹の新章。

スケールもパワーも増し増しで書いていこうと思いますので、二人の未来、そして黒鉄一輝の英雄譚を楽しみにしていただければ幸いです。

……今回久しぶりに新キャラがドバッと出てきたので、七星剣武祭が始まって新キャラが出ず紹介するキャラが尽きて、なにげにここ二巻ほど休刊になっていたかがみんの破軍学園壁新聞も次の巻には復活させたいな……。

では最後にこの場を借りて関係者の方々にお礼を。

冬場に海空が倒れたせいでカツカツになった無理スケジュールに付き合ってくださった担当さんと編集部のみなさん。

みんなのおっぱいが見たいという私欲丸だしな理由で突っ込んだお風呂回絵リクエストに、素晴らしいイラストを描いてくださったをんさん。

そしてなにより、この落第騎士の英雄譚というシリーズを十巻まで支えてくださった読者の皆様。

本当にありがとうございました。

それではまた十一巻でお逢いしましょう。

著者
海空りく（みそら りく）
今回から新章『ヴァーミリオン編』がスタートです！
一輝は無事婿入りを果たすことが出来るのか・・・!?

イラスト
をん
福岡在住のイラストレーター。
落第騎士の英雄譚も10巻突入、イラストも楽しんでいただけるよう頑張ります！
http://ashybrid.nobody.jp/

ＧＡ文庫
落第騎士の英雄譚（キャバルリィ）１０

海空りく

発行人　小川　淳

発行所　ＳＢクリエイティブ株式会社
〒１０６－００３２
東京都港区六本木２－４－５

装　丁　　株式会社ケイズ（伴　勝／渡邊　萌）
印刷・製本　中央精版印刷株式会社

２０１６年４月３０日　初版第一刷発行
２０１６年５月１５日　電子第一版発行

©Riku Misora　ISBN 978-4-7973-8731-5

ファンレター、作品の感想をお待ちしています

＜Webページはこちら＞
http://www.sbcr.jp/products/4797387315.html

（このページのスクリーンショットを撮って、ＱＲコードリーダーアプリで読み取れば紹介ページにアクセスできます。問合せのリンクよりお寄せ下さい。）

〈あて先〉
〒１０６－００３２
東京都港区六本木２－４－５
ＳＢクリエイティブ（株）
ＧＡ文庫編集部 気付

「海空りく先生」係
「をん先生」係

http://ga.sbcr.jp/

落第騎士の英雄譚（キャバルリー）

10

海空りく
RIKU MISORA
Illust をん

GA文庫

落第騎士の
英雄譚
キャバルリィ
10

わずかな攻防を通じて二人は理解する。
一人では手に余る相手だと。

『イッキ！
こいつ、もしかしてあの……！』

わずかな攻防を通して二人は理解する。
一人では手に余る相手だと。
「ステラ！　僕に続いてくれッ！」

少女たちはひとときの
休息を楽しむ――。

少女たちはひとときの
休息を楽しむ――。

「――ッ、」
侵入しようとした瞬間、眼が合った。
部屋の中。
絶句する、――下着姿の女性と。

「ッ、」

侵入しようとした瞬間、眼が合った。
部屋の中。
絶句する、――下着姿の女性と。